

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和4年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和5年10月26日

## はじめに

令和4年度（2022年度）の国立国語研究所の業務実績に関する外部評価報告書をお届けします。令和4年度は、ふたつの点で特徴的な年度になりました。ひとつは、令和4年度末をもって前所長の田窪行則が勇退したことです。所長交代にともなって、外部評価委員会のメンバーにも入れ替わりがありました。新委員会の人選にあたっては、機関拠点型研究を構成する各プロジェクトの専門性の観点に照らして、高い見識をそなえた方々をお迎えすることは当然として、同時に、これまでに蓄積された評価のノウハウも継承できるよう、一部の委員には留任していただきました。

令和4年度のもうひとつの特徴は、第4期中期目標期間（2022-2027年度）の初年度にあたることです。これは言うまでもないことですが、研究プロジェクトの運営にとって、初年度は格別に大切です。うまくスタートダッシュをきめて、そのままゴールを目指せばよいのですが、最初に大きな問題に遭遇して、その解決に時間をとられるプロジェクトもあります。しかし、おそらく一番怖れなければならないのは、どこかに問題を抱えているプロジェクトでありながら、実施担当者やその周囲の人間がそれに気づくことができずにいる場合でしょう。プロジェクトの終盤になって問題に気づくというような事態は何としても避けたいところです。外部評価委員会の先生だけでなく、研究所員もまた少くない時間を割いて、自己点検評価や外部評価を実施する最大の意義は、実にこのような危険を予知して回避するところに認められるのだらうと思います。もちろん、順調に進んでいるプロジェクトにあっては、そのことを外部の人間の眼であらためて確認してもらうことによる精神衛生上の利点があることは言うまでもありません。今回の評価結果をみると、このような外部評価の機能は十分に発揮されているのではないかと思います。

第3期中期目標期間（2016-2021年度）の終盤2年間は、新型コロナウイルスの影響で、フィールドワークや対人実験がほとんど実施できず、インターネットを介したオンライン調査やアンケート等の工夫に頼る必要がありました。幸い第4期に入ってから感染症は下火となり、フィールドワークなども順次復活させることができています。さらに令和5年度からは総合研究大学院大学日本語科学コースによる大学院教育（博士後期課程）が始まり、国立国語研究所も、大学共同利用機関法人への移管後14年を経て、大学共同利用機関にもとめられる機能をフルに発揮することになります。私ども所員一同、今後とも、国立国語研究所のより一層の発展のために努力を重ねていく所存ですので、ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

令和5年10月

国立国語研究所長 前川 喜久雄

## 目 次

評価結果報告書 .....	1
令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告 .....	3
令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果 .....	13
令和4年度基幹型プロジェクトの評価 .....	16
機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧 .....	16
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告 .....	17
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価報告 .....	45
「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告 .....	47
「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告 .....	72
「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告 .....	74
「消滅危機言語の保存研究」評価報告 .....	80
「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告 .....	82
「多文化社会における言語問題に関する研究」評価報告 .....	88
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告 .....	90
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価報告 .....	97
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告 .....	98
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告 .....	128
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告 .....	130
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告 .....	135
令和4年度 センターに関する評価 .....	137
「言語資源開発センター」自己点検評価報告 .....	138
「言語資源開発センター」評価結果 .....	142
「共同利用推進センター」自己点検評価報告 .....	144
「共同利用推進センター」評価結果 .....	149
「令和4年度管理業務」に関する評価 .....	151

資料	156
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	157
2. 国立国語研究所令和4年度業務の実績に関する評価の実施について	158
3. 国立国語研究所外部評価委員会規程	160
4. 国立国語研究所外部評価委員会【令和4年度実績評価】（第1回）議事次第	162

## 評価結果報告書

令和4年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和5年10月26日 国立国語研究所外部評価委員会【令和4年度実績評価】(第1回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会  
委員長 片桐 恭弘

## 国立国語研究所令和4年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の令和4年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 7つの共同研究プロジェクト（「語彙資源」、「理論対照」、「危機言語」、「言語問題」、「多世代会話コーパス」、「言語運用」、「通時コーパス」）、(3) 2つのセンター（言語資源開発センター、共同利用推進センター）、(4) 「管理業務」である。

令和4年度のプロジェクト全体に対する評価は「計画通り達成した」であり、(1) 研究体制、(2) 共同利用・共同研究、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値する。7つの共同研究プロジェクトの総合評価は、A（計画を上回って実施した）が4、B（計画どおりに実施した）が3であり、全体的に充実した研究が行われている。2つのセンターの評価はいずれもB（計画どおりに実施した）で、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が見られた。管理業務については、A（計画を上回って実施）が3、B（計画通り実施）が1で、全体的にきわめて良好な業務運営が行われている。

以上のように、外部評価委員会は、令和4年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。令和4年度も、前年度に続き工夫を凝らして研究活動を進め、日本言語学会論文賞を始めとする複数の受賞、De Gruyter Mouton社を始めとする学術書籍出版など、高い水準の研究活動を行ったことは賞賛に値する。

本プロジェクトは、オープンデータ・オープンサイエンスに根差し、先進的なケース・スタディ、多様なコーパス開発、人材育成、国内外の研究共同体制構築を含む、日本語研究を大きく発展させる可能性を有する、国際的にも最重要な日本語研究プロジェクトと位置づけられる。外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識し、最終年度まで高い研究水準を維持し、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和5年10月

外部評価委員会  
委員長 片桐 恭弘

# 令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告

## 機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

代表者：前川 喜久雄

### 1. 第4期中期計画

国立国語研究所は、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画及び評価指標として以下を掲げている。

日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進：学術的・社会的要請に対応した大規模な言語資源開発や言語調査を実施し、その実証的データに基づく理論的・応用的日本語研究を国内外の研究者や大学等研究機関と連携して推進するとともに、研究所が有する研究資料・言語資源等を活用した公募型共同研究及び異分野融合による公募型共同研究を実施する。これにより、新たな研究領域を創出し、日本語研究及び日本語教育研究を先導する国際的学術研究拠点としての機能を強化する。

- 評価指標
- ・国語研究所が提供する言語のデータベース（言語資源）の利用登録者数，検索クエリ数，言語資源を活用した論文数を，第4期中に，5万人以上，1,200万件以上，3,000本以上とする。
  - ・新領域「言語資源学」の創出に関わる研究シリーズを立ち上げ第4期中に4冊以上刊行する。

### 2. 機関拠点型プロジェクトの構成

上記の計画を達成するために、「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」という4つの研究領域を設定し、領域ごとに次に示す6つの研究班を構成して機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を実施するとともに、言語資源開発センターのプロジェクトとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進することで、オープンサイエンス・オープンデータの体制を強化する。

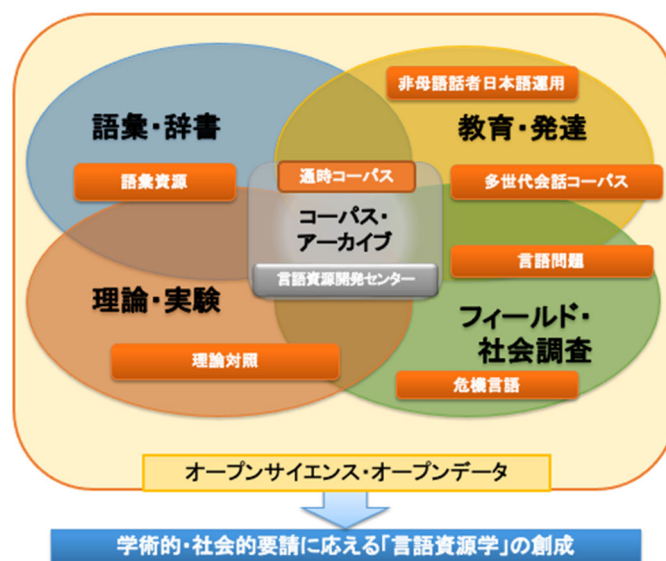


図1 機関拠点型プロジェクトと領域

## 機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

- ・「語彙資源班」多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創（小木曾智信）
- ・「理論対照班」実証的な理論・対照言語学の推進（浅原正幸）
- ・「危機言語班」消滅危機言語の保存研究（山田真寛）
- ・「言語問題班」多言語・多文化社会における言語問題に関する研究（朝日祥之）
- ・「多世代会話コーパス班」多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究（小磯花絵）
- ・「非母語話者日本語運用班」多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究（石黒圭）

## 言語資源開発センター 基幹研究プロジェクト

- ・「通時コーパス班」開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張（小木曾智信）

### 3. 令和4年度の研究体制

#### (1) 研究班の体制

令和4年度は6年計画の初年度にあたる。上記計画を達成するために、7つの研究班では次の計画で令和4年度の研究を進めた。

- ・語彙資源班：サブグループ「辞書使用調査」「空間接続」「学習者辞書」「語彙資源ポータル」「基本語機能語バンク」を組織し、各種語彙資源のデータ整備を進めるとともに、形態素解析用辞書のデータベース検索ツールの公開、形態素解析用辞書の更新・公開などを行う。
- ・理論対照班：サブグループ「アノテーション」「イントネーション」「計算言語学」「体言化」「述語の意味文法」を組織し、各種アノテーションの整備、諸言語の動詞や日本語・琉球諸語のイントネーションに関する調査などを進める。また国際シンポジウムを開催する。
- ・危機言語班：危機言語のフィールド調査を進めるとともに、危機言語データベースをリニューアルする。危機言語サミットや市民科学者育成のための研修会などを開催する。
- ・言語問題班：社会調査データの実施とデータの整備などを進めるとともに、研究発表会を開催し、研究成果をまとめた書籍・論文を刊行する。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校での話し合い活動を対象とするコーパスなどの整備を進めるとともに、コーパス活用のための講習会を開催する。
- ・非母語話者日本語運用班：サブグループ「学習者作文」「学習者談話」「作文教育支援」「生活者談話」「生活者識字」を組織し、海外の大学と連携し作文・談話データを収集するとともに、作文教育支援システムの設計や定住外国人の談話縦断調査、よみかき実践調査を実施する。
- ・通時コーパス班：『昭和・平成書き言葉コーパス』や『日本語歴史コーパス』増補データを整備して公開する。またコーパスを活用した日本語史研究に関する書籍を刊行する。

これらの研究班は、(1)異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件や、(2)研究所の共同利用性を高めるために2020年度から開始した、研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する3種類の共同利用型共同研究25件、(3)人間文化研究機構・共創先導プロジェクト4件、(4)人間文化研究機構・広領域連携型2件と連携して調査・研究を推進した。各班は、研究者ネットワークを構築するために、表1の通り国内外の研究者を共同研究員として組織して研究を進めた。

表1 共同研究員数

(人)

研究班	共同研究員数	所外共同研究員 (内数)	PD, 大学院生数 (内数)	海外 (内数)
語彙資源班	138	119	6	18
理論対照班	170	147	20	16
危機言語班	75	60	8	5
言語問題班	36	27	2	7
会話コーパス班	120	109	13	4
日本語運用班	114	100	14	44
通時コーパス班	36	30	2	3
計(延べ数)	689	592	65	97

## (2) 進捗状況の管理や評価の体制

各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。また言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。

## (3) 共同利用・共同研究拠点の強化の取り組み

言語資源等の共同利用を更に促進するために「研究情報発信センター」を「共同利用推進センター」に改組、またコーパスに留まらない言語資源の開発・研究を加速し新領域「言語資源学」を創成するために「コーパス開発センター」を「言語資源開発センター」に改組した。

研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」について、今年度は新規に14件（継続を含めて計25件）採択し、共同利用・共同研究拠点の強化につとめた。また共同利用型プロジェクトや利用可能な研究資料等の周知を目的に「2022年度共同利用セミナー」を令和4年9月12日にオンラインで開催し、共同利用型プロジェクトの成果発表と研究所の収蔵資料群の紹介を行った。

## (4) プロジェクト間の連携体制

機関拠点型プロジェクトの6年間の計画と初年度実績を紹介するために、全ての班が参加するNINJALシンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」を令和4年12月10日にオンラインで開催した。

## (5) 大学・研究機関との連携体制

既存の協定30件（国外15件、国内15件）に加えて、謡曲データベース構築に関する共同研究を進めるために野上記念法政大学能楽研究所と令和4年9月に学術交流協定を、またマラティー語の方言における体言化に関する共同研究を進めるためにデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートと令和4年7月に学術交流協定を新規に締結し、連携体制を強化した。

## 4. 令和4年度の活動内容

### 4. 1. 調査研究活動・研究成果の公開

#### (1) 各班の活動の概要

各班は、3(1)に示した令和4年度計画に従い次の通り活動した（詳細は各班の自己点検評価報告書参照）。

- ・語彙資源班：海外6カ国の日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査や、「日本語格助詞データベース」の見出し語の執筆などを進めるとともに、形態素解析用辞書UniDicや形態素解析用辞書の検索ツールUniDicExplorer（試験版）、言語地図画像データ、IPAL PowerBI レポート・html版などを作成して公開した。いずれも計画通り語彙資源の整備・公開を進めたが、学習者の辞書ツール使用調査は特に海外での調査で予定を大きく上回って実施した。
- ・理論対照班：日常会話コーパス係り受けアノテーションや分類語彙表に基づく形容詞・動詞結合価データベースを作成・公開するとともに、電話会話コーパスのアノテーション、琉球語方言のイントネーション調査、体言化に関するフィールドワーク、動詞類についてのデータ収集を進めるなど、計画通りデータ整備・調査を進めた。また国際学会 HPSG 2022（名古屋大学と共催）および NAMED 2022（京都大学と共催）や国際ワークショップ7件を開催した。
- ・危機言語班：13地点計23回のフィールド調査を行い各地点の地域言語データを収集するとともに、消滅危機言語・方言のデータを紹介・公開する「危機言語データベース」のリニューアル（語彙データベースに出典情報と同源語IDを追加するなど機能拡張）をするなど、計画通り調査等を進めた。また危機言語サミット（奄美大会）や、地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を目的とする研修会・出前授業・講座を開催した。
- ・言語問題班：全国規模の社会調査（行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査、外来語使用実態調査）を2件、特定地域・地点を対象とした調査（略字・俗字に関するweb調査、音韻調査、アクセント調査、言語景観調査）を16件実施するとともに、調査データの整備を進めるなど、計画通り研究を進めた。また研究発表会を3月11日、12日にオンラインで開催するとともに Handbook of Japanese Sociolinguistics (De Gruyter Mouton 社)を刊行した。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校・幼稚園での話し合い活動の収録およびコーパス整備を進め、子どもの日常会話17時間について共同研究員に限定して公開するとともに、『日常会話コーパス』リレーショナルデータベースを新規に構築・公開、『名大会話コーパス』の形態論情報を人手修正して再公開するなど、計画通りコーパス整備・公開を進めた。また若手研究者や大学院生を主対象とする講習会・チュートリアルを3回開催した。
- ・非母語話者日本語運用班：海外の18大学と連携して学習者の作文談話データを、海外の15大学と連携して学習者の談話データを収集するとともに、定住外国人の日本語会話の縦断調査や作文添削支援システムの設計を行った。いずれも計画通り調査等を進めたが、令和5年度公開予定だった談話データベース（中国の学習者約136時間）を年度内に公開したほか、当初計画になかったベトナム・タイの学生にまで広げて調査を実施した。
- ・通時コーパス班：『昭和・平成書き言葉コーパス(SHC)』や『日本語歴史コーパス(CHJ)』増補データの整備を進め、SHC 試験版とCHJ 増補データ9件を公開するとともに、オックスフォード大学と連携してオックスフォード・NINJAL 上代語コーパスの検索インターフェイスに辞書機能を追加するなど、計画通りコーパス整備・公開を進めた。また『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』（ひつじ書房）の刊行や若手を対象とするコーパス講習会を2回行った。

## (2) 研究成果の発信

- ・各班は計 22 件の共同研究発表会を開催してプロジェクトの活動を推進するとともに、16 件の国内シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ 2749 人）、10 件の国際シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ 563 人）を開催して研究成果を広く発信した。このうち Evidence-based Linguistics Workshop(9月5・6日)は神戸大学人文科学研究科との学术交流協定に基づき共同開催されたものであり、発表の公募も行うなど大学と連携して運営した。また3件の国際シンポジウム・ワークショップ等は、国際学术交流協定を締結している海外の大学3校とそれぞれ共催で開催したものである（詳細は 4.4「国際連携・国際発信」参照）。
- ・研究成果をとりまとめ、5冊の書籍を国際出版、6冊の書籍を国内出版、2冊の報告書をホームページで公開した。国際出版5冊のうち3冊は、De Gruyter Mouton 社との出版協定に基づくシリーズで刊行されたものである（詳細は 4.4「国際連携・国際発信」参照）。
- ・共同研究員を含む国語研の研究者を中心として、研究活動・成果を報告し情報交換を行う場である NINJAL サロンを 10 回（参加者延べ 400 人）、国内外の優れた研究者による講演会である NINJAL コロキウムを 11 回（参加者延べ 484 人）開催した。
- ・プロジェクトを中心とする研究所の研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として『国立国語研究所論集』第 23 号（7月）・24 号（1月）を刊行した。

## (3) 言語資源・ツール等

- ・外部機関と連携して言語資源・検索ツール等の整備を行い、①コーパス 3 件、データベース 6 件、アノテーション 1 件、辞書 2 件、映像画像データ 25 件、ツール等 1 件の新規公開、②コーパス 8 件の追加公開、③コーパス 2 件、辞書 2 件、ツール等 2 件の更新、④データベース 1 件の機能拡張を行った。新規公開のコーパス 3 件とツール 1 件は、日本語を学習している中国語母語話者の発話及び作文データを 4 年間に渡って収集した『北京日本語学習者縦断コーパス』、1933～2013 年の期間 8 年おきに各年約 300 万語の雑誌・ベストセラー書籍を納めた『昭和・平成書き言葉コーパス』、日本経済新聞社が研究用途に無償公開した 96 記事に形態論情報・係り受け情報を人手で行い CC BY-NC-SA で公開した『日本経済新聞記事オープンコーパス』、及び、中納言で公開している歴史コーパスの形態論情報の誤りを利用者が報告できるコーパス形態論情報修正システム「みんなごん」である。

- ・コーパスの一部は言語資源開発センターが管理するオンライン検索システム「中納言」で公開されており、ユーザ総数 44,941 人、うち令和 4 年度の新規登録ユーザ数は 7,945 人、利用登録コーパス数は 24.7 万件以上、年間検索数は 220 万件以上と、広く研究に活用された（図 2）。

なお、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第 4 期中期計画の評価指標を「言語資源の利用登録者数・検索クエリ数を第 4 期中に 5 万人以上、1,200 万件以上」としているが、この数値は、第 3 期 2020 年度までの 5 年間の実績（利用登録者数 2.5 万人、検索クエリ数 500 万件（100 万件/年）を踏ま

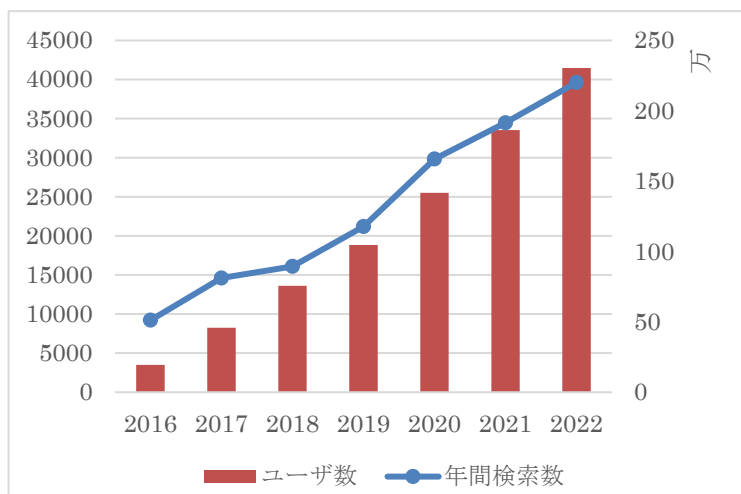


図 2 「中納言」登録ユーザ数(左軸)・年間検索数(右軸)

え、第4期の6年間で2倍以上にすることを目標に設定したものである。令和4年度もコーパス関連の講習会や授業、コーパス関連書籍等を通じてユーザ層を広げたことから、今後も同様に活動を続ければこの目標を達成することができる見通しである。また言語資源を活用した論文数について、第3期の1.4倍に相当する3,000本(年500本)を指標に掲げている。論文数については現在集計中であるが、現時点で439件であり、令和4年度については年500本を下回る可能性が高い。今後、講習会等を通じて言語資源を活用した研究の活性化を図る。

#### (4) 共同利用性向上の取り組み

共同利用推進センターが中心となり各班と連携しながら以下の取り組みを実施した。

- ・国語研の研究成果のオープンアクセス化を加速させるため、オープンアクセス方針に沿って言語資源等を含む研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を進めた。今年度追加219件、総数3,020件となった。ダウンロード回数26.3万である。
- ・日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に5,742件を追加登録しセッション数は19万となった。
- ・研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は18件、収蔵資料目録試行版の追加登録は1,809件、セッション数は5,700となった。
- ・国立国語研究所が所蔵する音声・映像資料の媒体変換(デジタル化)を進め、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充した。音声資料173件、映像資料46件を追加した。

#### (5) 異分野融合研究

- ・I-URIC 機構間連携プロジェクト(高エネルギー加速器研究機構・情報・システム研究機構など複数の大学共同利用機関が関わるプロジェクト)に参画し、短歌を読む際の情動に関する脳活動の解析などの研究に協力した。またIU-REAL 異分野融合・新分野創出プログラム2023年度スタートアップ「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理的解明」が採択された。
- ・異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件を採択し、国語研教員3名がコーディネーターとなり連携して研究を進めた。

## 4. 2. 教育・人材育成

### (1) 大学との連携による教育

- ・一橋大学大学院言語社会研究科との協定に基づき教員3人が授業を行ない、博士学位論文審査の副査1件を担当した。また東京外国語大学大学院国際日本学研究院とのクロスアポイントメント制度により教員2人が授業を担当したほか、NINJAL ユニット講演会2件を開催した。
- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」の2023年4月開設に向けて設置準備を進めるとともに、令和4年9月10・13日に所内で大学院説明会を開催したほか、言語処理学会など8つの学会でブースを出展し、広報を行った。

## (2) 若手人材の育成

- ・若手研究者のキャリアパスとして特任助教1人とプロジェクト非常勤研究員72人を雇用したほか、日本学術振興会の特別研究員PDを1名受け入れ、プロジェクトへの参画などを通して実践的に日本語研究を推進できる人材の育成につとめた。その成果を含む著書が2022年度田島毓堂賞(学術賞)を受賞、また論文が令和4年度日本言語学会論文賞を受賞した。またテニュアトラック助教が情報処理学会2022年度山下記念研究賞を受賞した。
- ・故宮地裕氏(大阪大学名誉教授)の遺志に基づいた寄附金により、日本語研究の振興及び優秀な若手研究者の奨励・育成のために、令和4年6月に宮地裕日本語研究基金を創設し、基金の事業として「宮地裕日本語研究基金学術賞」「宮地裕日本語研究基金学術奨励賞」「総研大日本語言語科学コース特別奨学金」「総研大日本語言語科学コース学生会発表支援金」を設けた。「宮地裕日本語研究基金学術賞」「宮地裕日本語研究基金学術奨励賞」について、11月1日から1月10日かけて公募し、予備審査・一次審査を行った。なお令和5年5月に若手研究者2人の学術奨励賞の受賞が決定した。
- ・若手研究者を育成するために、各班の研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を14回開催し、合計で704人が参加した(「機関拠点型R4\_別添資料.xlsx」シート「講習会」参照)。このうち1回は、韓国日語教育学会及び韓国日本語学会との学術交流協定に基づいて開催されたものである。また8回はコーパス利用のための講習会とした。こうした取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを126件、計4,216人の学生等に発行するなど、コーパスが授業で広く活用された(「機関拠点型R4\_別添資料.xlsx」シート「中納言授業用アカウント」参照)。
- ・新領域「言語資源学」に関する研究シリーズを立ち上げるために、各巻の構成、担当者、執筆者を概ね確定させた。また、紙媒体での出版に加えてオープンアクセスでの電子出版の可能性をいくつかの出版社に打診し、最終的に1社から出版の承認を得た。
- ・大学生・大学院生向けに「言語学レクチャーシリーズ」パイロット版を新たに5本作成してYouTube国語研チャンネルにて公開し、既公開分とあわせ年間63,200回再生された。
- ・若手研究者のモチベーションを高めるために、「言語資源ワークショップ2022」において若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与した。

## (3) 社会人の学び直しへの貢献

- ・日本語教師等を対象とする「NINJAL日本語教師セミナー」を国内外で1回ずつ開催し、延べ195人のスキルアップに貢献した(表2)。

表2 日本語教師セミナー等一覧

イベント名	開催場所	開催日	参加者数
NINJAL日本語教師セミナー(海外)『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』とNCRB(Natural Conversation Resource Bank)の開発の趣旨と日本語教育における活用法	中国文化大学 国立高雄科技大学	R5/3/4-5	78
NINJAL日本語教師セミナー(国内)「スマホを使った日本語学習者の辞書検索を支援するー世界の日本語学習者の辞書ツールの使用実態からー」	オンライン	R5/3/9	117

#### 4. 3. 社会連携・社会貢献

##### (1) 研究成果の社会への普及

- ・研究成果を分かりやすく一般に向けて発信するフォーラム・イベント等を開催した（表3）。令和4年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年度に引き続き学生や一般向けのイベントであるオープンハウスやニホンゴ探検をオンライン開催し、13件の動画コンテンツを公開したところ、9,648件の参加（アクセス）があった。

表3 一般向けフォーラム・イベント等一覧

公開日	イベント名	開催場所
R4/8/1	ニホンゴ探検 2022	オンライン
R4/9/1	国立国語研究所 オープンハウス 2022	オンライン
R5/2/18	第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」	オンライン

- ・研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷，9刷，計8,000部。累計発行部数71,000部）された。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したもので、電子書籍，オーディオブックでも継続して配信されている。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において，ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」26本および各種催し物，メディア掲載情報など，ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』をリニューアルし，Vol.12を3月に刊行した。
- ・ことばの研究を通じて学問の楽しさを知ってもらう中学生・高校生対象のNINJAL職業発見プログラムとして，新潟県立国際情報高等学校の生徒19人（7月29日），新潟県立長岡高等学校の生徒23人（10月7日）など5件70人を受け入れ，ことばに関する講義や研究所見学を実施した。また，小学生向けのNINJALジュニアプログラムとして，2月9日に国分寺市立第三小学校6年生145名を対象に，キャリア教育の一環として研究者という職業についての出前授業を実施した。

##### (2) 地方自治体との連携

- ・消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港」活動を継続して行った結果，「島独自の言葉で語られる昔話を絵本の形で残したり，島民の協力を得ながら，親子で楽しむ本の読み聞かせ活動を行ったりするなど，次世代にその地域言語が継承されるよう持続可能な言語復興をスローガンに掲げ活発に取り組んでいる」として，ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から，沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的としたオーキッドバウンティ賞を2023年2月に受賞した。
- ・危機言語・方言の保存・継承活動のネットワーク的機能をもつ「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）沖永良部」を文化庁や地方自治体等と共催で2023年1月28-29日に開催した。今回のサミットでは新たに「ブース発表」を設け，各地で継承保存を行っている9組が取り組みを発表し，研究成果を地域に還元するだけでなく，来場者と合わせて情報交換を行う機会を設けた。国語研からも2人がブース発表に参加した。
- ・鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）や鹿児島県大島郡和泊町との協定に基づき，知名町中央公民館講座町職員研修会（毎月1回開催）や和泊町職員方言研修会，町広報誌での連載な

どを通して、地域言語コミュニティ内で地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を行った。

### (3) 産学連携

- ・コーパスを活用した産学連携研究として、民間企業5社と共同研究を行った。リクルート社やLegalOn社との共同研究に基づき、同社から係り受け解析の新しいモデルと形態素解析モデルをそれぞれ公開した。
- ・小学館出版局との連携協定の下で「新編日本古典文学全集」を活用して『日本語歴史コーパス』の更新を行い、JapanKnowledge本文へのリンクを継続した。
- ・作文の自動評価システム開発のため、富士通の富士通研究所を中心としたAIの専門家と連携して研究を進めた。

## 4. 4. 国際連携・国際発信

### (1) 国際的協業

- ・海外機関に所属する研究者延べ97人を共同研究員に加え、海外の研究と連携を図りながら共同研究を推進した。また、海外の研究者3人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。
- ・次の通り海外の機関・研究者と連携して調査を進めた。
  - ・作文データ調査：中国7大学、台湾2大学、韓国2大学、ベトナム3大学、タイ1大学、フランス1大学、スロヴェニア1大学、イギリス1大学の計18大学との共同調査体制を構築し、学習者936人（開始時）を対象に作文データの調査を行い、計1754本の作文データを収集した。国際的な研究拠点を形成して調査の連携を高めるために、中国の天津外国語大学、台湾の東呉大学、韓国の韓国外語大学校とは学術交流協定を締結しているが、連携をより強化するためにベトナムのドンア大学とも協定締結に向けて準備を進めた。
  - ・談話・作文のオンライン縦断調査：中国の西安外国語大学、ベトナムのベトナム国家大学ハノイ校外国語大学、タイのチュラーロンコーン大学と連携し、大学の学生を対象に談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。更に連携を強化するために西安外国語大学と学術交流協定提携の準備を進めた。
  - ・辞書ツール使用実態調査：韓国・中国・台湾・ベトナム・ドイツといった海外の大学と連携し、各国の大学に通う日本語学習者（計97人）の辞書ツール使用の実態調査を行った。
  - ・オックスフォード・NINJAL上代語コーパス：オックスフォード大学との学術交流協定にもとづき『オックスフォード・NINJAL上代語コーパス』の開発を継続して行い、令和4年度は検索インターフェイスに辞書機能を追加してウェブページの更新を行なった。

### (2) 研究成果の国際的発信

- ・研究成果を国際発信するために、De Gruyter Mouton社とOxford University Press社から5冊の書籍を出版した（表5）。このうち2冊はDe Gruyter Mouton社との協定に基づくHandbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（HJLL）の8巻と12巻であり、これにより全12巻のうち10巻の刊行が終了した。同社とは第3期に、国際シンポジウム等の成果を英語で発信するためのシリーズMouton-NINJAL Library of Linguistics（MNL）の出版協定を結び、令和4年度にはじめて、所員が編集に携る1冊を含む2冊が刊行された。また2021年には危機言語に関するオンライン叢書シリーズEndangered and Lesser-Studied Languages and Dialects（ELSL）の出版協定をオランダのBrill社と締結し、令和4年度にはじめて第3期の危機言語プロジェクトの

成果を含む1冊がオープンアクセスで刊行された（編者が国語研外の共同研究員であるため表5には含めていない）。

表5 国際出版の書籍一覧

著者・編者	書名	出版社
Y. Asahi, M. Usami & F. Inoue (Eds.)	Handbook of Japanese Sociolinguistics (HJLL)	Mouton
A. Bugaeva (Ed.)	Handbook of the Ainu Language (HJLL)	Mouton
H. Hoji, D. Plesniak & Y. Takubo (Eds.)	The Theory and Practice of Language Faculty Science (MNLL)	Mouton
M. Yamazaki et al. (Eds.)	Quantitative Approaches to Universality and Individuality in Language	Mouton
H. Kubozono, J. Ito & A. Mester (Eds.)	Prosody and Prosodic Interfaces	Oxford Univ. Press

- ・令和4年度は10件の国際シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ563人）を開催して研究成果を広く発信した（「機関拠点型 R4\_別添資料.xlsx」シート「シンポジウム等」参照）。このうち3件は、学術交流協定を締結しているハワイ大学マノア校，デカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート，及びインド工科大学マドラス校と共催で開催したものである。
- ・日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち，その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し，Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点を追加公開した。

## 令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果

プロジェクト名：「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

令和4年度の評価

《達成状況の評価結果》

計画通り達成した

(判断理由等)

国立国語研究所は機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画に、日本語・日本語教育分野における大規模言語資源開発・言語調査の実施、実証的データに基づく理論的・応用的日本語研究の推進、異分野融合による共同研究実施、新たな研究領域の創出、国際的学術研究拠点機能強化を挙げ、研究推進の評価指標として、言語資源の利用、言語資源を活用した論文、学術書籍出版に関する定量的指標を設定している。

この計画の下で「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」の4研究領域を設け、6研究班を構成して研究推進に当たり、多世代会話コーパスをはじめとする各種コーパスの収集、辞書ツール・コーパスアノテーションの整備、危機言語データベース拡充、日本語学習者作文データの収集を着実に進め、国内外の大学・研究機関との連携、若手研究者の育成を通じて言語資源を活用した日本語の実証的・応用的研究を積極的に推進している。その成果として各種言語資源の構築と国内外でのアクセスの増加、学術書の国際出版5冊をはじめとする優れた学術的成果を創出した。また、26回にのぼる多くの国際・国内シンポジウムを開催して研究成果発信を行っている。

これらの活動は大学・大学院教育への参画による教育・人材育成、日本語教師セミナー開催による日本語教師の学び直し・スキルアップ、IT系企業との産学連携による自然言語処理モデル開発、地方自治体との連携による地域言語記録・継承を担う市民科学者育成など多岐にわたる有意義な貢献へとつながっている。

プロジェクト活動の順調な継続によって第4期中の各種評価指標は達成の見通しである。令和4年度の研究プロジェクトは計画通り達成したと判断する。

### 【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

#### (1) 研究体制について

機関拠点型プロジェクト実施のために「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」の4研究領域を設け、語彙資源班、理論対照班、危機言語班、言語問題班、多世代会話コーパス班、非母語話者日本語運用班、通時コーパス班の6研究班を構成し、言語資源開発センターとの協力の下で研究推進にあたっている。共同研究プロジェクト推進会議、プロジェクト横断コーパス会議を定期的に開催して各班の研究進捗管理を行っている。研究班には異分野融合型共同研究、共同利用型共同研究、人間文化研究機構における連携プロジェクトが含まれ外部研究者との連携、研究者ネットワーク構築にも配慮されている。これらのことから「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の推進に必要な体制が適切に組織されていると判断される。

大学との連携に関しては、国内8大学、国外13大学と協定を締結して大学の教育・研究・地域貢献活動の強化に貢献している。さらに120にのぼる大学の講義において学生向けに言語資源検索用の

中納言アカウントを継続して発行して言語資源の教育・研究の発展を支援していることは特筆に値する。

## (2) 共同利用・共同研究について

形態素解析用辞書 UniDic など辞書ツールの作成・公開，日常会話コーパス係受けアノテーション作成・公開，社会調査，フィールド調査に基づく危機言語データベースの拡充，多世代会話コーパスの整備，日本語学習者の作文談話データの収集，通時コーパスの整備・公開，それらに合わせた学術書籍の出版が順調に進展しており，コーパス 3 件，データベース 6 件，アノテーション 1 件，辞書 2 件，映像画像データ 25 件，ツール等 1 件の新規公開，コーパス 8 件の追加公開，コーパス 2 件，辞書 2 件，ツール等 2 件の更新，データベース 1 件の機能拡張が行われた。言語資源検索システム中納言の利用者数・検索数は順調に増加しており，利用者数 5 万人，検索数 1,200 万件という第 4 期中期計画の評価指標は達成可能との見通しを得ている。書籍についても，国際出版 5 冊，国内出版 6 冊，報告書 2 冊を公開している。研究業績の量的側面については順調，一部予定を上回る成果を挙げていると判断される。

De Gruyter Mouton 社，Oxford University Press から学術書 5 冊を出版していることを高く評価できる。また，ひつじ書房から「コーパスによる日本語史研究」の学術書を出版，国立国語研究所論集 23, 24 号を刊行など学術的意義の高い成果をあげている。計 22 回にのぼる共同研究発表会の開催，国内外の大学との学術交流協定に基づく共催シンポジウム・ワークショップを含む 26 件のシンポジウム・ワークショップの開催を通じて研究成果発信と研究者交流の社会的意義の高い活動を積極的に実施している。

国内 16 機関，国外 16 機関と学術交流協定を締結し，日本語研究・日本語教育に関する共同研究を組織的に進めている。その一環として神戸大学との共催による Evidence-based Linguistics Workshop など学術交流協定大学との共催でシンポジウム・ワークショップを開催した。国内外の大学・研究機関との組織的で有意義な連携を実現している。

共同利用推進センターが中心となって進められている，言語資源を含む研究成果のオープンアクセス化加速の活動，国立国語研究所学術情報リポジトリ，日本語研究・日本語教育文献データベース，国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベースなどの拡充も，国内外の大学・研究機関との連携拡大につながる着実な活動として評価できる。

複数の大学共同利用機関が関わる機構間連携プロジェクト，異分野融合・新分野創出プログラムに参画して，情動の脳活動解析や素粒子実験データ解析技術のテキスト研究への応用など，異分野研究者との共同による挑戦的研究テーマに積極的に取り組んでいる。

これらの研究成果から，計画通り研究業績が積み重ねられていると判断される。

## (3) 教育・人材育成について

一橋大学大学院言語社会研究科，東京外国語大学国際日本学研究員との協定あるいはクロスアポイントメント制度を利用して授業担当・大学院生指導に携わった。また，総合研究大学院大学での日本語言語科学コース開設に向けた設置準備を進めている。国立国語研究所の研究成果を大学教育に展開する活動として高く評価される。

国立国語研究所で開発した言語資源にアクセスするツールとして整備されている中納言システムの大学における利用促進のためにアカウント発行を継続的に進めており，120 にのぼる大学その他の教育機関で利用されている。研究成果を活用した言語資源に基づく日本語・日本語教育研究を発展のための教育的普及活動として高く評価できる。

若手研究者を特任助教、プロジェクト非常勤研究員として雇用して若手研究人材の育成に取り組んでいる。その成果の著書・論文が出版賞や日本言語学会論文賞受賞に結びついている。若手研究者育成のためのチュートリアル・講習会を定期的を開催して若手研究者の研究レベル向上に取り組んでいる。日本語教師セミナーを国内外で開催して日本語教師の学び直し・スキルアップに貢献する活動も実施している。若手研究者育成・社会人学び直しに関して着実に取り組んでいると評価できる。若手研究者の育成も活発に行った。特任助教を7人雇用し、特任助教の研究書『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』が令和3年度 田島毓堂賞（学術賞）を受賞した。若手研究者の育成のために、若手研究者向けのチュートリアル・講習会を14回開催し、合計で809人（学生365人以上）が参加した。また、大学生・大学院生向けに「言語学レクチャーシリーズ」パイロット版を新たに8本作成してYouTube 国語研チャンネルにて公開し、「言語資源活用ワークショップ 2021」において若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与するなど、若手研究者の研究支援に務めた。

社会人の学び直しへの貢献では、日本語教師等を対象とする「NINJAL 日本語教師セミナー」を国内外で1回ずつ、その他2件を開催した。

#### **(4) 社会連携・社会貢献について**

民間企業5社と産学連携共同研究体制を組織して、自然言語処理モデルの研究成果公開につなげていることは評価される。

地方自治体との連携により危機言語・方言の保存・継承活動への参画、研修実施による地域言語記録・継承を支える市民科学者育成活動を進めている。これは地域の言語・文化の振興支援への貢献として評価される。

今後は言語資源開発の専門組織として社会的に注目を集めている大規模言語モデル開発に対しても積極的な貢献を期待する。

研究成果の分かりやすい一般向け発信を目的としたフォーラム・イベントをオンラインで3回実施している。オンラインの特長を活かして動画コンテンツ公開を行い、1万件近いアクセスを得ている。一般向けの新書書籍の重版、国語研ポータルサイト「ことば研究館」を通じた発信など国語研の研究成果を分かりやすい形で発信する活動が着実に実施されている。今後もオンラインと紙媒体を効果的に活用して広範な研究成果の社会普及に取り組むことを期待する。

#### **(5) 国際連携・国際発信について**

Oxford 大学との学術交流協定に基づく「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」開発、海外大学での日本語学習者の辞書ツール使用実態調査は、国語研における言語資源に基づく日本語・日本語教育研究を国際的に広げる上で重要な取り組みである。また国外の18大学との連携による日本語学習者の作文データ収集などの調査は日本語教育の実践的国際連携として評価できる。

研究成果の国際的発信のために De Gruyter Mouton 社および Oxford University Press 社から学術書籍5冊を出版していることは高く評価される。学術交流協定締結大学との共催3件を含む10件の国際研究会合を開催した。日本語研究のバイオニア的日本語論文を英訳して出版する活動も継続して実施している。研究成果の国際的発信に今後も継続して積極的に取り組むことを期待する。

#### **(6) その他特記事項**

特になし。

## 令和4年度 基幹型プロジェクトの評価

### 機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧

プロジェクト名 (略称)	サブプロジェクト名	代表者 (プロジェクトリーダー)	サブプロジェクトリーダー
多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創	学習者の辞書資源使用の実態調査	小木曾智信	石黒圭
	言語資源の空間接続		大西拓一郎
	学習者用辞書資源の構築		柏野和佳子
	語彙資源ポータル拡張		高田智和
	学習者用「日本語機能語バンク」の構築		ブラシャント・バルデシ
実証的な理論・対照言語学の推進	アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学	浅原正幸	浅原正幸
	日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究		五十嵐陽介
	計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓		窪田悠介
	体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—		ブラシャント・バルデシ
	述語の意味と文法に関する実証的類型論		松本曜
消滅危機言語の保存研究		山田真寛	
多言語・多文化社会における言語問題に関する研究		朝日祥之	
多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究		小磯花絵	
多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究	日本語学習者の作文の縦断コーパス研究	石黒圭	石黒圭
	日本語学習者の談話の縦断コーパス研究		石黒圭
	日本語学習者の作文教育支援研究		山口昌也
	定住外国人の談話の縦断研究		野山広
	定住外国人のよみかき研究		福永由佳
開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張		小木曾智信	

# 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

## 令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合		A
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	A

## I. 計画期間内の概要

### 1. プロジェクト全体の6年間の計画

日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し、その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに、合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し、共同研究を行う。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトではさまざまな日本語語彙に関わるデータを構築する予定であるが、これらがばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにするため、これまで国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

プロジェクト全体で、年1回以上、語彙資源の活用に関するシンポジウムを開催（サブプロジェクト持ち回り）、また年1回以上、サブプロジェクトとともに語彙資源活用チュートリアルを開催する。最終年度までに「言語資源学シリーズ」の1冊として語彙資源を活用した研究論文集をサブプロジェクトと合同で1冊以上刊行する。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 36,567千円

- ・プロジェクト全体で計画していた語彙資源に関するシンポジウムは、一般向けイベント第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」として言語資源開発センターと共催で開催し、プロジェクトで構築する語彙資源について発信した。【地域・社会との連携】

- ・プロジェクト全体で1回以上行うこととしていた講習会は、第44回 NINJAL チュートリアル『分類語彙表』による日本語研究』として開催し、語彙資源に関するチュートリアルを実施した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・サブプロジェクトでは、計画にそって語彙資源の整備を順調に進め、その成果をプロジェクト全体として、書籍1冊、論文12本、発表・講演56件、言語資源16件として公表した。各サブプロジェクトの成果の概要は次の通り（※詳細は各サブプロジェクトの報告書を参照）。

#### ●語彙資源統括

- ・UniDicによる形態素解析用ツール「Web茶まめ」を更新し新しい現代語用UniDicに対応して一般公開した。「Web茶まめ」の2023年度のページビューは138,199、ユーザー数は22,828、セッション数54,288となった（Google Analytics）。【共同利用・共同研究】
- ・ウェブ版UniDicExplorer（試験版）を限定公開した。【共同利用・共同研究】

#### ●学習者の辞書資源使用の実態調査

- ・韓国・中国・台湾・ベトナム・イギリス・ドイツの大学に通う日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査を、各国の大学と連携して行った。計97名を対象に1週間の辞書検索行動を記録した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・3つの国際シンポジウムでプロジェクトに関する発表を3件行った。【グローバル化】

#### ●言語資源の空間接続

- ・国内言語地図14冊のスキャン画像データを作成し、うち10冊を公開した。【共同利用・共同研究】
- ・国内言語地図10冊のジオタグ付き画像データを作成し公開した。【共同利用・共同研究】

#### ●学習者用辞書資源の構築

- ・可読性を高め活用しやすい形に『計算機用日本語基本辞書IPAL』を変換した『IPAL PowerBI レポート』と『IPAL html版』を一般公開した。【共同利用・共同研究】
- ・プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」と共催でアノテーション・述語の意味文法・学習者辞書3プロジェクト合同研究会を開催した。【共同利用・共同研究】
- ・共同研究発表会「学習者辞書用語彙資源の構築」を開催した。【共同利用・共同研究】

#### ●語彙資源ポータル拡張

- ・研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース2022」を開催した。【共同利用・共同研究】
- ・サーバリプレイスを行い、語誌情報ポータル（語彙資源ポータル）のインターネット公開を継続するための情報基盤強化を行った。【共同利用・共同研究】

#### ●学習者用「日本語機能語バンク」の構築

- ・国外3大学（UFLS-UD, Manipur University, Tashkent State University of Oriental Studies）で、4回にわたり日本語教師向けに研究成果の一部を報告した。【地域・社会との連携】
- ・第29回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム（トリア大学、オンライン開催）で日本語教師向けに研究成果の一部を基調講演として報告した（2023年3月4日）。【地域・社会との連携】

各サブプロジェクトの語彙資源の構築は計画通り順調に進んでいるが、初年度であるため公開できる成果は現時点では多くない。しかし「学習者の辞書資源使用の実態調査」が特に海外でのデータ調査、グローバル化に関する計画で予定を大きく上回る成果を上げているほか、「言語資源の空間接続」でも予定を上回って計画を実施している。このことから、プロジェクト全体の総合評価としてはAと自己評価した。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源統括

サブプロジェクトリーダー：小木曾 智信

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

語彙資源プロジェクトが合同で行うシンポジウムやチュートリアル、書籍の出版を企画する。また、各サブプロジェクトで構築するさまざまな語彙資源がばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにする。具体的には、国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

#### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

##### 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	UniDic-日国見出し語対応表の整備  分類語彙表を中心とした成果発表	<ul style="list-style-type: none"><li>● 語彙資源統合 ID の設計</li><li>● 辞書見出し語データの入手</li><li>● UniDic-日国見出し語対応表の整備</li><li>● UniDic 見出し語の追加</li><li>● 合同シンポジウム（分類語彙表関連）開催</li><li>● 分類語彙表番号データの整備・公開</li><li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施（分類語彙表番号）</li><li>● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開</li><li>● UniDicExplorer の開発</li></ul>

2023 (R5) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加 (方言語彙の整備)</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● 以前の国語研語彙資源の整備</li> <li>● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID の活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● UniDicExplorer の公開</li> </ul>
2024 (R6) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● 以前の国語研語彙資源の整備</li> <li>● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開</li> <li>● 書籍刊行の準備</li> </ul>
2025 (R7) 年度	語彙資源統合 ID の運用	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● UniDicExplorer の改修</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● 語彙資源活用に関する書籍の刊行</li> </ul>
		● 暫定評価
2026 (R8) 年度	語彙資源統合 ID の利用促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● サブプロジェクト語彙資源での語彙資源統合 ID 活用</li> <li>● 合同シンポジウム開催</li> <li>● 語彙資源活用チュートリアルの実施</li> <li>● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開</li> </ul>
2027 (R9) 年度	とりまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● UniDic 見出し語の追加</li> <li>● UniDic 付加情報の整備</li> <li>● 残る成果物の公開</li> </ul>

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 11,399 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 『日本国語大辞典』等から UniDic データベースに見出し語を追加・整備する。
- (2) 単位長が一致しないものを含めた UniDic と「分類語彙表」の対応表 (短単位分類語彙表) を整備する。
- (3) 語彙資源統合 ID の仕様を策定する。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」プロジェクトと合同で行った『日本語歴史コーパス』の増補作業で新規に確認した未登録語を UniDic データベースに追加・整備した。
- (2) 言語資源開発センター・「通時コーパス」プロジェクトと合同で上代から近現代までの古文用 UniDic10 種（今回新たに和歌用 UniDic を追加）を整備した（公開は来年度予定）。
- (3) 言語資源開発センター・「多世代会話コーパス」プロジェクトと合同で現代書き言葉，現代話し言葉用の UniDic を整備し，公開した（3月24日）。

### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ）

- (1) 自然言語処理の研究者を共同研究員・プロジェクト非常勤研究員にむかえて語彙資源整備に関する共同研究を実施した。

### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) ウェブ版 UniDicExplorer（試験版 <https://udex.ninjal.ac.jp>）を限定公開した（3月24日）。
- (2) オンライン形態素解析ツール「Web 茶まめ」を更新し，新しい現代語用 UniDic に対応したものを一般公開した（3月29日）。
- (3) 言語資源開発センター・「多世代会話コーパス」プロジェクトと合同で現代書き言葉，現代話し言葉用の UniDic を整備し，公開した（3月24日）。【重出】※「他のプロジェクトとの合同の活動等」参照

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」を開催してプロジェクトで構築する語彙資源について発信した（12月13日）。

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員による語彙資源を活用した研究発表（研究論文4本，研究発表46本）を行った。

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 第44回 NINJAL チュートリアル「『分類語彙表』による日本語研究」で語彙資源に関するチュートリアルを実施した。

### データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 「Web 茶まめ」の2023年度のページビューは138,199，ユーザー数は22,828，セッション数54,288となった（Google Analyticsによる）。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 2023年度開講の総研大「言語資源学」「言語資源学演習」の授業で UniDic 等の語彙資源を活用するためのシラバス作成・授業準備を行った

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を4名雇用して UniDic 等の語彙資源に関する知識，活用方法を習得させた。【若手支援】

### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名を共同研究プロジェクトに参加させ UniDic 等の語彙資源に関する研究活動を指導した。【若手支援】

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 第44回 NINJAL チュートリアル「『分類語彙表』による日本語研究」で語彙資源に関するチュートリアルを実施した。【若手支援】【重出】※「データベース等に関する講習会・講演会」参照

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 国語研オープンハウスで語彙資源 (UniDic) に関連する一般向け発表を1件行った (9月9日)。

#### 産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定に基づいて提供を受けた『日本国語大辞典』見出し語データをもとに UniDic を拡充した。

#### 研究成果の社会への還元

- (1) 「Web 茶まめ」を更新し、新しい現代語用 UniDic に対応したものを一般公開した (3月29日)。

【重出】※「調査データ・データベース等公開」参照

### 4. グローバル化に関する計画

#### 英語による研究成果の発信等

- (1) Digital Humanities 2023 (オーストリア・グラーツ) に「Web 茶まめ」について投稿し査読を経て採択された (2023年7月発表予定)。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者の辞書資源使用の実態調査

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	S
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	S

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

##### 【目的】

近年、国内外ともに日本語学習者の数は増え続け、母語や学習環境などの点で多様性を増している。とくに辞書ツールの使用において、学習者の間で紙の辞書や電子辞書の使用は減り、辞書アプリやWEB上の辞書の使用が広まっている。

しかし、辞書ツールのコンテンツには課題が多く残されているのも事実である。たとえば、自分の調べたい意味や、適切な例文にたどり着けなかったり、コロケーションや文体情報など、学習者が必要としている情報が説明されていなかったりする。このため、学習者による辞書ツールの使用実態を把握し、それに沿って辞書ツールのコンテンツを充実させる必要がある。

そこで、本プロジェクトでは、次の二つの調査・研究を実施する。

- ・第一段階：学習者による辞書ツール使用の調査を行い、使用実態とその困難点を明らかにする
- ・第二段階：困難点解決につながる学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースを試作し公開する

基礎語オープンソースに収録する語は、日本語初級および中級前半レベルの基礎語を想定している。また、サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」と連携しながら、学習者用の辞書ツール開発につながる基礎語オープンソースの構築を試みたい。

##### 【特色】

本プロジェクトの特色は、以下の3点である。

#### ■特色1：学習者によるオンラインでの辞書ツールの使用実態の解明

学習者の辞書ツール使用に関する従来の研究は、学習者にたいするアンケートによる意識調査や、調査者から示された課題をこなす辞書ツール使用の実験調査が主であり、そもそも学習者がどのような場面・目的で辞書ツールを使用しているのかという実態は明らかにされてこなかった。本プロジェクトは、スマートフォンの画面収録機能を用いてオンラインでの語彙検索行動を観察することで、場面・目的と紐づけた辞書ツールの使用実態と困難点を明らかにできる点に特色がある。

## ■特色2：学習者用辞書ツールに必要な情報の解明

現行の学習者用辞書ツールは、学習者目線で見ると、例文や文体情報などの記載が不足している場合や、記載されていても当該の情報にたどり着けない場合があるなど、多くの課題を抱えている。本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査の結果から、学習者がどのような場面でどのような情報を必要としているのか、また、情報をどのように掲載すれば必要な情報に確実にたどり着けるのかを明らかにする点に特色がある。

## ■特色3：学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースの試作・公開

本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査から明らかにした学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに基礎語オープンソースを試作し、それをCCBYで公開する点に特色がある。意味記述や記述項目において質の高いコンテンツが開発され、それが制限なく利用できるようになれば、世界各地の学習者の細かいニーズに合わせてカスタマイズされた辞書ツールが開発され、多様な学習者に使用されることが期待される。なお、辞書ツールに掲載が必要な語数についても、本プロジェクトの実態調査の結果から分析し導きだすことを目指したい。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	2022	2023	2024	2025	2026	2027
実態調査	韓国語話者	中国語話者 越国語話者	DB 公開			
オープンソース				検討	試作	公開
論文集		準備	刊行			
シンポジウム			開催			開催
ワークショップ						開催

### 【2022(R4)年度】

- 韓国語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。韓国国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者 6 名、中上級学習者 6 名、計 12 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。

### 【2023(R5)年度】

- 中国語・ベトナム語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。中国・ベトナム国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者各 6 名、中上級学習者各 6 名、計 24 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。
- 韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査をもとに、研究成果を論文集として刊行する準備に着手する。

### 【2024(R6)年度】

- 韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査のデータベースをインターネット上に公開する。
- 国際シンポジウムを開催し、韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果を発表する。
- 韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果をまとめ、論文集として刊行する。

### 【2025(R7)年度】

- 第四期前半における辞書ツール使用の実態調査から明らかにした、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法を検討する。

### 【2026(R8)年度】

- 2025 年度に検討した、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに、基礎語オープンソースを試作する。

## 【2027(R9)年度】

- ・2026年度に試作した基礎語オープンソースを改良し、インターネット上に公開する。
- ・基礎語オープンソースの内容を紹介する国際シンポジウムを開催し、研究成果を社会へ発信する。
- ・基礎語オープンソース活用のためのワークショップを開催し、学習者用辞書ツールの開発に役立てる。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,324千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 韓国・中国・台湾・ベトナム・イギリス、ドイツの大学に通う日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査を行った。ソウル大学（韓国）の学習者11名、高麗大学（韓国）の学習者11名、天津外国語大学（中国）の学習者29名、マカオ大学（中国）の学習者21名、国立政治大学（台湾）の学習者9名、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学（ベトナム）の学習者10名、ダラム大学（イギリス）の学習者1名、カーディフ大学（イギリス）の学習者2名、トリーア大学（ドイツ）の学習者3名、計97名を対象に1週間の辞書検索行動を記録した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 海外と国内、すべての共同研究員を含む全体会を本年度4回（5, 6, 8, 3月）、韓国・中国・台湾・ベトナム・ドイツといった海外の大学の共同研究員が参加する海外大学分科会を4回（4, 11, 12, 2月）、海外の各大学との調査準備のための会議を5回（4月に2回, 7, 10, 11月に各1回）開催し、各大学と連携しながらデータの収集を行った。（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクトとの連携を行った。統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（リーダー：小木曾智信）のもと、サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」（リーダー：柏野和佳子）のメンバーとの会議を設け（5月に1回, 6月に1回, 8月に1回, 3月に1回）、緊密に連携をとりながら活動した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2022年9月11日、第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルで招待講演を行った。（オンライン, URLなし）（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）
- (2) 2023年3月17日、第47回社会言語科学会研究大会において、「文化によってここまで違う！世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」というタイトルで招待講演・ワークショップを行った。（東京国際大学）

<https://www.jass.ne.jp/meeting/meeting-list/meeting47/>

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 2023年3月、寄稿論文「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」が『東アジア日本学研究』第9号に掲載された。

<https://www.east-asia.info/studies/009.pdf>

## 【Sと自己評価した理由】

- (1) 計画では、韓国・中国・ベトナム国内の学習者各12名を対象にしていたが、実際には、韓国22名、中国50名、台湾9名、ベトナム10名、イギリス3名、ドイツ3名の計97名を対象にして調査を行ったこと。
- (2) 計画では、調査は2023年度中に終わる予定であったが、2022年度中にすべての調査が終わったこと。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用したゼミ発表を行った。【若手支援】

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために、2名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。2名のプロジェクト非常勤研究員は日本語学会2022年度秋季大会で共同で本プロジェクトの内容の口頭発表を行った。【若手支援】

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、研究への参画を促した。【若手支援】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 2022年9月9日、オープンハウス2022において「日本語学習者の辞書使用の実態調査」というタイトルでポスター発表を行った。（オンライン）  
<https://www2.ninjal.ac.jp/openhouse/2022/announcement-c.html>
- (2) 2023年2月11日、英国日本語教育学会・国際交流基金ロンドン日本文化センター共催日本語教育シンポジウム「スマホはどこまで日本語学習の役に立つのか—イギリス国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態—」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者60名）（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）  
<https://www.batj.org.uk/ja/seminars/330-february-2023-batjjapan-foundation-seminar-on-how-useful-are-smartphones-for-learning-japanese-the-reality-of-the-use-of-dictionary-tools-among-learners-of-japanese-in-the-united-kingdom.html>
- (3) 2023年3月5日、ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムにおいて「ドイツ国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者50名）（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）  
<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/j-sympo-aktuell.php>
- (4) 2023年3月9日、令和4年度NINJAL日本語教師セミナー（国内）において、「スマホを使った日本語学習者の辞書検索を支援する—世界の日本語学習者の辞書ツールの使用実態から—」というタイトルでオンライン講演・ワークショップを行った。（参加者117名、うち学生26名）  
[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230309a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230309a/)

#### 4. グローバル化に関する計画

##### 海外の研究者の受入

- (1) 韓国2名、中国4名、台湾1名、ベトナム1名、ドイツ1名、海外の大学に所属する研究者を共同研究員に加え、現地調査の準備を進めた。

##### 海外の大学との連携等

- (1) 海外と国内、すべての共同研究員を含む全体会を本年度4回（5，6，8，3月），韓国・中国・台湾・ベトナム・ドイツといった海外の大学の共同研究員が参加する海外大学分科会を4回（4，11，12，2月），海外の各大学との調査準備のための会議を5回（4月に2回，7，10，11月に各1回）開催し，各大学と連携しながらデータの収集を行った。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

##### 国際シンポジウムの開催

- (1) 2022年9月11日，第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのかーポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法ー」というタイトルでオンライン招待講演を行った。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）
- (2) 2023年2月11日，英国日本語教育学会・国際交流基金ロンドン日本文化センター共催日本語教育シンポジウム「スマホはどこまで日本語学習の役に立つのかーイギリス国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態ー」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者60名）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

<https://www.batj.org.uk/ja/seminars/330-february-2023-batj-japan-foundation-seminar-on-how-useful-are-smartphones-for-learning-japanese-the-reality-of-the-use-of-dictionary-tools-among-learners-of-japanese-in-the-united-kingdom.html>

- (3) 2023年3月5日，ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムにおいて「ドイツ国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態ースマホによる語彙検索行動の適切な支援のためにー」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者50名）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/j-sympo-aktuell.php>

##### 【Sと自己評価した理由】

- (1) 計画で入っていなかったヨーロッパ圏（イギリス，ドイツ）の大学で調査を行い，現地の関係者を共同研究員に加えたこと。
- (2) その調査の結果に基づき，イギリスとドイツ，二つの現地教師会で講演・ワークショップを行い，親交を深めたこと。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：言語資源の空間接続

サブプロジェクトリーダー：大西 拓一郎

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

言語地図・古典籍・方言古辞書に対し空間情報を付与することで、言語情報と地理空間の接続を目的とする。

言語地図は言語情報の空間上の位置を視覚的に表示するが、それ自体は画像であり、空間データを持つものではない。古典籍には多くの地名が含まれるが、コーパス化されてもそこに空間データは含まれない。江戸時代の全国方言辞典『物類称呼』が提示する個々の方言形が使われる地名も同様である。本研究課題は、これらに空間情報を付与して、広く提供し、特に言語地理学の発展に寄与することをねらうものである。

##### 1. 言語地図データベース

国立国語研究所研究図書室は、国内で作成された言語地図のほとんどすべてを所収している。そこには劣化の進む資料も少なからず含まれ、電子化が急務である。加えて、国外の言語地図集も多く収蔵している。これらを言語地図データベースとして整理し、公開する。

##### a. 国内言語地図

以下をデータベース化し、公開する。

- (1) 書誌目録・地図項目・語形目録のデータベース化・公開
- (2) スキャン地図画像：全画像データ化・許諾データの公開
- (3) ジオタグ付き地図画像：許諾データの公開
- (4) ポイント情報（地点-語形対応）：公開許諾データのうち対応可能なデータに付与し公開

##### b. 国外言語地図

- ・書誌目録・地図項目等をデータベース化・公開

##### 2. 古典籍地名データベース

- ・空間情報付き地名語彙素データ・万葉集東歌出身地データの作成

NIHU（人間文化研究機構）による歴史地名データ（吉田東伍『大日本地名辞書』）を中心にして、地名に経度緯度を付与）と古典籍 CHJ（通時コーパス）の地名語彙素・万葉集東歌防人歌出身地を結びつけることができるようにする。

##### 3. 方言古辞書（物類称呼）データベース

- ・物類称呼が提示する語形使用地域（地名）への空間情報付与

江戸時代の方言集『物類称呼』に提示された各地方言の語形と場所の対応表を作成し、場所を表す地名は歴史地名データと接続できるようにする。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	データベース設計 データ作成開始	データベースの設計を行う。 データ作成に着手する。 研究会を開催し、意見交換を行う。
2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	国内言語地図 DB の公開開始	データ構築を継続し、国内言語地図データ公開を開始する。 データベースについて学会で発表する。 研究会を開催し、活用方法を発表する。
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	国内言語地図 DB の公開継続	データ構築・国内言語地図データ公開を継続する。 データベースについて、国際学会で発表する。 研究会を開催し、活用成果を発表する。
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB β 版公開 古典籍地名 DB β 版公開 古辞書方言 DB β 版公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB のβ版公開を行う。 データベースについてのワークショップを開催する。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
	暫定評価	
2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB 修正公開 古典籍地名 DB 修正公開 古辞書方言 DB 修正公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB の修正を行う。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	国内言語地図 DB 完成・公開 国外言語地図 DB 完成・公開 古典籍地名 DB 完成・公開 古辞書方言 DB 完成・公開	データ修正を継続し、国内言語地図 DB・国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB を完成させ、公開する。 研究会を開催し、研究成果をとりまとめる。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 2,782千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 国内言語地図14冊（山梨県言語地図集，信遠三州接境域言語地図集，関門海峡周辺方言地図，北九州市小倉北区方言地図，北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ，新潟県言語地図，大阪府言語地図，出雲飯石郡中央部言語地図，三刀屋町の方言，吉田村の方言，佐田町の方言）のスキヤン画像データを作成し，うち10冊を後述の通り公開した。
- (2) 国内言語地図10冊（山梨県言語地図集，信遠三州接境域言語地図集，関門海峡周辺方言地図，北九州市小倉北区方言地図，北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ，新潟県言語地図，大阪府言語地図）のジオタグ付き画像データを作成し，後述の通り公開した。
- (3) 国内言語地図2冊（越中飛騨国境言語地図，上伊那の方言）のポイントデータを作成した。
- (4) 古典籍地名データ200件を作成した（2023年1月）。
- (5) 物類称呼データ100件を作成した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 2022年9月17日（土）に東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門との共同開催によるワークショップ「日本語・中国語・フランス語における渡来作物の方言」をオンラインで実施し，プロジェクトメンバーの大西・鈴木・川口が発表した。  
対照日本語部門 第36回『外国語と日本語との対照言語学的研究』・国立国語研究所「空間接続」プロジェクト 共同開催ワークショップ - 東京外国語大学 国際日本研究センター (tufs.ac.jp)

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 語彙資源ポータル（語誌情報ポータル）への言語地図データベースのデータを提供した。  
語誌情報ポータル (ninjal.ac.jp)

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 国内言語地図10冊（山梨県言語地図集，信遠三州接境域言語地図集，関門海峡周辺方言地図，北九州市小倉北区方言地図，北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ，新潟県言語地図，大阪府言語地図）のスキヤン画像データを公開した。言語地図データベース (ninjal.ac.jp)
- (2) 国内言語地図10冊（山梨県言語地図集，信遠三州接境域言語地図集，関門海峡周辺方言地図，北九州市小倉北区方言地図，北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ，新潟県言語地図，大阪府言語地図）のジオタグ付き画像データを公開した。言語地図データベース (ninjal.ac.jp)
- (3) 国内言語地図2冊（越中飛騨国境言語地図，上伊那の方言）のポイントデータを公開した。言語地図データベース (ninjal.ac.jp)

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2023年2月24日（金）に空間接続公開研究発表会（対面・オンライン併用，対面会場：国立国語研究所）を開催した。参加者は，対面9名，オンライン13名であった。

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2022年12月19日（月）にプロジェクト内でGISソフトQGISを用いたオンラインによる言語地図作成講習会を実施し，13名が参加した。

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

#### 若手研究者への発表の機会の提供，研究費・発表旅費の支援

- (1) 2023年2月24日（金）に空間接続公開研究発表会（対面・オンライン併用，対面会場：国立国語研究所）において若手研究者2名が発表し，対面参加のための旅費を支援した。

#### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 2022年12月19日(月)にプロジェクト内でGISソフトQGISを用いたオンラインによる言語地図作成講習会を開催し(既出)、共同研究員11名のほか、東京外国語大学大学院生2名が参加した。

#### 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

#### 4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者辞書用語彙資源の構築

サブプロジェクトリーダー：柏野 和佳子

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」(小木曾)のもと、サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」(石黒)と緊密に連携し、活動する。また、基幹型プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(小磯)とは、話し言葉のレジスター分析において連携する。さらに、基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」(浅原)とは、分類語彙表データの活用において連携する。

#### 【目的】

学習者用辞書構築に必要な語彙データベースを構築し公開することを目的とする。国語教育、日本語教育において、日本国内はもちろん、海外の学習者にも利用してもらえるものを目指す。

国立国語研究所には『分類語彙表』というデータベースがあるが、これを学習者用の辞書資源として活用するためには情報を付加し再構築する必要がある。①学習目的に応じた学習レベル別の情報の付与、②話し言葉的な語であるか、書き言葉的な語であるかといった位相情報の付与に順次取り組む計画である。

さらに、語釈や用例の付与も必要である。ただちに利用できる語釈や用例の資源として、オープンソースである『計算機用日本語基本辞書 IPAL』(和語動詞 861 語、和語形容詞 136 語、名詞 1,081 語)がある。その情報を活用するために『IPAL』を整備したのち、初級レベルの語の語釈・用例付与に取り組む。

本プロジェクトでは、主に次の3つの作成・公開を目標にする。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リスト
- (2) 『分類語彙表』の語に、学習レベル別・目的別の情報や位相情報・語釈・用例を付与したデータベース
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』をもとにした辞書情報のデータベース

具体的には、次のとおり計画する。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リストの設計と作成

必要な学習のレベル別・目的別の語彙リストを設計する。

学習レベルと語数は、初級(1,000~2,000 語)・中級(5,000~10,000 語)・中上級(10,000~30,000 語)・上級(50,000~100,000 語)の4段階を想定するが、必要があれば変更する。

目的別として、国語教育、日本語教育、それぞれにおける、読解、作文を目的にする場合や、学校生活、日常生活、国内、国外、といった状況別などを検討する。

「国語教育・日本語教育における読解・作文のための初級語彙リスト」優先的に作成する予定。

そのほか、優先度の高い目的のものからレベル別の語彙リストを作成する。

『日本語教育のための基本語彙調査』[国立国語研究所 1984]の「基本六千語」「基本二千語」などの語彙調査結果や、コーパスの頻度表を参考に、学習レベル別・目的別の語彙を選定する。

- (2) 『分類語彙表』に、学習に必要な語の増補および、学習レベルや位相情報・語釈・用例の付与
- 『分類語彙表』にない、学習に必要な語（多義語の場合はブランチ）を増補する。
  - (1)で優先して作成した語彙リストに基づく学習レベル別情報は、今期中に全語（多義語の場合は全ブランチ）に付与予定。
  - 今期中に初級(1,000～2,000語)への位相情報・語釈・用例の付与を目指す。
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』の情報のデータベース化
- 2022年度の1年間に実施する。

### 【特色】

#### ■特色1：学習目的に応じた学習レベル別語彙リストへの高いニーズにこたえる

国語教育、日本語教育において、多義語の意味（ブランチ）レベルまで考慮した、学習レベル別・目的別の語彙リストが所望されている。これらを本研究の背景と考え、順次こたえていくよう、研究を進めていく。

#### ■特色2：研究利用・公開に支障がないDBを語彙資源として再構築し公開する

・国語研所有の『分類語彙表』及び、オープンソースの『IPAL』をベースに作成することにより、研究利用・公開に支障がない。再構築したDBはCCBY-NC（表示-非営利）にて公開を予定。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### 2022年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト設計</li> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計開始</li> <li>・学習レベル：初級語選定開始</li> <li>・学習レベル：初級情報付与開始</li> <li>・位相：付与すべき情報の検討開始</li> <li>・『計算機用日本語基本辞書 IPAL』DB公開</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
---	--

### 2023年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙リスト設計</li> <li>・語彙リスト作成</li> <li>・『分類語彙表』アノテーション</li> <li>・データ公開</li> <li>・若手育成・海外</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計継続</li> <li>・学習レベル：初級語選定継続，中級語選定開始</li> <li>・学習レベル：初級語に情報付与継続，中級語に情報付与開始</li> <li>・位相：付与すべき情報の検討継続</li> <li>・初級語彙リスト公開</li> <li>・講習会：1回開催</li> </ul>
---	--

## 2024 年度

<ul style="list-style-type: none"><li>・語彙リスト作成</li><li>・『分類語彙表』アノテーション</li><li>・データ公開</li><li>・報告書刊行</li><li>・成果発表</li><li>・若手育成・海外</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・学習レベル：中級語選定継続</li><li>・学習レベル：中級語に情報付与継続</li><li>・位相：付与すべき情報の検討継続</li><li>・語釈・用例：初級語に付与開始</li><li>・中級語彙リスト公開</li><li>・語彙リスト設計の報告書：1冊</li><li>・国際シンポジウム：1回開催</li><li>・講習会：1回開催</li></ul>
---	---

## 2025 年度

<ul style="list-style-type: none"><li>・語彙リスト作成</li><li>・『分類語彙表』アノテーション</li><li>・データ公開</li><li>・若手育成・海外</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・学習レベル：中上級以上語選定開始</li><li>・学習レベル：中上級以上語に情報付与開始</li><li>・位相：初級語に付与開始</li><li>・語釈・用例：初級語に付与開始</li><li>・別分類の中級語彙リスト公開</li><li>・初級語位相情報公開</li><li>・講習会：1回開催</li></ul>
--	---

## 2026 年度

<ul style="list-style-type: none"><li>・語彙リスト作成</li><li>・『分類語彙表』アノテーション</li><li>・データ公開</li><li>・若手育成・海外</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・学習レベル：中上級以上語選定継続</li><li>・学習レベル：中上級以上語に情報付与継続</li><li>・位相：中級語に付与開始</li><li>・語釈・用例：初級語に付与継続</li><li>・中上級以上語彙リスト公開</li><li>・講習会：1回開催</li></ul>
--	---

## 2027 年度

<ul style="list-style-type: none"><li>・『分類語彙表』アノテーション</li><li>・データ公開</li><li>・論文集刊行</li><li>・成果発表</li><li>・若手育成・海外</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・位相：中級語に付与継続</li><li>・語釈・用例：初級語に付与継続</li><li>・中級語の位相情報公開</li><li>・初級語の語釈・用例公開</li><li>・研究論文集：1冊</li><li>・国際シンポジウム：1回開催</li><li>・講習会：1回開催</li></ul>
--	--

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 5,178千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』（和語動詞 861 語，和語形容詞 136 語，名詞 1,081 語）の CSV データを，活用しやすい PDF ファイルや html データに変換し，整備した。
- (2) 必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを，過去の語彙調査の結果や『日常会話コーパス』の頻度情報等を用いて検討した。

- (3) 学習レベル初級語の選定を開始した。
- (4) 『分類語彙表』に多義語の基本的な意味が欠けているものの調査を開始した。
- (5) 日本語教育、国語教育での利用を想定し、付与すべき位相情報の検討を開始した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曾）やサブプロジェクト「日本語学習者の辞書資源使用の実態調査」（石黒）の会議に参加し、連携を図った。
- (2) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と共催で講習会を開催した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。
- (3) 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原）と共催で研究発表会を開催した。  
アノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3プロジェクト合同研究会 | 国立国語研究所  
(ninjal.ac.jp)

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 日本語教育・国語教育の研究者を共同研究員として受け入れた。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 可読性を高め活用しやすい形に『計算機用日本語基本辞書 IPAL』を変換した、『IPAL PowerBI レポート』と『IPAL html 版』を2023年3月に一般公開した。【オープンデータ】【オープンアクセス】  
URL: 研究成果 | 学習者辞書用語彙資源の構築 (ninjal.ac.jp)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会を1月8日に開催した。登録215名（うち、国外79名、学生68名）。  
「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と共催で「中納言」講習会【初中級編】を11月5日に開催した。登録140名（うち、国外18名、学生60名）。  
第6回コーパス利用講習会 | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究 (ninjal.ac.jp)

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 大学院生である若手研究者3名に対して発表の機会を提供した。【若手支援】  
「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者を共同研究員として加え、海外の動向も踏まえながら研究を実施した。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源ポータル拡張

サブプロジェクトリーダー：高田 智和

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	C
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

コーパス、辞書類（主に古辞書）、言語地図、言語記事は、それぞれ個別の目的で研究利用され、データベース等の言語資源がそれぞれ構築されている。単語や語彙の歴史を解明する上で、これらは有益な資料であるが、横断的に扱う環境は未だ整っていない。そこで、本プロジェクトでは、「日本語歴史コーパス」等から得られる語彙素統計情報、辞書類のデータベース、言語地図データベース、言語記事データベース、語彙研究文献情報を集積し、日本語語彙の歴史を一望できるような「語彙資源ポータル」を整備拡張する。これによって、単語使用の変遷、語形バリエーションの消長、意味拡張を記述し、その変容の原理を探究する語彙研究基盤が整う。また、研究の入口となる情報が整備され、言葉に関心を持つ多くの人々を日本語史研究に引き込み、研究の活性化につなげることも期待できる。

本プロジェクトでは、計画期間内において、以下の4点についてデータ整備を行い、「語彙資源ポータル」を拡張する。

- (1) コーパス統計情報： 第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」の室町時代編Ⅱキリシタン資料、江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃などの語彙素（短単位）統計情報を「語彙資源ポータル」に収録する。
- (2) 辞書類見出し情報： 近代以前の辞書類から代表的なものを10点程度選定し、見出し情報（見出し語、所在、UniDic 語彙素 ID など）をデータベース化する。見出しデータは「語誌情報ポータル」に収録するだけでなく、オープンデータ（テキスト形式）としての公開も検討する。なお、辞書類見出し情報の整備は、国文学研究資料館が主導する人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により実施する。
- (3) 言語地図目録情報： 「言語地図データベース」（「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」のサブプロジェクト「言語資源の空間接続」において作成）の収録地図名に対してUniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。
- (4) 言語関連記事情報： 1949～2009年を対象とする「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」の記事名のうち、単語を取り上げた記事に対してUniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。また、大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ整備を行う。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### 2022 年度

- ・第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」語彙素統計情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から単語を取り上げた記事の抽出を行う。
- ・見出し情報を整備する近代以前の辞書類の選定を行い、データ作成に着手する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成に着手する。

### 2023 年度

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事についての情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「言語地図データベース」による言語地図目録情報の整備を行う。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

### 2024 年度

- ・言語地図目録情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

### 2025 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2024年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

### 2026 年度

- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。

### 2027 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2027年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・シンポジウムを開催し、研究成果を取りまとめる。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 4,171 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」語彙素統計情報を「語誌情報ポータル」に収録するという計画については実施できなかった。
- (2) 「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から単語を取り上げた記事の抽出に釋種した。
- (3) 見出し情報を整備する近代以前の辞書類の選定を行い、データ作成に着手した。
- (4) 大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成に着手した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により、古辞書類の見出し語データ作成に着手した。

## 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」を3月4日に開催した（口頭発表11件，参加者：140名）[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230304c/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230304c/)

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生や若手研究者を共同研究に参加させ，学会等で共同発表を行うという計画については，実施できなかった。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) サーバリプレイスを行い，語誌情報ポータル（語彙資源ポータル）のインターネット公開を継続するための情報基盤強化を行った。

## 4. グローバル化に関する計画

### 英語による研究成果の発信等

- (1) 古辞書等のテキストデータを収録・公開するWebサイト「日本語史研究用テキストデータ集」の英語版を作成した。[https://www2.ninjal.ac.jp/textdb\\_dataset/en/index.html](https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/en/index.html)

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創  
 サブプロジェクト名：学習者用「日本語機能語バンク」の構築  
 サブプロジェクトリーダー：プラシヤント・パルデシ

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

日本語は、英語や中国語などとは異なった語彙的特徴をもつ言語である。例えば、日本語には豊富な自動詞と他動詞の対があり、また、他動詞（二項述語）において、多様な格の枠組み（「が～を」「が～が」「が～に」「に～が」など）が存在する。また、時間、場所、道具などを表す付加詞は格助詞を伴い、その多くは多義的であることも日本語の語彙項目の大きな特徴となっている。このような日本語の語彙的な特徴を海外で自由に利用できる辞書が存在せず、日本語教育や日本語の学習における大きな課題となっている。

語彙の学習と並ぶ日本語学習における重要項目として、いわゆる文型（機能表現）の学習が挙げられる（例：「～なければならぬ」「～なくてはならない」「～する時・～した時」「～する前に」「～した後」「～だけあって～」「～だけに～」など）。文型（機能表現）は実質的な意味の希薄な語からなる表現がほとんどで、それぞれの表現を構成する個々の単語の意味を辞書で調べ、組み合わせせてみても、その表現全体がどのような意味や機能を持ち、どのような文脈で使用されるかを理解することはできない。日本国内で日本語を学ぶ者であれば、文型の意味や使い方を調べるための辞書や参考書が手に入りやすいが、残念ながら、これらの参考資料は海外で入手しにくく、世界の多くの日本語学習者の手に届いていないのが現状である。また、多くが紙媒体であるため、様々な文型を含む豊富な用例を耳で聞いて、アクセントやイントネーションを学習するには使えない。国外のみならず国内の学習者にとってもウェブ上で手軽に使い、音声を確認できる辞書の開発は待たれるところである。

日本語学習教材が手に入りやすく、日本語母語話者の教師が少ない海外の教育現場では、以上のような事情から日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習は大きな困難を抱えている。この課題を解決すべく、本研究は、日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習に役立つオンライン辞書「日本語機能語バンク」を開発し、研究所のホームページを通じて無償公開し、国内外の日本語教育と日本語教育に資する日本語研究に貢献することを目標とする。

上記の最終目標を達成するために、本プロジェクトでは、「日本語機能語バンク」の傘下の下で、以下の二つのオンライン版リソースを開発・拡充し、研究所のホームページを通じて無償で公開する。

(1)「日本語格助詞データベース」：和語動詞約 1200 語の必須項および付加詞を含む用例（音声付用例のみ）、用例に含む格成分に意味役割を格納したデータを構築し、静的コンテンツとして公開する。

(2)「日本語文型バンク」(<https://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>)：第3期において文型バンクのプロトタイプとして約 200 件の文型を意味、接続情報、音声付用例とともに公開している。この 200 件を再検討・改良を行い、第4期で新たに約 1000 件を追加し、最終的には計約 1200 件規模の文型バンクを公開する。

本研究で提案されているような大規模の電子版のリソースを開発するためには、多くの日本語教師・研究者の力を結集する必要がある。また、基礎データを作成するためには、大量コーパスを使用できる高度なスキルが必要となる。日本語学、コーパス言語学、日本語教育の知識や電子データの構築に必要な多様なスキルを持つ多くの国内外の研究者の協力を得て初めてこの規模のリソースの開発・公開が可能となる。このようなリソースの開発・公開はオープンサイエンスの方針に沿うものであり、また、大学共同利用機関でしかできないものである。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

**1年目（2022年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式の決定

- 1 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 2 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 3 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 4 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 5 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

**2年目（2023年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 6 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 7 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 8 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 9 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 10 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

**3年目（2024年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 11 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 12 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 13 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 14 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 15 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 16 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

**4年目（2025年度）**：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 17 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 18 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 19 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 20 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 21 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 22 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

5年目（2026年度）：見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式再検討，必要に応じて修正，それに伴うデータの修正

23 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて，見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式などを検討し，決定する。

24 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

25 文型（約200件）の見出し作成・校閲

26 プロジェクト主催の研究集会，学会などで研究成果の発表，学術誌への論文の投稿を行う。

27 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

28 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

6年目（2027年度）：

29 見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式再検討，必要に応じて修正，それに伴うデータの修正

30 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて，見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式などを検討し，決定する。

31 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

32 文型（約200件）の見出し作成・校閲

33 プロジェクト主催の研究集会，学会などで研究成果の発表，学術誌への論文の投稿を行う。

34 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

35 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,324千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

##### (1) 「日本語格助詞データベース」

2022年度は基礎データとなる和語動詞の見出しを執筆および校閲作業を行うために見出し執筆班および見出し校閲班を組織した。使用頻度の高い多義的な和語動詞180語を選定し，語義の分類，語釈と例文の執筆を進めた。語義の分類については日本語教育のニーズを最優先した。編集ツールを利用して作業を進め，2023年3月末現在176見出しの執筆・校閲作業が完了した。見出し執筆・校閲作業と並行して，用例に含まれる格成分に意味役割を付与するためのアノテーションの枠組みの検討作業を進めた。第1回プロジェクト会議（於：神戸大学，2022年7月10日）でアノテーションの枠組みを検討したとき台を作成し，共同研究者と共有して改良点について検討してもらった。MLリストを通じて意見交換を行い，加筆・修正などを行って第2回のプロジェクト会議（神戸大学，2022年12月3日）でアノテーションの枠組みを決定した。また，アノテーションを行うツールの設計・実装の検討も行った。次年度の始めにツールの運用とアノテーションの作業を開始する。アノテーション付きのデータは，完成し次第順次リポジトリを通じて公開する予定。

##### (2) 「日本語文型バンク」

第3期において文型バンクのプロトタイプとして約293の文型を意味，接続情報，音声付用例とともに公開している。2022年度では，まずこれらの文型を再検討して必要な修正を行った。2023年3月末で，284の文型の修正が完了した。また，これとは別に中上級の文型を58見出し追加した。これらの文型のデータは校閲・修正を経て，今後リポジトリを通じて公開する予定。

## 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「日本語格助詞データベース」構築班では、見出し執筆グループは3回（ウェブ開催）、アノテーション検討グループは2回（対面形式）研究打合せを行い、研究・作業を進めた。

## 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 今年度は和文論文の刊行には致らなかった。令和4年度の研究をまとめて来年度以降に投稿する予定である。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員（大学院生）を1名雇用し、アノテーションの枠組み策定、データの整理などの作業を進めた。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生を1名プロジェクト共同研究としてプロジェクトへ参加させ、てにをはバンクのアノテーション方式の検討、アノテーションの実施に必要なツールなどの選定作業を行った。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) プロジェクト非常勤研究員（大学院生）にプロジェクトの打合せ会で格助詞の意味役割アノテーションの一案についての発表する機会を提供した。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) プロジェクト非常勤研究員（大学院生）に上記のプロジェクト打合せ会で発表する際の旅費を支援した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) University of Foreign Language Studies-The University of DA Nang (UFLS-UD), Da Nang で日本語教師向けに研究成果の一部（「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源 (Online resources for teaching, learning & analyzing Japanese)」）を報告した（2023年1月3日）。
- (2) The Department of Foreign Languages, Manipur University, Imphal, India で日本語学習者・日本語教師向けに研究成果の一部 (Comparative study of classifiers in Japanese and some Indian languages) を報告した（2023年2月13日）。
- (3) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部（「日本語の多義語の教育と学習：多義的な基本動詞を通じて」）を報告した（2023年3月2日）。
- (4) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部（「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源」）を報告した（2023年3月3日）。
- (5) 第29回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム（トリア大学、オンライン開催）テーマ：「日本語教育における語彙学習と指導について」で日本語教師向けに研究成果の一部（「基本動詞ハンドブック」、および「基本動詞ハンドブック：日本語教室における活用の一試案」）を基調講演として報告した（2023年3月4日）。

## 4. グローバル化に関する計画

特になし

## 5. その他

- (1-1) University of Foreign Language Studies-The University of DA Nang (UFLS-UD), Da Nang で日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 1 月 3 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-2) The Department of Foreign Languages, Manipur University, Imphal, India で日本語学習者・日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 2 月 13 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-3) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 3 月 2 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-4) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 3 月 3 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-5) 第 29 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム (トリア大学, オンライン開催) テーマ: 「日本語教育における語彙学習と指導について」で日本語教師向けに研究成果の一部を基調講演として報告した (2023 年 3 月 4 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (2) 協定に基づき, 国際交流基金ニューデリー事務所と連携し, インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

# 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

昨今、研究の終着点としてデータベースの構築を挙げることが多いが、既存の、あるいは制作中のものをいかに横断的・総合的に利用できるのかが課題となると常々思っている。そのような意味では当プロジェクトが計画している語彙資源の整備、つまり日本語の語彙データを扱う5つのサブプロジェクトを統括的に構築していくことは重要である。また、下記の各サブプロジェクトが整備する語彙資源を連携・統合できることが理想的である。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

UniDicによる形態素解析用ツール「Web茶まめ」を更新し新しい現代語用UniDicに対応して一般公開したことにより、利用者が大幅に増えたことは喜ばしい。共同利用と共同研究を進めるにはさらに制度的に担保する必要があるかと考える。

#### 2. 教育・人材育成について

第44回 NINJAL チュートリアル『分類語彙表』による日本語研究を開催し、語彙資源に関するチュートリアルを実施した。今後、大学院レベルでの教育時の活用が可能となるであろう。また、これらのことは研究プロジェクトの継続に役立つことに繋がることを期待したい。もう一方で、いままで行われてきたセミナーなどを定期的で開催し、大学院生レベルの学生に集中的にスキルを身につけさせる機会としたい。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」として言語資源開発センターと共催で開催し、一般向けにプロジェクトで構築する語彙資源について発信した。そもそも専門性の高い各サブプロジェクトは、いかに社会連携・社会貢献できるのかが課題である。話題のChatGPTが既存の情報を集める能力を備えるように、日本の民間の研究およびデータ、他の言語資源情報（たとえば国会図書館デジタルコレクション）を吸収可能な装置（プラットフォーム）の構築も、統合という意味で検討する必要がある。

#### 4. 国際連携・国際発信について

学会とともに英語圏への積極的な連携や発信に取り組んでいるようで評価に値する。とくに、日本語学習者・研究者のもっとも多い東アジアへの発信や研究者との連携は非常に重要であることから、今後も継続した取り組みを期待する。

## 5. その他特記事項

既存のデータベースをより簡便に学生たちがすぐに使えるようにもう少し改善してほしい。

# 「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

プロジェクトリーダー：浅原 正幸

## 令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. プロジェクト全体の6年間の計画

認知言語学や生成文法などの理論的研究や類型論的研究においては、伝統的に話者の内省や直観に基づく個別研究が方法論的に主流だったが、近年その方法論の見直しが各理論、各分野で急速に進んでいる。具体的には、理論的考察にコーパス資料、実験データ、フィールド調査などを多角的に組み合わせて言語研究の中心的課題に取り組む、新たな実証的方法論を模索する動きが世界的に加速化している。本プロジェクトでは、音韻、意味、形態・統語という言語研究の中心的三分野における理論的・類型論的な研究の核心的課題に取り組み、このような世界的潮流における最先端の研究を参照しつつ、それを先導する研究を進める。具体的には、言語学と隣接分野、あるいは言語学の複数の下位分野の知見を融合する形で研究を進めるサブプロジェクト4件と、自然言語処理の知見を活かしてそのような研究に資する言語資源を開発するプロジェクト1件を、それぞれの独自性を保ちつつも相互に連携させて展開することで、国内外の言語研究の最前線に貢献することを目指す。

個別の課題に取り組む4つのプロジェクトは、イントネーションの構造の言語間・方言間変異（イントネーションP）、体言化・名詞修飾構造の形態・統語・意味的类型（体言化P）、状態変化述語の意味構造（述語の意味論P）、統語変換操作の理論言語学における位置づけ（計算言語学P）という、音韻、意味、形態・統語のそれぞれの分野における鍵となる概念の定義そのものを再考察することを目的としている。この目的のために、個々のプロジェクトは、解明の対象である概念に迫るために最適な分野横断的手法を複数組み合わせた多角的なアプローチを採用することで研究を進める。具体的には、イントネーションPでは、コーパス構築とフィールド調査、体言化Pではフィールド調査と文献資料調査、述語の意味文法Pではビデオ実験とコーパス調査、計算言語学Pではコーパス構築と計算論的モデリングを中心的な手法として採用する。これらの具体的な課題に取り組むサブプロジェクトと連動し、それを後方支援するアノテーションPでは、既存のコーパスで手薄だが、言語資源に基づく言語の科学的研究をより一層進めるために必要となるタイプの言語資源の構築に注力する。プロジェクト全体で開催する合同の研究会やサブプロジェクト間での共同研究や言語資源活用のノウハウの共有を通して、サブプロジェクト間の連携を強めて研究推進の相乗効果を得ることを模索する。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 31,909千円

### 理論対照統括

- ・5つのサブプロジェクト共同で、Evidence-based Linguistics Workshop 2022 を 9月5・6日に開催し、各プロジェクトの成果を報告するとともに、発表の公募も行い、関連分野の研究者との交流の場を提供した（神戸大学と共催）【共同利用・共同研究】
- ・下記に記載する5つのサブプロジェクトと連携して研究を進めた成果を、書籍2冊、ブックチャプター2本、論文20本、発表・講演93件として公表した【共同利用・共同研究】。

### アノテーション

- ・以下のアノテーション・データベース整備・公開を行った。【共同利用・共同研究】
  - 『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーションを完成させて、公開した。
  - 分類語彙表に基づく形容詞結合価データベース（西尾データの電子化）を公開した。
  - 分類語彙表に基づく動詞結合価データベース（宮島データの電子化）を公開した。
  - 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した。
- ・企業との共同研究を5件進めた。【地域・社会との連携】

### イントネーション

- ・琉球語方言のオンラインイントネーション調査を4回行い、そこで得た知見を踏まえて、方言共通の調査票を作成した。【共同利用・共同研究】
- ・『広島大学日本語電話会話コーパス』構築作業（分節音ラベリング）を約5時間20分完了した。【共同利用・共同研究】
- ・「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」を、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携して若手研究者・大学院生を主対象とする韻律ラベリング講習会を開催した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「危機言語サミット」を開催した。【地域・社会との連携】

### 計算言語学

- ・データのアノテーションを進めた。パイロット的なモデリングの結果をまとめ、言語処理学会に投稿した。【共同利用・共同研究】
- ・「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」プロジェクト（リーダー：小木曾）と共催で、言語処理学会年次大会2023において「深層学習時代の計算言語学」というテーマでワークショップを3月17日に開催した。【共同利用・共同研究】
- ・名古屋大と共催で国際学会 HPSG 2022 を開催した（7月29日、オンライン）。【共同利用・共同研究】
  - 【グローバル化】
- ・プロジェクトの理論的基盤に関連する研究の成果をとりまとめ、英語での共著論文を海外のジャーナルに出版した（国際共著論文）《グローバル化》
- ・プロジェクトの進捗状況を国際学会の招待公演（JK30, 3月13日）で発表した。【グローバル化】
- ・非常勤研究員1名を雇用してプロジェクトの理論的・記述的基盤に関する分野融合的な共同研究を主体的に進める方法について指導した結果、2022年度日本言語学会論文賞の受賞につながった。【大学院教育・若手研究者育成】

([https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat\\_id=167](https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat_id=167))

## 体言化

- ・海外（インド、ベトナム）で国際ワークショップを7件開催した。そのうち、2件は交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート（Deccan College Post Graduate and Research Institute）およびインド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras）と共同で開催した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・大学院生（2名）をプロジェクト研究員として参画させ、プロジェクト主催の研究会で発表の機会を提供した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・英語による研究発信の一貫として、海外の著名な出版社（Mouton, Springer Nature）から刊行される論文集に研究成果を2件投稿した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・フィールドワークを日本国内2回（1回目：愛知県，2022年9月6日～8日；2回目：福岡県・山口県・広島県，2022年9月11日～16日），国外3回（1回目：台湾・台北市，2023年1月15日～22日；2回目：インド・アッサム州，2023年2月8日～22日；3回目：ウズベキスタン，2023年3月8日～25日）を実施した。【共同利用・共同研究】

なお、調査において予算の執行については問題があると考えている。昨年度は新型コロナウイルス感染症対応のために海外旅費を所長裁量経費に集約し、執行するという運用が行われた。予算12,480千円のうち5,989千円が海外旅費として所長裁量経費として計上されたが、実際の旅費の執行額は当初予算を大幅に超えた9,995,382円（内航空券代6,452,380円）であり、ほとんどがサブプロジェクトリーダーを含む2名の外国旅費であった。

## 述語の意味と文法

- ・日本語、英語、その他の言語における動詞類についてデータ収集を行い、日本語については分類リストを作成した。また、リヨン大学、INALCO、ニューヨーク州立大学の指導的研究者と対面で研究打合せを行い、連携を深めた。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・成果発表については、英文論文集の編集を進めた。また、国際学会 NAMED 2022 を京都大学と共同で開催し（2022年11月3日～4日）、共同研究者が5件の研究発表を行った。また、代表者は John Benjamins 社から出版された書籍に1編の論文を掲載し、国際学会において5回の研究発表と2回の招待講演を行った。国内学会のシンポジウムにおいても研究の成果を発表した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・学生支援については、大学院生6名を共同研究者とした。また、国際学会で研究発表を行う2名の国内学生及び5名の海外学生に旅費の支援を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学

サブプロジェクトリーダー：浅原 正幸

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

第2期：国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」(H21(2009)年10月～H27(2015)年9月)と第3期：国立国語研究所コーパス基礎研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・包括・自動化に関する基礎研究」(H28(2016)年4月～R4(2022)年3月)(1500千円/年)を継承し、アノテーションデータの共有化・共同開発およびアノテーションデータに基づく、理論・対照研究を進める。具体的には統語班・意味班・認知班の3つに分かれて以下のことを進める。

国語研で過去に構築した形容詞・動詞「記述的研究」データに基づく、実証的な統語・意味研究の展開  
統語研究において、体系的な語彙意味論に基づく大規模言語資源が求められている。他言語においては WordNet に基づき、FrameNet と呼ばれる体系的な語彙フレームが構築されている。日本語でも日本語フレームネットの研究が進められているが、英語の翻訳に基づく日本語ワードネットの利用は、日本語の語彙フレームを構成するにあたって語義の粒度が適切でないという問題点があった。一方、国立国語研究所においては、1964年に「分類語彙表」(国立国語研究所 1964)を刊行して以来、形容詞の結合価(西尾 1972)・動詞の結合価(宮島 1972)・比喩表現の結合の分析(中村 1977)などの大規模な日本語記述的研究が進められてきた。これらの研究は紙のカードに基づくものであり、現在は出版物として残されているのみである。これらを電子化し、現在のコーパスなどと対照させることで、日本語の統語研究の発展が見込まれる。

#### Universal Dependencies による多言語言語処理・言語類型論研究と Enhanced Dependencies

世界規模のオープンプロジェクトとして Universal Dependencies が進められている。延べ300人以上の研究者が参画し、90言語以上150のツリーバンクが整備され、多言語言語処理・言語類型論研究における基礎的な言語資源として世界的に評価されている(<https://universaldependencies.org/>)。この研究プロジェクトの特色として、言語横断的な形態・統語論的アノテーション基準を策定するための議論が、オープンソースソフトウェア開発のプラットフォームである GitHub 上(<https://github.com/universaldependencies/docs/issues>)でやり取りされ、issues にあげられている1つ1つの議論が言語類型論的に重要な公開研究資源となっている。

国立国語研究所は2014年から同プロジェクトに参画し、日本語の Universal Dependencies 関連言語資源の整備を統括するとともに、国内の研究者の取りまとめを進めてきた(浅原ほか 2019)。

同プロジェクトにおいて、Enhanced Dependencies として、意味的な結合価のアノテーションの議論が行われ、近年言語横断的な proposition bank の整備が求められており、議論が活発化している。

### 言語認識過程の言語資源化

言語資源整備において、電子化した言語資源に対してアノテーションを行うことで言語の生成過程の研究が進めてきた。一方、近年、言語を刺激として呈示した際の言語解釈のアンケート・読み時間・事象関連電位・脳活動データなど、被験者の反応をデータ化する言語認識過程を言語資源化する試みが進められている。一方、日本語において、言語認識過程を言語資源化した事例は依然として少ない。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

- 2022年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2023年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2024年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2025年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2026年 認知班による実験環境の整備
- 2027年 認知班による実験環境の整備

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 4,500千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

##### (1) 統語班

- 『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーション CEJC-DEP を公開した  
(中納言ダウンロードサイト)
- 『日本語日常会話コーパス』に基づく Universal Dependencies  
に関する発表を NLP2023 で行った  
「UD Japanese-CEJC とその評価」,

○大村舞, 若狭絢 (国語研), 松田寛 (Megagon Labs), 浅原正幸 (国語研)

[https://www.anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2023/pdf\\_dir/P3-9.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/P3-9.pdf)

- 分類語彙表に基づく形容詞結合価データベース (西尾データの電子化) を公開した  
<http://doi.org/10.15084/00003665>

- 分類語彙表に基づく動詞結合価データベース (宮島データの電子化) を公開した  
<http://doi.org/10.15084/00003668>

- 『現代語の助詞・助動詞』分類語彙表番号付与版 を公開した  
<http://doi.org/10.15084/00003667>

##### (2) 意味班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した  
(中納言ダウンロードサイト)
- 『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションに関する国際会議発表を行った  
Asahara et al. (2022) “CHJ-WLSP: Annotation of ‘Word List by Semantic Principles’  
Labels for the Corpus of Historical Japanese”, Proceedings of the Second Workshop on  
Language Technologies for Historical and Ancient Languages  
<https://aclanthology.org/2022.lt4hala-1.5/>

##### (3) 認知班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』印象評定情報アノテーションを進めた
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』読み時間情報付与に関する研究を LREC-2022 で発表した Masayuki Asahara (2022) “Reading Time and Vocabulary Rating in the Japanese Language: Large-Scale Japanese Reading Time Data Collection Using Crowdsourcing”, Proceedings of the Thirteenth Language Resources and Evaluation Conference

<https://aclanthology.org/2022.lrec-1.555>

#### フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

- (1) オンライン実験サーバ [psyling.ninjal.ac.jp](http://psyling.ninjal.ac.jp) の整備を進めた (セキュリティ審査済み)

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 今年はインターンシップの要望がなかったために受入はなかった。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 言語資源開発センターと連携して NINJAL チュートリアル 『分類語彙表』による日本語研究 (海外:韓国) を 8/6 に実施した (参加者: 62 名)。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220806b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220806b/)

- (2) 語彙資源プロジェクト・言語資源開発センターと連携して第 17 回 NINJAL フォーラム 「語彙資源の構築と活用」を 2023/2/18 に実施した (参加者: 214 名)。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230218a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230218a/)

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 新学術領域研究『時間生成学』計画班 (-2022) に参画

<https://www.chronogenesis.org/ja/sections/index.html#se-1>

- (2) I-URIC 機構間連携プロジェクト (高エネ研・情シスなど複数の大学共同利用機関法人が関わるプロジェクト) に参画し NLP2023 で研究成果を 2 件発表した:

「人間の脳と人工知能における短歌の鑑賞に関する神経活動の比較」,

- 船井正太郎, 近添淳一 (アラヤ), 持橋大地 (統数研), 浅原正幸 (国語研), 松井鉄平 (岡山大), 鹿野豊 (群馬大), 川島寛乃 (慶應大), 磯暁 (KEK)

[https://www.anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2023/pdf\\_dir/B5-2.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/B5-2.pdf)

「短歌を読む際の情動に関する脳活動の解析」,

- 佐藤杏奈 (お茶大), 近添淳一, 船井正太郎 (アラヤ), 持橋大地 (統数研), 鹿野豊 (群馬大), 浅原正幸 (国語研), 磯暁 (KEK), 小林一郎 (お茶大)

[https://www.anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2023/pdf\\_dir/H10-4.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/H10-4.pdf)

- IU-REAL 異分野融合・新分野創出プログラム 2023 年度スタートアップ「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理的解明」が採択された。同研究内容が、2023 年 6 月 28-30 日にスイス・ローザンヌで開催される国際会議(QUALICO 2023)に採択された。

#### 調査データ・データベース等公開 (アウトプット)

- (1) 統語班

- 『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーション CEJC-DEP を公開した
- 『日本語日常会話コーパス』に基づく Universal Dependencies に関する発表を NLP2023 で行った【再掲】

- (2) 意味班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した (中納言ダウンロードサイト)

- 『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションに関する国際会議発表を行った。  
【再掲】

(3) 認知班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』印象評定情報アノテーションを進めた【再掲】
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』読み時間情報付与に関する研究を LREC-2022 で発表した。  
【再掲】

**公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）**

- (1) 意味班：アノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3プロジェクト合同研究会（2022年5月28日）参加者28人（国外6人・学生1人）

**書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）**

- (1) 国内会議発表のみ掲載（国際会議発表は別項目「英語による研究成果の発信等」に記載）
- 言語処理学会論文誌『自然言語処理』 1件
  - 日本語学会 2022年度春季大会 2件
  - 人工知能学会 2022年度 人工知能学会全国大会（第36回） 1件
  - 言語処理学会年次大会 NLP2023 9件

**データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）**

- (1) 言語資源開発センターと連携して NINJAL チュートリアル（海外：韓国）を 8/6 に実施【再掲】。

**2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画**

**特別共同利用研究員の受け入れ**

- (1) 今年はインターンシップの要望がなかったために受入はなかった【再掲】

**総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等**

- (1) 東京外国語大学 授業担当「コーパス言語学入門」「心理言語学入門」

**プロジェクト非常勤研究員の雇用**

- (1) 科研費でプロジェクト非常勤研究員4人を雇用了。1人が2023年4月に就職、1人が2023年7月に就職、1人が2023年4月より学術振興会特別研究員 RPD に採用となった。

**大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加**

- (1) 共同研究員に大学院生1名参画

**若手研究者向けのチュートリアル等**

- (1) 言語資源開発センターと連携して NINJAL チュートリアル（海外：韓国）を 8/6 に実施【再掲】。

**3. 地域・社会との連携に関する計画**

**産業界との連携**

- (1) 企業との共同研究5件を実施した。

**地域・社会との連携**

- (1) 言語処理学会論文誌副編集長  
(2) 日本言語学会大会運営委員  
(3) LREC 2022: Corpora and Annotation - Area Chair  
(4) AACL-IJCNLP 2022: Resources and Evaluation - Senior Area Chair

**一般向け講義・講演会・フォーラム等**

- (1) 語彙資源プロジェクト・言語資源開発センターと連携して第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」2023/02/18を実施【再掲】

## 研究成果の社会への還元

(1) 企業との共同研究プロジェクトによる成果物を以下のとおり発信した。

- 日本経済新聞記事オープンコーパス (2023/03/13 公開)

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000502.000011115.html>

- リクルート社より係り受け解析の新しいモデルを公開

UD Japanese CEJC+GSD transformers-based spaCy model (2023/03/24 公開)

[https://github.com/megagonlabs/UD\\_Japanese-GSD/releases/tag/nlp2023](https://github.com/megagonlabs/UD_Japanese-GSD/releases/tag/nlp2023)

- LegalOn 社 より形態素解析モデルを公開

<https://github.com/daac-tools/vibrato> (2023/03 公開)

- ホンダリサーチインスティテュート社との共同研究成果を NLP2023 で発表

「Double cross model による位置情報フレームアノテーション」,

川端良子, 大村舞, 浅原正幸 (国語研), 竹内誉羽 (HRI)

[https://www.anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2023/pdf\\_dir/B11-3.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/B11-3.pdf)

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の大学との連携等

- (1) Universal Dependencies プロジェクトに参画

### 国際シンポジウムの開催

- (1) LREC 2022: Corpora and Annotation - Area Chair 【再掲】

- (2) ACL-IJCNLP 2022: Resources and Evaluation - Senior Area Chair 【再掲】

### 英語による研究成果の発信等

- (1) LREC-2022 2件 (自身の担当 Area 以外)

- (2) LREC-2022 併設ワークショップ 1件

- (3) RaAM 15 1件

- (4) PACLIC-36 1件

## 5. その他

- (1) プロジェクトのウェブページを作成: <https://masayu-a.github.io/anno/>

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究

サブプロジェクトリーダー：五十嵐 陽介

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

日本語共通語のイントネーション研究は世界的に見ても高い水準にある。それに対して日本語・琉球語諸方言のイントネーション研究はまだ始まったばかりであり、ほぼ未開拓の分野と言える。諸方言のアクセントを扱う研究は数多く、それによって日本語・琉球語のアクセントは多様性に富むものであることが明らかにされている。語レベルの韻律現象の多様性を勘案すれば、諸方言における文レベルの韻律現象すなわちイントネーションにも多様性が観察されることが期待される。それを解明し、一般言語学・言語類型論の視点から検討することは、韻律現象の理論的研究に大きく貢献することが予想される。

共時的研究の最終目標として、日本語・琉球語諸方言のイントネーション体系の多様性を明らかにし、それを一般言語学・言語類型論の視点から検討し、日本語・琉球語諸方言の研究から、世界諸言語を対象とした理論的研究に貢献することを設定する。通時的研究の最終目標として、祖語の韻律体系を再建し、祖語の体系が現代諸方言の韻律体系へと多様化する過程を明らかにすることを設定する。

第4期の目標は、イントネーション体系、特に句末音調と韻律句形成の多様性を、フィールドワークを通じて収集したデータおよび方言コーパスの分析に基づいて実証的に解明し、その結果を一般言語学・言語類型論の視点から検討することで、世界の諸言語を対象とした理論的研究に貢献することにある。

#### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	・共通の調査票を作成する。 ・調査票に基づいた方言データ収集を開始する。	4月～9月 共通の調査票の作成 4月～3月 方言データ収集 9月 シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」共催
2022.4 ～2023.3	・調査結果の初期報告を国内学会で行う。 ・コーパス講習会を開催する ・『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業を2時間分完了する。	3月 『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業2時間分完了 時期未定 コーパス講習会 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会（×2回）

2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共通の調査票を改良する。</li> <li>・調査票に基づいた方言データ収集を継続する。</li> <li>・調査結果の初期報告を国内・国際学会で行う。</li> <li>・COTCO-H 構築作業を 4 時間分完了する。</li> </ul>	<p>4 月～3 月 調査票改良</p> <p>4 月～3 月 方言データ収集</p> <p>9 月 国内学会研究発表</p> <p>8 月 (予定) 国際学会 (ICPhS) で成果発表</p> <p>3 月 COTCO-H 構築作業計 4 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査票に基づいた方言データ収集を継続する。</li> <li>・調査結果の初期報告を国内・国際学会で行う。</li> <li>・COTCO-H 構築作業を 6 時間分完了する。</li> </ul>	<p>4 月～3 月 方言データ収集</p> <p>5 月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表</p> <p>9 月 国内学会で成果発表</p> <p>3 月 COTCO-H 構築作業計 6 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査票に基づいた方言データ収集を継続する。</li> <li>・国内学会でワークショップを開催する。</li> <li>・音声データ公開する。</li> <li>・COTCO-H 構築作業を 8 時間分完了し公開する。</li> <li>・コーパスに関する書籍を出版する</li> </ul>	<p>4 月～3 月 方言データ収集</p> <p>9 月 国内学会でワークショップ開催</p> <p>3 月 共通の調査票を用いて収集された発話の音声データ公開</p> <p>3 月 COTCO-H 構築作業計 8 時間分完了</p> <p>同コーパス 8 時間分公開</p> <p>時期未定 コーパスに関するシリーズ書籍のうち 1 冊(「設計・構築編」) 出版</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内・国際学会で成果発表する。</li> <li>・COTCO-H 構築作業を 10 時間分完了し公開する。</li> </ul>	<p>5 月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表</p> <p>9 月 国内学会研究発表</p> <p>3 月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 10 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>論文集(書籍)を出版する。</li> <li>・COTCO-H 構築作業を 11 時間分完了し、公開する。</li> </ul>	<p>9 月 国内学会研究発表</p> <p>3 月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 11 時間分完了</p> <p>同コーパス 11 時間分公開</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>

## II. 令和 4 年度の活動

令和 4 年度予算額 2,336 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 南琉球宮古語池間方言のイントネーションのオンライン調査を4回行った。

### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 2023年1月までに『広島大学日本語電話会話コーパス』構築作業（分節音ラベリング）約5時間20分を完了させた。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 12月3日（土）に「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」を開催した。【若手支援】

[https://kikigengo.ninjal.ac.jp/event/doc/7\\_Celik\\_221204.pdf](https://kikigengo.ninjal.ac.jp/event/doc/7_Celik_221204.pdf)

- (2) 5月28日と12月4日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で、「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会を開催した（5/28：発表9件・参加者98名，12/4：発表7件・参加者70名）。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220528a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220528a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221204a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221204a/)

- (3) 1月28日-29日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して、文化庁および地方自治体と共催で「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」を開催し、プロジェクトメンバーが危機方言の現状と取組の状況に関する講演を行い、また「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトリーダーの山田真寛が、自身が代表をつとめる消滅危機言語の継承・保存活動「言語復興の港」に関する発表を行った。

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html)

- (4) 8月31日に「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携して、社会言語科学会「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」を共催するとともに研究成果を発表した。

[http://www.jass.ne.jp/?page\\_id=1103](http://www.jass.ne.jp/?page_id=1103)

- (5) 9月16日に「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携してコーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする、コーパスへの韻律ラベリングの講習会を行った。【若手支援】

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

- (2) 若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

- (3) 6月19日に日本言語学会第164回大会 ワークショップ「日琉祖語再建に向けての新たな展望：琉球諸語の視点から」を開催した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220619a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220619a/)

- (4) 日琉祖語の再建を扱う研究会「プロトジャポニック」を11月24日，12月17日，1月21日，2月23日，3月13日に合計5回開催した。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221124a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221124a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221217a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221217a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230121b/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230121b/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230223a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230223a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230313a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230313a/)

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 国際ジャーナル論文に論文（単著）1件（2022年6月27日）、国内ジャーナルに論文（単著）1件（2023年1月31日）を発表した。

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) クロスアポイントメントに基づく東京外国語大学大学院博士前期課程授業 Japan Studies（前期・後期）を担当した。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 10月から3月に週2回で1名雇用、加えて12月のみ週2で1名雇用し、日本語・琉球諸語研究を推進できる人材の育成につとめた。前者は2023年4月に大東文化大学外国語学部日本語学科助教に、後者は2023年4月に有明工業高等専門学校一般教育科助教に採用され、常勤の研究者として次世代の言語研究を担う人材となった。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 40歳未満26人、35歳以下24人をプロジェクト研究員としてプロジェクトに参加してもらい、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で開催した「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会等への参加、発表を促すことで、若手研究者の学術的交流の場を提供し、日本語・琉球語研究を推進できる若手研究者の育成につとめた。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 2回の「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 「若手研究者に調査旅費の申請を募り、申請があった場合は旅費の支援を行う。」という計画をしていたが、調査旅費の申請はなかった。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。
- (2) 若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) 1月28日-29日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して、文化庁および地方自治体と共催で「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」を開催し、プロジェクトメンバーが危機方言の現状と取組の状況に関する講演を行い、また「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトリーダーの山田真寛が、自身が代表をつとめる消滅危機言語の継承・保存活動「言語復興の港」に関する発表を行った（再掲）。

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html)

#### 4. グローバル化に関する計画

##### 海外の研究者の受入

- (1) 令和4年度日本学術振興会外国人研究者招へい事業外国人特別研究員（欧米短期・推薦）を1名受け入れた。

##### 英語による研究成果の発信等

- (1) 国際ジャーナル論文に論文（単著）1件（2022年6月27日）発表した。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓

サブプロジェクトリーダー：窪田 悠介

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

自然言語処理のリソースや計算言語学的手法を援用した理論言語学研究の学際化が進展しているが、人間の言語能力の解明という、理論言語学における核心的問題に直接取り組む研究はまだ生まれていない。言語習得や（計算機でなく人間による）意味解釈や統語構造の解釈のプロセスの解明に計算言語学的手法を援用する研究も出始めてはいるが、これらはまだ端緒についたばかりであり、本格的な研究となっていない。本研究では、理論言語学研究に対して新たな経験科学としての基盤を与えるために、計算言語学的手法を援用した方法論を模索し提案することを目的とする。

計算言語学的手法を援用した理論言語学研究が国内外の研究でここ 10 年ほどで急速に進展した。特に、本研究の研究代表者によるカテゴリ文法を用いた統語論・意味論の理論構築の研究によって、計算言語学的手法を用いて理論言語学研究に形式的基盤を与える研究が進み、生成文法理論の統語論・意味論の数学的基礎づけに関する見通しがほぼ立った。また、別の研究の流れとして、自然言語処理の手法を応用的な技術として用いて、計算論的モデリングの手法で人間による言語処理や言語獲得の性質などの解明を試みる研究が国内外で進んでいる。国語研においても、コーパス開発センターでの日本語 web コーパスや、web コーパスを用いた大規模な単語分散表現の開発、また、理論・対照研究領域における第3期の2件の基幹プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」と「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」との関連で、いくつかの学際的な言語研究の試みが進められた。

このように、一見したところ理論言語学研究の学際化が進展したが、分野融合的な研究の真の発展のためには、乗り越えるべきいくつかの課題がある。本研究では、その中の一つに焦点を絞って突破口を探る。上述のように、理論言語学と計算言語学の接点には、大きく分けて、分野融合的な研究としての理論的基盤に関する「基礎研究」と、この「基礎研究」の成果を応用して、より直接的に言語学の側の理論研究の問題に取り組む「応用研究」の二つの流れがある。現状では、言語学と自然言語処理という二つの分野における、前者の自然科学的指向性と後者の工学的指向性との間の齟齬により、この二つのタイプの研究がうまく連携していない。（いまだ存在しないが、現在の自然言語処理技術に基づけば十分に実現可能な）生成文法理論の成果をより直接的に反映する言語資源を開発できれば、両者を統合し、理論言語学研究の中心的課題の解明に正面から迫る研究が遂行可能になると考えられる。また、理論言語学の中核的問題に自然言語処理技術を活用する方法を示すことで、自然言語処理研究の分野に対しても、現在十分に注目されていないが取り組むべき重要な課題を示すことが可能になる。

具体的な課題として、主に以下の研究に取り組む。

1. 「変換文法のパーザ」の開発と、その理論研究への応用
2. 意味解釈をアノテーションしたコーパスの構築とその理論研究への応用

人間の言語能力の解明ということを目標としたとき、現在までの理論研究、計算言語学研究の双方で見落とされがちであった観点として、自然言語の言語表現は単に統語的な分布の特徴を持つ体系であるだけでなく、意味を表す記号システムであるという点がある。理論装置としての「統語変換」の概念の核心には、表面的に観察される単語列と、その単語列が表す意味との対応関係を簡潔に捉える、というところに眼目がある。

このため、構成的に意味表示を構築できる変換文法のパーザを開発すれば、それを用いて言語の意味解釈の側面にまで踏み込んだ言語能力の計算論的モデリングが可能となる。本研究では、変換文法のパーザを開発し、それを用いて言語資源を援用した言語習得や言語処理の計算機でのシミュレーションを行うことで、統語変換という理論装置の性質の解明を構成論的に行うことを目標にする。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

研究期間を前半3年と後半3年に分け、それぞれの期間でリソースの構築とリソースを利用した研究に重点的に取り組む。後者は前者に依存するので、リソース構築の段階から、応用研究のための先行研究の調査やパイロット的な実験を開始し、段階を踏んで本格的なモデリング研究に取り組んでいく。後半3年に行うモデリングの研究においては、前半3年で開発する変換文法のパーザを用いた研究に中心的に取り組む。

2022

- 英文啓蒙書執筆（最終段階）
- 和文啓蒙書編集
- 言語資源構築（開始）
- モデリング研究（予備調査）

2023

- 言語資源構築（2022 から継続）
- 英文啓蒙書出版
- 和文啓蒙書出版
- 国際学会発表（言語資源）

2024

- 言語資源の構築を完了する
- モデリング研究のパイロットを行う
- 前年度に出版した教科書を用いて ESSLLI で講義（海外出張が可能な場合）

2025

- モデリング研究を進める
- 国内学会で関連研究に関するワークショップを開催する（言語学会または言語処理学会）

2026

- モデリング研究の予備的成果を、国内学会、国際学会で発表する
- 最終的な成果をまとめた論文を執筆、学術誌に投稿

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,324 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 日本語文 3500 文（BCCWJ から抽出）に対して比較構文の意味情報を付与したコーパスを作成した（下記（論文2）で報告）

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 29th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar（オンライン；名古屋大学と共催）を7月29日に開催した（口頭発表19件，参加者97名，うち国外機関所属者58名，学生33名）。<https://hpsg2022.github.io/>
- (2) 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」プロジェクト（リーダー：小木曾）と共催で，言語処理学会年次大会2023において「深層学習時代の計算言語学」というテーマでワークショップを3月17日に沖縄コンベンションセンターで開催した（口頭発表：13件，招待講演：1件，パネルセッション：2件）。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1)（論文1）国際学会研究発表2件（理論的基盤に関する研究）
- (2)（論文2）モデリングのパイロット研究を言語処理学会2023で発表

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

#### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 非常勤研究員1名を雇用し，プロジェクトの理論的・記述的基盤に関する分野融合的な共同研究を主体的に進めることができる人材の育成につとめた。その結果，2022年度日本言語学会論文賞の受賞につながった。

[https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat\\_id=167](https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat_id=167)

#### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名と若手研究者1名を共同研究に参加させ，共著論文を執筆した（上記（論文2））

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

### 4. グローバル化に関する計画

#### 英語による研究成果の発信等

- (1-1) プロジェクトの成果（理論的基盤に関する部分）をとりまとめ，英語での共著論文（short response article）を海外のジャーナルで出版した（国際共著論文）

<https://www.degruyter.com/document/doi/10.1515/tlr-2022-2103/html>

- (1-2) プロジェクトの成果（理論的基盤に関する部分）をとりまとめ，英語での共著論文（full article）を海外のジャーナルに投稿した（査読中）

- (2) Japanese/Korean Linguistics 30で，比較構文の意味解析に関する内容の招待講演を行った（3月13日）。<https://www.sfu.ca/xsyn/jk30/program.html>



プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—

サブプロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

現行の類型論的研究では、性標示は主名詞による一致現象とし (Corbett)、類別詞も同様に主名詞の分類が本務と考えられていて (Aikhenvald)、これら二つの現象と体言化現象との共通性がすくい取られていない。これに対して、Shibatani の研究によって、多くの言語における類別詞の体言化機能が指摘され、また性標示による名詞派生などを考慮に入れると、数詞、指示詞、属格、形容詞、動詞連体・分詞形にみられる類別詞・性標示も体言化の観点から見直し得る可能性が浮かび上がってくる。

このプロジェクトでは、従来個別に取り扱われてきた、体言化 (nominalization)、類別詞 (classifier)、性標示 (gender) の現象を体言化の類型という全く新しい視点から追究し、この三領域を統一的に取り扱える理論的枠組みを開発する。アジアに広く拡散する類別詞ならびに印欧語その他に見られる性標示という旧来の研究課題に体言化現象の類型という立場から新しい息吹を吹き込むと同時に、高次元の統一的理論化を目指す。

研究体制としてはコアメンバー数名と国外研究員が中心となってチームを結成し、フィールドワークを通しての一次的なデータ収集に当たり、また、理論と言語資料の研究・分析に従事する。体言化、類別詞、性標示現象が顕著な言語を専攻する若手研究者、大学院生を特定し、定期的に研究発表者 (準メンバー) として招き、コアメンバー専門以外の言語の資料を収集するとともに、若手研究者の育成に尽力する。研究成果を国際シンポジウムならびに英文刊行物 (論文、論文集) をとおして広く発信し、日本語研究・言語類型論研究両方面における国際的な貢献を目指す。

日本語研究の国際化とならんで、本プロジェクトは国語研の目標の一つである若手研究者の育成にも尽力する。具体的には、次の4つの事業により若手研究者の育成を図る。

(a) 大学院生や若手研究者を共同研究員または非常勤研究員として迎え、研究指導を行う。特に、類別詞や性標示が重要な文法機能を果たす言語を専攻する大学院生や若手研究者を随時研究会に招き、理論や分析方法の討議を通して、それぞれの研究の進展に資するようにする。

(b) 国内外から学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員を積極的に受け入れる。

(c) 大学院生向けのチュートリアルを企画する。

(d) 国際シンポジウム等において若手研究者に研究発表の場を提供する (あわせて旅費支援などの経済的支援も行う)。

本プロジェクトでは文献によるデータ収集に加えて、必要なデータを国内外でフィールドワークを通じて

収集する。オープンサイエンスの方針に沿って、収集したデータを共同研究者間で共有する。また、データに基づく体言化の実証的な言語類型論的な研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

**1年目（2022年度）**：諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し、類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①文献によるデータ収集と整理
- ②フィールドワークの準備：収集されるべきデータタイプの整理
- ③フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ④研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ⑤類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

**2年目（2023年度）**：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

**3年目（2024年度）**：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表
- ⑤コアメンバーによる担当言語（群）における研究成果のまとめと論文の作成
- ⑥研究成果を踏まえた，国際シンポジウムの準備

**4年目（2025年度）**：

- ①国内外から発表者を招聘し，国際シンポジウムの開催
- ②国際シンポジウムでの報告に基づいて論文の作成
- ③論文の内部・外部査読および改訂作業
- ④主要出版社からの論文集の出版の準備（出版社との交渉，出版契約の締結，編集作業の開始など）。

**5年目（2026年度）**：

- ①フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ②体言化類型論の枠組みの構築完了
- ③新理論の実質データによる最終検証
- ④研究成果の発表
- ⑤主要出版社からの論文集の出版

**6年目（2027年度）**：

- ①内外の個別言語専門誌への投稿論文の作成
- ②内外の類型論関係専門誌への理論的研究論文の作成
- ③国内外で公開シンポジウム・ワークショップの実施
- ④研究成果の発表

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 12,544千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) フィールドワークを日本国内2回（1回目：愛媛県[2022年9月6日～8日]；2回目：福岡県・山口県・広島県[2022年9月11日～16日]）、国外3回（1回目：台湾・台北市[2023年1月15日～22日]；2回目：インド・アッサム州[2023年2月8日～22日]；3回目：ウズベキスタン[2023年3月8日～25日]）を実施し、それぞれに言語・方言における体言化現象に関するデータを収集した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) と共同で2022年8月4日に、同じく、交流協定を締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と共同で2022年8月1日に国際ワークショップを開催した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 今年度は「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトとの合同発表会等の共同開催は見送ったが、来年度以降の実施に向けて連携を深める。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) R4年度ではプロジェクト研究会を2回開催した（2022年5月21日[参加者：19名・共同研究員限定の非公開]、2022年9月23日[参加者：37名・一般公開]、いずれも東京大学本郷キャンパス）。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) R4年度では以下2件の研究成果を英語で論文を執筆し、投稿した。
- ・Masayoshi Shibatani and Tetsuo Nitta (To appear). Japonic nominalizations in cross-dialectal perspective. In Kibe, Nobuko, Tetsuo Nitta and Kan Sasaki (eds.) The Handbook of Japanese Dialects. Berlin: Mouton De Gruyter
  - ・Prashant Pardeshi and Masayoshi Shibatani (To appear) Marathi Relative and Complement Clauses in Nominalization Perspective. In Rajesh Kumar and Om Prakash (eds.) Language Studies in India. Singapore: Springer Nature.

### 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

#### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員として大学院生を1名雇用し、プロジェクト主催の研究会の企画、実施、フィールドワークで収集したデータの整理・分析・保存などに参画させることにより、類型論的な研究を推進する人材の育成につとめた。また、プロジェクト研究会で発表した自身の研究のまとめなどに関して助言をした。

#### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 2名の大学院生を共同研究員として参画させ、研究発表を行う機会を与えた。

#### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 2名の大学院生にプロジェクト主催の研究会で発表の機会を提供した。

#### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 大学院生を2名共同研究員として迎え、2人にプロジェクトの会議で研究発表を行う機会を提供し、会議参加に必要な旅費を支援した。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 交流協定を締結している交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) と共同で2022年8月4日に、同じく、交流協定を締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と共同で2022年8月1日に国際ワークショップを開催し、両機関の大学院生に機能主義言語類型論的な研究の事例を紹介した。(重出:「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」)

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

### 4. グローバル化に関する計画

#### 海外の研究者の受入

- (1) 今年度は学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員の希望はなかった。

#### 海外の大学との連携等

- (1) デカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute), インドとマラーティー語の方言における体言化について共同研究を進めた。
- (2) 上記の研究成果の一部を交流協定締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) の Rajesh Kumar 教授が編集している論文集に投稿した。この論文は現在印刷中であり, Springer Nature (Singapore) から刊行される予定。

#### 国際シンポジウムの開催

- (1) 今年度は海外の以下の7か所で国際ワークショップを企画し, 実施した。
  - ①交流協定を締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と共同で2022年8月1日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 57名)。
  - ②交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) と共同で2022年8月4日に国際ワークショップを開催した (口頭発表3件, 参加者数: 23名)。
  - ③セントラル・インスティテュート・オブ・インディアン・ランゲージズ (Central Institute of Indian Languages) と共同で2022年8月6日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 51名)。
  - ④University of Languages and International Studies - Vietnam National University, Hanoi, Vietnam (ULIS) と共同で2022年12月29日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 72名)。
  - ⑤University of Foreign Language Studies-The University of Da Nang (ULFS-UD), Da Nang, Vietnam と共同で2023年1月2日に国際ワークショップ(英語)を開催した (参加者数: 22名)。
  - ⑥University of Foreign Language Studies-The University of Da Nang (ULFS-UD), Da Nang, Vietnam と共同で2023年1月3日に国際ワークショップ(日本語)を開催した (参加者数: 30名)。
  - ⑦University of Social Sciences and Humanities - Vietnam National University, Ho Chi Minh City, Vietnam (USSH) と共同で2023年1月9日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 67名)。

#### 英語による研究成果の発信等

- (1) 以下の研究成果を英語で論文を執筆し, 投稿した。

- ①Masayoshi Shibatani and Tetsuo Nitta (To appear). Japonic nominalizations in cross-dialectal perspective. In Kibe, Nobuko, Tetsuo Nitta and Kan Sasaki (eds.) The Handbook of Japanese Dialects. Berlin: Mouton De Gruyter
- ②Prashant Pardeshi and Masayoshi Shibatani (To appear) Marathi relative and complement clauses in nominalization perspective. In Rajesh Kumar and Om Prakash (eds.) Language Studies in India. Singapore: Springer Nature.

## 5. その他

- (1) University of Foreign Language Studies-The University of Da Nang (UFLS-UD), Da Nang, Vietnam で日本語教師向けに研究成果の一部を「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源 (Online resources for teaching, learning & analyzing Japanese)」を報告した (2023年1月3日, 参加者数: 30名)。
- (2) 協定に基づき, 国際交流基金ニューデリー事務所と連携し, インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進  
 サブプロジェクト名：述語の意味と文法に関する実証的類型論  
 サブプロジェクトリーダー：松本 曜

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

このプロジェクトでは、認知言語学的な立場から述語の意味と文法に関する類型的研究を行う。特に注目するのは、移動、状態変化、人間行為に関する動詞などの述語表現の意味と文法である。それを考察することにより、1) 言語においてどのような現象を動詞で表現し、どのような現象をそれ以外で表現するのか、2) 動詞で表現する際、どのような要素をその意味に組み込むのか、3) 動詞と関わる文法現象はどのような性質を持っているのか、の3つの課題に取り組む。

1)と2)は、国際的に注目されている研究課題であり、今まで主に移動事象を表す動詞に関して研究が行われ、言語間で組織的な変異が見られることが指摘されてきた (Talmy, Levin など)。このプロジェクトでは、移動事象のみならず、他の事象を表す動詞にも広げて、幅広い言語で意味の研究を行う。語彙調査、実験調査、コーパス調査などを用いて、〈入る〉〈走る〉などの移動動詞、及び〈壊す〉〈叩く〉などの使役状態変化や人間行為の表現に関して統一的で実証的な調査を行い、諸言語がどのようにそれらを言語化するのかについて比較研究を進める。特に日本語については、第3期の研究成果をベースにして、詳細な研究を行う。それにより、諸言語に見られる変異について今までに提案されてきた仮説の検証を行い、包括的に諸事象をカバーできる新たな提案を目指す。

3)については、動詞にマークされる文法的現象の1つとして動詞の敬語化を取り上げる。動詞における敬語マーキングは一部の言語にしか見られない現象であり、それがどのような形でその言語の性質と関わるかは興味深い課題である。このプロジェクトでは、連携プロジェクトの中で明らかにされてきた韓国語における動詞の敬語化に関する神経言語学的研究の成果を出発点として、研究を行う。

本プロジェクトはコーパスと実験を用いる実証的な手法で類型論研究を行う点に特色がある。動詞の意味に関する研究は、多くの言語を統一的に比較する点に特徴がある。またオープンサイエンスの方針に沿って、データの公開を進めながら研究成果を公表する点も大きな特徴である。具体的には主張の根拠となる諸言語の動詞のリストなどを公表する。

最終的な目的は、実証性の高い研究手法を用いて、動詞という品詞の性質を明らかにすることである。さらに、言語間の組織的な変異のパターンを見出し、その中で日本語の特色を明らかにする。

3年目での終了は、代表者の退職予定日のためである。

## 2. 年次計画（3年間のロードマップ）

2022年度

諸言語の動詞に関するデータを収集し、類型論的研究をすすめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions (仮題), Vol. 1の編集を終え、原稿を提出する。また、Vol. 2の編集を行う。

移動動詞に関する国際学会(NAMED 2022)を京都大学で開催し、海外のプロジェクトとの交流を図る。

2023年度

移動動詞と状態変化動詞についての類型論的研究をすすめる。

日本語の敬語に関する研究を行う。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1を出版する。また、Vol. 2の編集を終え、原稿を提出する。

国際学会発表を行う。

2024年（最終年度）

研究成果を論文などにまとめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 2を出版する。

移動動詞と状態変化動詞についての日本語論文集を刊行する。

日本語の動詞に関するデータベースを完成させる。また、諸言語の動詞に関するデータベースを完成させる。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,471千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 日本語、英語、スワヒリ語において動詞の意味に関する調査を行った。特に日本語においては1388の動詞についての基礎的分析と、当初の予定を上回る15の種類の状態変化を表す表現について詳細なコーパス調査を終了することができた。英語とスワヒリ語については限られた種類の状態変化のみ終了した。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 計画通り、日本語の状態変化の表現に関する分類リストを作成した。それにもとづいて1388の和語動詞の分類を行った。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国際シンポジウム NAMED 2022 (Neglected aspects of motion-event description 2022) を11月3・4日に京都大学人間環境学研究所と共催でハイブリッド方式で開催した。共同研究員が5件の研究発表を行った。シンポジウムの詳細は「グローバル化に関する計画(国際シンポジウムの開催)」を参照。
- (2) NAMED 2022では、来日したフランスの連携プロジェクト(SALTA)のメンバーと、また、8月の渡米時にはアメリカの連携プロジェクト(CAL)のメンバーと交流を行った。詳細は「グローバル化に関する計画(海外の大学との連携等)」を参照。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 公開の研究発表会を3回開催した(4/23, 5/28, 7/2)

(2) 国際シンポジウム(NAMED 2022)を開催した(再掲)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

(1) 英語での発信については、「グローバル化に関する計画(英語による研究成果の発信等)」に詳細を示すように、1)英文論文1点の出版、2)英文論文1点の投稿、3)国際会議での研究発表5件の実施、4)英文論文集の編集、5) NAMED 2022 にもとづく論文集の企画を進めた。3)については計画以上の回数であるが、4)については、原稿提出には至っていない。

- ・日本語による発表については、国際学会において2回の招待講演(日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム(8/1, オンライン);台湾日本語学会国際学術シンポジウム(12/10, 台湾東呉大学))を行った。また国内学会のシンポジウムにおいて研究の成果を発表した(日本認知言語学会(9/5, オンライン))

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員として2名の学生の雇用を行ない、移動動詞と状態変化動詞の分析に参加させることにより、実証的な意味論研究を推進できる人材の育成につとめた。そのうち1名は、それを通して学んだ分析手法に基づく研究により、博士号を取得した。【若手支援】

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 6名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参加させ、実証的な意味論研究を推進できる人材の育成につとめた。そのうち4名については、後述の通り移動動詞と状態変化動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際会議で発表する機会を提供した。【若手支援】

### 若手研究者への発表の機会の提供

(1) 共同研究員としてプロジェクトに参加している2名の国内の学生に旅費の部分的支援を行って、移動動詞に関する研究を通して得られた成果を、後述の国際会議 NAMED2022 で発表する機会を提供した。また、共同研究員である別の1名の国内の学生に旅費の支援を行ない、状態変化動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際ワークショップ Workshop on resultatives で発表する機会を提供した。共同研究員である別の1名の若手研究者には旅費の支援を行ない、移動動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際会議 ALT 2022 で発表する機会を提供した。また、共同研究員である1名の海外学生に旅費の部分的支援を行って、移動動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際会議 ALT 2022 で発表する機会を提供した。さらに、海外の連携プロジェクト所属の2名の学生を含む4名の海外の学生に旅費の部分的支援を行なって、国際会議 NAMED2022 で研究発表を行う機会を提供した。【若手支援】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の大学との連携等

(1) 下記 NAMED 2022 で、INALCO の研究者1名に招待講演を行ってもらい、研究上の交流を行った。また、その学会期間中と前後にリヨン大学の5名の研究者と、また、8月7-9日の米国バッファロー訪問時にはニューヨーク州立大学の2名の研究者と研究打合せを行い、意見交換を行った。

### 国際シンポジウムの開催

(1) NAMED 2022 (Neglected aspects of motion-event description 2022) を、11月3・4日に京都大学人間環境学研究科と共催でハイブリッド方式で開催した。参加者96名。うち、海外からの参加者52名、

学生 19 名。口頭発表 22 件，ポスター発表 7 件。共同研究員の発表が 5 件。

<https://sites.google.com/view/named2022/home> 参照のこと。

### 英語による研究成果の発信等

(1) 次の通り成果を発信した。

- ①英文論文一点の出版 (Linguistic representations of visual motion: A crosslinguistic experimental study. In Neglected Aspects of motion-event description. John Benjamins)
- ②英文論文一点の投稿 (A corpus-based study of the externality of emotions in Swahili and Japanese)
- ③国際学会における英語による研究発表 5 回 (LACUS (8/4), Slavic Linguistics Society (9/19), ALT (12/15, 2 回), Workshop on Resultatives (3/22))。  
また次の通り英語論文集の編集・企画を進めた。
- ④A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions (仮題; Mouton 社), Vol. 1, 2 の編集
- ⑤国際会議 NAMED 2022 にもとづく論文集の企画 (John Benjamins 社)

# 「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトには、5つのサブプロジェクトがある。サブプロジェクト名だけでは必ずしもその違いが明白ではないが、それぞれのサブプロジェクトのアプローチと記述対象は、次のように述べ直すことができる。

コーパスに基づく統語研究と意味研究

方言調査に基づくプロソディ研究

構文解析モデルに基づく統語研究と意味研究

類型論的手法に基づく「体言化」の類型研究

認知言語学的手法に基づく述語の類型研究

この5つとも、実証的でありつつ、それぞれ異なったアプローチを用いて、言語学の分野全般に渡る記述対象が取り上げられており、そのバランスが大変すぐれている。5つのサブプロジェクト共同のワークショップも開かれており、その成果を発表するだけでなく、発表の公募も行き、チーム外の研究者との交流の場が設けられていることも望ましいことであると考え。自己評価は「B」であったが、研究成果も十分にあるため、全体的には「A」に相当すると評価した。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

それぞれのサブプロジェクトで精力的に活動が展開されている。

「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」では、計画通り、各種のアノテーションデータを公開し、加えて、論文1本・国内学会発表12件・国際学会発表5件の成果発表がなされた。

「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」では、計画通り、現地調査等を進め、シンポジウムや研究会における発表に加えて、国際ジャーナル論文1本と国内ジャーナル論文1本を発表した。

「計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓」では、29th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammarを開催し、言語処理学会内でのワークショップも企画した。また、それとは別に、国際学会で2件の研究発表を行なっている。

「体言化の実証的な言語類型論：理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から」では、国内2回・国外3回のフィールドワークを行ない、国際ワークショップやプロジェクト研究会を開催した。また、論文集に2本の英文論文を発表した。

「述語の意味と文法に関する実証的類型論」ではコーパス調査に基づいて動詞の分類リストが作成された。成果の発表としては、国際シンポジウム NAMED 2022 の開催、英文論文1点の出版、国際学会における2回の招待講演、国際会議での5件の研究発表、国内学会において1件の研究発表と充実している。

#### 2. 教育・人材育成について

特に、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」では、チュートリアルやワークショップを開催し、広く若手研究者の育成に努めた。

他のサブプロジェクトにおいても、若手研究者を雇用し、プロジェクトへの参画および発表の機会を提供した。2022年度日本言語学会論文賞の受賞も特筆すべき成果の1つである。

### 3. 社会連携・社会貢献について

企業との共同研究を5件行っており、また、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「危機言語サミット」を開催した。さらに、アノテーション・データベースも、整備・公開を行っており、研究成果が一般社会に還元されている。

### 4. 国際連携・国際発信について

「共同利用・共同研究」についての項目にも書いたように、国際シンポジウムや国際ワークショップが多数開催されており、国際学会での発表や英語論文もきわめて多い。十分に国際的な発信が行われていると評価される。

### 5. その他特記事項

特になし。

# 「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：消滅危機言語の保存研究

プロジェクトリーダー：山田 真寛

## 令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

以下4つのサブプロジェクト・主担当者で研究を実施する。

##### (1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

山田, 五十嵐, 共同研究員それぞれ | 担当地域でフィールド調査

国内40地点で調査を行っている3期から継続して、共同研究員が各担当地点で〔語彙、文法記述、談話資料の蓄積〕を進める。第3期プロジェクトを以下3つの観点で発展させる。

**増やす** 3点セットを拡充し、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性の解明」プロジェクト（代表 | 五十嵐）や日琉祖語再建・系統関係解明、対照言語学的研究に資するデータなど、特定トピックに関するデータを増やす。

**深める** 3期までに個別文法現象の記述がある地点は文法スケッチを、文法スケッチがある地点は参照文法を執筆する。

**広げる** 琉球諸語に比べて不足している本土諸方言に調査対象を広げる。また消滅危機言語の再活性化など、言語の継承保存に資する基礎資料としてのデータ収集も行う。

##### (2) 過去の諸方言データの電子化

井上, 山田 | 諸方言談話資料の文字化・電子化と公開準備

1977年度から1985年度にかけて行われた「各地方言収集緊急調査」（文化庁）のうち「全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成」（2001～2008, 全20巻）で未公開部分の文字化・電子化し公開準備を進める。

##### (3) オープンサイエンスの促進

山田, 中川（言語資源開発センターと協働） | アーカイブ

上記1, 2で蓄積されるデータを「危機言語データベース」（<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>）などで随時公開し、利用可能な段階から共同利用推進センターも利用する。また言語資源開発センターと協働して、それぞれのデータ保持者自身がフィールドデータを平易かつ適切にアーカイブするしくみをつくり、データのアーカイブと共同利用の準備を進める。

#### (4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

山田, 五十嵐, 井上, 中川 | イベント

- ・危機言語サミット（危機言語コミュニティや社会一般向け；文化庁，地方自治体と共催）
- ・フィールドワークチュートリアル（大学院生向け）
- ・データデポジットワークショップ（共同研究員向け）
- ・共同研究員のフィールド調査成果発表会（国内発表会，ハワイ大学と共同開催するワークショップ）
- ・その他，言語コミュニティや社会一般に向けて，危機言語の認知向上や公開データへのアクセス・利用促進を目的としたイベントや発信を行う。日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し，その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに，合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し，共同研究を行う。

## 2. プロジェクト全体の6年間の計画

上述の4つを以下の方法で毎年度継続して行う。

### (1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

各共同研究員が担当地域で主に対面調査によるフィールド調査を行い（文法記述，語彙，談話資料）データの収集および，特定トピックに関する調査を行う。

### (2) 過去の諸方言データの電子化

第4期3年目までに，選定した地点約90時間分の方言談話資料を電子化して共通語訳を付したテキスト入力を行う。さらに文字化方言と対応する共通語訳・対応部分の音声データ切り出しを行い，談話情報と話者情報のデータベースを作成して「日本語諸方言コーパス（COJADS）」に提供可能なデータとして成型する。作業は『ふるさとことば集成』から継続して行っている外部協力者に依頼する。

### (3) オープンサイエンスの促進

1の毎調査後に調査データを収集し，「危機言語データベース」で公開する。またコーパス共同開発センター（仮）と協働してメタデータのテンプレートやデータデポジット・公開フロー，アーカイブ機構そのものを整備し，利用可能な段階から1のデータを格納していく。

### (4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

各共同研究員の調査に応じて毎年度2回研究発表会を行う。また3と関連して，データデポジットに関するワークショップを開催するほか，危機言語・方言サミットを文化庁および開催地の地方自治体と共同で開催する。消滅危機言語研究の裾野を広げるため，若手研究者向けのフィールドワークチュートリアルも行う。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 25,065千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 共同研究員 11 名が 13 地点（秋田，山梨奈良田，鹿児島，奄美大島，与論島，沖縄島，石垣島宮良，小浜島，竹富島，西表島，波照間島，大神島，宮古島）で計 23 回のフィールド調査を行い，各地点の地域言語データを収集した。

(2) 共同研究員 14 名がフィールドワークの成果をプロジェクト研究会で報告し，4 名が研究会プロシーディングス原稿として投稿した（プロシーディングスは 2023 年度に出版）。外部の学会等での発表は業績リストを参照。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介・公開するサイト「危機言語データベース (<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>)」について，データのデポジットと公開の効率化をはかるため，語彙データベースに出典情報と同源語 ID を追加するなどのリニューアルを実施した。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 琉球大学島嶼地域科学研究所との連携協定に基づく北琉球語諸方言を中心とした調査については，新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施できなかった。状況をみて令和 5 年度以降に実施する予定。

(2) 東京外国語大学 AA 研との連携協定にもとづく若手研究者の育成を目的としたプロジェクトについては，AA 研の担当者との調整がつかず今年度は検討を進めることはできなかった。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

(1) イントネーションプロジェクト（代表：五十嵐）と共催で研究発表会 2 回と危機言語サミットを実施した（詳細は「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照）。フィールドワークチュートリアルは希望者がいなかったため実施せず，代わりにデータデポジットワークショップを実施した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 言語の継承保存を促進するため，マルチリンガリズムや言語の継承保存を専門とする共同研究員を新たに 5 名加えて連携体制を強化した。このうち 3 名がプロジェクト研究発表会で発表し，うち 2 名が研究会プロシーディングス原稿を共著で執筆した。

(2) 危機言語サミットにおいて「ブース発表」を新設し，各地で継承保存を行っている 9 組が取り組みを発表し，来場者と合わせて情報交換を行う機会をつくった。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

(1) 「データベース等の構築」に記載した通り，「危機言語データベース」のリニューアルは計画通り実施した。並行して調査データの整備も進めたが，サイトリニューアルに時間がかかったため，データ公開には致らなかった。整備が完了次第，令和 5 年度中に公開する。

(2) 文化庁資料（各地方言緊急収集調査）の電子化を進め，岡山県新見市の自然談話データ・場面設定データ・語りデータを公開した。国語研リポジトリがシステム変更期間だったためこれ以外は公開できず，他のデータは次年度公開予定（神奈川県小田原市，岐阜県高山市，愛知県西春日井郡師勝町，滋賀県神崎郡能登川町，岡山県岡山市，福岡県八女市，大分県日田郡前津江村，鹿児島県大島郡龍郷町・笠利町）。

<http://doi.org/10.15084/00003712>

<http://doi.org/10.15084/00003713>

<http://doi.org/10.15084/00003714>

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 5 月 28 日と 12 月 4 日に，「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーション」（リーダー：五十嵐）と共同で，「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会を開催した（5/28：発表 9 件・参加者 98 名，12/4：発表 7 件・参加者 70 名）。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220528a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220528a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221204a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221204a/)

(2) 1月28・29日に、「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーション」(リーダー：五十嵐)と連携し、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・沖永良部」を鹿児島県大島郡知名町(沖永良部島)で開催した。(発表16件、参加者約350名)

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

(1) プロジェクトの活動の成果を、書籍1冊、論文11本、総説・解説・プレプリント2本、コーパス・データベース1件、発表・講演52件、講習・チュートリアル7件、一般向け講演・セミナー4件、執筆記事11件、取材を受けた記事7件、として公表した。

#### データベース等に関する講習会・講演会(アウトプット)

- (1) 12月3日に共同利用研究員を対象としてデータデポジットワークショップ「方言語彙データ作成講習会」を実施し、語彙データやアクセント資料の調査方法から危機言語データベース登録時の手続きまでのチュートリアルを行った(参加者11名、うち若手3名、うち学生1名)。
- (2) 7月16日に「文化庁「各地方言収集緊急調査」方言談話整備 共同プロジェクト 説明会&講習会(「みんなで談話整備プロジェクト」説明会&講習会)」を開催し、文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成した(参加者131名、うち学生26名)。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 特別共同利用研究員の受け入れ

(1) 「日本学術振興会特別研究員(RPD)1名の受け入れを申請する。」という計画については、応募資格が変更になったため申請できなかった。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員4名を雇用し、言語の記録保存と継承保存に関する研究を行うことで、消滅危機言語研究を推進する人材を育成した。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 大学院生7名を含む若手研究者(35歳以下24名、40歳未満4名)を共同研究員として参画させ、調査旅費の支援、研究会・プロシーディングスでの発表、チュートリアルなどにより、消滅危機言語研究を推進する人材を育成した。

### 若手研究者への発表の機会の提供

(1) 若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために、プロジェクト主催の研究発表会(5月28日・12月4日)を開催し、若手研究者9名に発表の機会を提供した。

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

(1) 若手研究者の危機言語調査への参加や研究発表を促すために、若手研究者に対し調査・研究発表にかかる費用を支援した(調査旅費5名10回、サミット参加旅費6名、研究会参加3名)。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

(1) データデポジットワークショップ「方言語彙データ作成講習会」を実施した(詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照)。フィールドワークチュートリアルは希望者がいなかったため実施しなかった。

(2) 7月16日に「文化庁「各地方言収集緊急調査」方言談話整備 共同プロジェクト 説明会&講習会(「みんなで談話整備プロジェクト」説明会&講習会)」を開催し、文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成した(参加者131名、うち学生26名)。

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 地域・社会との連携

- (1) 鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）との協定を更新し、中央公民館講座  
町職員研修会、町広報誌での連載などをとおして地域言語の記録と継承に関して連携した。
- (2) 「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」に記載の通り、文化庁、知名町と共同で一般向けの「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」を開催した。「異分野の研究者との共同研究・協業等」に記載の通り、今回のサミットでは新たに「ブース発表」を設け、各地で継承保存を行っている9組が取り組みを発表し、研究成果を地域に還元するだけでなく、発表者と来場者が情報交換を行う機会をつくった。

#### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 和泊町職員方言研修会（6月8日）、沖永良部高校出前授業（3月23日）、知名町中央公民館講座（毎月1回2時間）を実施し、地域言語コミュニティ内で地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を行った。講座受講生が実践演習として収集した語彙データを危機言語データベースで公開したほか、研修会・講座受講生のうち4名が小学校の特別講師として方言指導を行い受講内容を実践した。

<https://museum.ninjal.ac.jp/area/okinoerabujima/ashikyora/post-1006.html>

<https://museum.ninjal.ac.jp/area/okinoerabujima/category-45/post-1054.html>。

#### 研究成果の社会への還元

- (1) 知名町生涯学習フェスティバルで中央公民館講座の発表を行った（11月3日）。
- (2) ジュンク堂書店那覇店で「4つの島のことばの絵本展」（7月11日～8月10日）を開催し、会期中（7月30日～8月4日）に読み聞かせ会、トークショー、民謡ライブ、ワークショップを実施した（[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220711a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220711a/)）。  
<https://museum.ninjal.ac.jp/area/okinoerabujima/kunigami/post-973.html>  
<https://museum.ninjal.ac.jp/area/taketomijima/post-989.html>
- (3) 知名町広報誌（4月から毎月）と和泊町広報誌（1月から隔月）での連載コラムを執筆した。  
<http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>  
<https://www.town.wadamari.lg.jp/kikaku/wadamaricho/koho/wadamari.html>
- (4) 和泊町職員方言研修会（6月8日）、沖永良部高校出前授業（3月23日）、知名町中央公民館講座（毎月1回2時間）を実施した。
- (5) 地域言語絵本（『ディラブディ』（与那国語）と『塩一升の運』（沖永良部語））を出版した。

### 4. グローバル化に関する計画

#### 海外の研究者の受入

- (1) アイヌ語と沖縄語の継承保存を研究テーマとする博報財団招聘研究者を1名受け入れた。
- (2) 海外機関に所属する共同研究員を1名増やし5名とし、今後の継承保存研究の展開について協議した。

#### 海外の大学との連携等

- (1) 2月12-17日にプロジェクトリーダーと共同研究員2名が米国ハワイ大学マノア校を訪問して協定調印式に出席し、協定の更新を行った。同校の教員との研究打ち合わせ3件、学生指導4件、琉球語を専門とする図書館司書との打ち合わせ1件を実施した。このときに同校と共催した研究会は「国際シンポジウムの開催」を参照。

### 国際シンポジウムの開催

- (1) 2月16-17日に米国ハワイ大学マノア校においてNINJAL-UHM Linguistics Workshopを同校と共催し、琉語諸方言を含む国内外の記述の少ない言語についての研究交流を行った（総発表件数8件（うち国外機関所属4件、学生2件）、参加者48名（うち国外機関所属者32名、学生参加者15名））。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230216a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230216a/)

### 英語による研究成果の発信等

- (1) プロジェクト成果を広く世界に発信するため、「危機言語データベース」の英語サイトを拡充した。

## 5. その他

- (1) 消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港プロジェクト」（プロジェクトリーダーが代表を務め共同研究員3名が参加）が、ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から、沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的としたオーキッドバウンティを授与された。

<https://www.daikin.co.jp/press/2023/20230228>

# 「消滅危機言語の保存研究」評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

共同利用・共同研究と教育・人材育成については計画どおりに、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信については計画を上回って実施できている。

プロジェクトの活動成果は、書籍1冊、論文11本、総説・解説・プレプリント2本、コーパス・データベース1件、発表・講演52件、講習・チュートリアル7件、一般向け講演・セミナー4件、執筆記事11件、取材を受けた記事7件、公表されている。この成果からもわかるように、本プロジェクトは、アウトプットを着実に実施している。書籍・論文等の発表に限らず、特に、地域・社会へのアウトプットは積極的である。アウトプットに関して全体的に計画以上のことが実施されていることは高く評価できる。

データ収集についても、第3期プロジェクトの成果を「増やす・深める・広げる」という形で発展させるという本共同研究の計画は、2022年度も計画どおりに進めることができたと思われる。

アウトプットや国際発信については計画を上回っており、全体としては「計画を上回って実施している」と評価できる。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

11名で13地点での計23回のフィールド調査を行った他、危機言語データベースのリニューアル、各地方言緊急収集調査の電子化とデータ公開（岡山県新見市の自然談話データ・場面設定データ・語りデータ）、2回の研究発表会、および「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」の開催、さらに書籍1冊、論文11本、学会発表64件など、アウトプットもしっかり行っている。特に研究成果の発表は、着実かつ積極的に行っているように見受けられる。

言語の継承保存を促進するために、新たに5名の専門家を共同研究員として加えるなど、研究体制について必要な見直し・強化を行っていることも評価できる。

#### 2. 教育・人材育成について

データデポジットワークショップの実施に加えて、「みんなで談話整備プロジェクト」説明会&講習会を開催して文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成するなど、消滅危機言語研究を推進する人材の教育・育成については、概ね計画どおりに実施できていると言って良いだろう。特に、本共同研究には若手研究者が多く参画しているが、彼らに発表の機会や情報交換・議論の機会を数多く提供し、またその場に参加できるようにサポートをするなど、若手研究者の育成に努めていることは評価できる。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

自己評価でも「地域・社会との連携に関する計画」にはAが付けられているが、報告書からも、本共同研究が地域・社会連携の重要性を十分に理解し、積極的に社会連携・社会貢献を行ってきたことが読み取れる。

2022年度は、「鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）との協定の更新」、「文化庁・知名町

との危機言語サミットの共催」という計画が立てられていたようであるが、いずれも計画どおりに実施されている。前者については、単発の研修会や特別授業だけでなく、月一の講座や和泊町と知名町の広報誌に連載を持つなど、地域との具体的、かつ継続的な連携ができているようである。後者については、研究成果を地域に還元するという一方向だけでなく、来場者を交えた情報交換の機会を作るなど、双方向になる工夫が成されている。地域との関係を築き、具体的で、地域に伝わりやすい社会連携を行うことができているように思われる。さらに、地域言語絵本の出版をするなど、2022年は計画以上の社会連携・社会貢献が実施できていると判断して良いだろう。

#### 4. 国際連携・国際発信について

博報財団招聘研究者1名の受け入れ、国外機関に所属する共同研究員4名、米国ハワイ大学マノア校との連携協定、「危機言語データベース」英語サイトの拡充、という計画を立てていたようであるが、これらはいずれも計画どおりに実施されている。

また、ハワイ大学マノア校においてNINJAL-UHM Linguistics Workshopを共催し、琉語諸方言を含む国内外の記述の少ない言語についての研究交流を行うことは、計画にはなかったことであり、計画以上のことも実施できている。

#### 5. その他特記事項

消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港プロジェクト」（プロジェクトリーダーが代表を務め、共同研究員3名が参加）が、ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から、沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的とした「オーキッドバウンティ」を授与されたとのこと。これは、本プロジェクトの社会貢献が社会から認められたということであり、本プロジェクトがアウトプット、社会連携を積極的に実施してきたことの成果であると言えるだろう。極めて喜ばしいことである。

# 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多言語・多文化社会における言語問題に関する研究

プロジェクトリーダー：朝日 祥之

## 令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、多言語化が進んだ日本社会で発生している言語問題の中でも、日々の言語生活に欠かさない分野である行政、医療福祉分野を中心とした言語問題の所在を明らかにするための社会調査、ならびにそれを支える基礎調査を実施する。

多言語化・多文化による社会変容により、特に行政・医療福祉分野における言語問題が生じている。国立国語研究所においても、「外来語言い換え提案」「病院の言葉」に関するプロジェクト、大規模自然災害をきっかけとして提唱された「やさしい日本語」など、その成果は少なくない。ただし、これらはそれぞれ「国語問題・国語施策」、「日本語問題・日本語施策」のための研究であり、多言語化・多文化した日本社会の言語問題を包括的に捉えることにはならない。本プロジェクトでは、国立国語研究所で実施された「国語・国字・日本人の視点」による言語生活研究の再定義を行い、行政・医療福祉分野における言語問題を把握する。本研究の最終的な目的は、言語生活の現在を的確に捉えた上で行政、医療福祉を中心とした分野に内在する言語問題をリアルタイムに捉えることにある。

本プロジェクトでは、多言語化・多文化による社会変容によって生じた日本社会において、行政と医療福祉の専門家に生じている言語問題の所在を把握する社会調査を実施する。社会調査のデータを公開するとともに、言語問題を的確に把握するための基礎調査の実施、そこで得られたデータを活用した分析を実施する。

なお、実施にあたっては、人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」、並びに同機構共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」と連携する。

#### 【研究組織】

本プロジェクトは次のような研究班を組織する。

【総括班】研究全体の運営、研究組織化、研究班間の連携、共同研究発表会・シンポジウム等を企画・運営する。

【自治体研究班】自治体を対象とした社会調査を企画・実施する。

【外来語研究班】外来語に関する社会調査を企画・実施する。

【言語変異研究班】言語変異（音韻・アクセント・形態等）に関する調査研究を企画・実施する。

【言語景観研究班】言語景観に関する調査研究を企画・実施する。

【手話研究班】手話（日本手話・日本語対应手話・外国手話等）に関する調査研究を企画・実施する。

【言語使用研究班】日本に居住する外国人の言語生活，ならびに日本人リテラシーに関する調査研究を企画・実施する。

【研究成果】

- ・各調査班では，実施した社会調査を集計をしたデータ集を刊行し，調査結果をリアルタイムに発信していくとともに，調査データの公開を行う。
- ・各調査班では，専門家調査班による社会調査の動向を踏まえた調査研究を実施し，その成果を学会，国際会議での口頭発表，シンポジウムの開催，研究論文集の刊行などを通じて発信する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（自治体調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催
2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（医療福祉調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	言語生活調査（外来語調査・言語使用調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行 社会調査データを活用した研究書の刊行
2025 (R7) 年度 （前半） 2025. 4 ～2026. 3	社会調査の企画と実施 社会調査に基づく研究成 果の公開 研究成果の公表	言語生活調査（言語使用調査）の設計・実査 シンポジウムの開催 年2回，研究発表会の開催 一般講演会(NINJAL フォーラム)の開催 調査報告書の刊行
	暫定評価	

2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	研究成果のまとめ	研究成果をまとめた研究書の刊行 年2回, 研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	最終まとめ	啓蒙書・普及書の刊行 年1回, 研究発表会の開催

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 26,980千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

7つの研究班のうち5つの班が次の通り社会調査を実施した。

- (1) 【自治体研究班】自治体職員に言語問題の所在を明らかにするための調査（『行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査 II』）を実施した。具体的には国立国語研究所により2003年に実施された『行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査（自治体調査）』の経年調査と位置付け、当時の調査票をもとにした調査票を作成し全国580自治体に勤務する一般行政職員（1自治体33名、計19,140人）を対象とした郵送法による社会調査を2023年2月に実施した。
- (2) 【外来語研究班】行政・医療福祉を中心とした分野における外来語の使用実態を明らかにするための調査（『現代日本語における外来語使用実態調査』）を実施した。国立国語研究所の『外来語定着度調査』、文化庁の『国語に関する世論調査』で使用された調査項目をもとにした調査票を用い、全国住民3,600サンプルを対象とした郵送法による調査を2023年2月に実施した。
- (3) 【言語変異研究班】現在の言語生活を的確に把握するための基礎研究としての調査を文字表記・音韻・アクセントについて実施した。具体的には、文字表記については漢字の略字・俗字調査を2022年10月にweb調査により実施し600名から回答を得た。音韻については、東京都における母音の無声化に関する経年調査をフィールド調査により実施するとともに、調査会社による調査（東京都における母音の無声化を含む音韻調査、ならびに群馬県前橋市と静岡県静岡市におけるアクセント調査）を2023年2月、3月に実施した。
- (4) 【言語景観研究班】言語景観の実態を捉えるためのフィールド調査を東京都江戸川区、群馬県大泉町、神奈川県愛川町、埼玉県八潮市、埼玉県三郷市、千葉県佐倉市、静岡県袋井市、愛知県豊田市、名古屋市、碧南市で2022年5月から2023年1月にかけて実施した。これ以外にもGoogle street viewを用いたデータ収集を埼玉県川口市で実施した。
- (5) 【手話研究班】手話研究班では、日々の言語生活でのろう者同士、または聴者とのコミュニケーションに見られる言語問題を手がかりに両者にとってよりよいコミュニケーションの形を考えるクロストークを企画した。そのクロストークで使用する映像資料を作成するために、ろう者3名に対する聞き取りを2023年2月に行い、その様子を収録した。その収録映像を用いたクロストークを2023年度に実施する予定である。

### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 【自治体研究班】【外来語研究班】【言語変異研究班】いずれの研究班において実施した調査（「フィールド調査・実験等」1, 2, 3参照）で得られたデータは、いずれも調査委託業者によって整備が進められた。納品後の調査データを分析するとともに公開に向けたデータの整備に着手した。
- (2) 【言語景観研究班】2022年度中に実施した調査（「フィールド調査・実験等」1, 2, 4参照）で撮影した写真データをもとに調査データ整備を進めた。
- (3) 【手話研究班】2023年2月に収録した映像（「フィールド調査・実験等」5参照）をもとに書き起こしを行い、画面に字幕を挿入し、クロストークに用いる映像資料として使用するための準備を進めた。
- (4) 【言語使用研究班】本プロジェクトの準備研究として2022年度に日本に居住する外国人（ネパール人、フィリピン人、中国人、韓国人）並びに日本人を対象としたweb調査のデータから集計表を作成し、報告書作成の準備を進めた。

### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会と音声認識・画像認識をめぐる調査の設計について打ち合わせを行った。なお、オーストリア科学アカデミーの担当者が配置換えにより所属する部署に変更が生じた。

### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」については、「手話研究班」での活動、同共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」についてはオーストリア科学アカデミーとの活動において連携した。科学研究費補助金（基盤研究（C））「難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証」（課題番号：21K00551）に関しては、「外来語研究班」での調査項目の検討において、情報共有をしてもらうことで連携を図った。
- (2) 国立国語研究所「定住外国人のよみかき研究」と連携し、地域に在住する外国人の言語問題（よみかきを含む）の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を開催するとともに、シンポジウム「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へ—中国・サハリン帰国者の事例から—」（詳細は[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230312a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230312a/)を参照）を共催した。また、科学研究費補助金（基盤研究（C））「言語レパトリーの構造と形成に関する研究」（課題番号：20K00623）に関しては、昨年度実施した事前研究からの連携を今年度も継続的に行った。その成果の一部については、ベルリン日独センター主催のシンポジウム（2022年6月）、第243回NINJALサロン（2022年10月11日）で研究発表を行った。

### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会学を専門とする研究者には言語使用研究班で計画している調査地点の選定をめぐって知見を提供してもらった。データサイエンスの研究者には社会調査の調査票設計、サンプリング方法について知見を提供してもらった。

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 共同研究発表会「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」を2023年3月11日・12日に開催した（講演2件、口頭発表4件、参加者107名）。

根拠資料：[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230311a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230311a/)

- (2) NINJAL コロキウムに本プロジェクトに関連する研究者（東照二氏、Florian Coulmas氏、中村桃子氏）を招待し日本における社会言語学的研究の重要性を示す講演をしてもらった。

根拠資料：[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220614a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220614a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221220a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221220a/)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230110a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230110a/)

## 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 今年度は、本プロジェクトの準備研究や本プロジェクトに関連する科研費などのプロジェクトを活用した研究を進めた。その成果を、書籍（1冊、De Gruyter Mouton 社）、査読付き研究論文（「計量国語学」1本）、発表・講演 15 件、辞書項目 2 件として公表した（「研究成果一覧」参照）。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を 3 名雇用した。

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 一橋大学大学院での講義で本プロジェクトの成果を話題にした。
- (2) 2023 年度から開始する総研大に向けてシラバスや教材の準備を進めた。

### 大学院生、学振 PD 等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生（2 名）をプロジェクト非常勤研究員として参画させた。言語景観調査（1 フィールド調査・実験等の「言語景観調査班」を参照）のデータ収集並びに国際会議 Sociolinguistics Symposium 24 「研究成果一覧」での研究発表で共同で行うことにより、社会言語学的研究を推進できる人材の育成につとめた。これとは別に大学院生（1 名）をプロジェクトに共同研究員として参画させることにより、自身で社会言語学的研究を推進できる人材の育成につとめた。
- (2) 学振 PD（1 名）をプロジェクトに参画させ、研究成果についての発表を行うなど、言語問題に関する研究を進める人材を育成した。なお、学振 PD は大学に就職した。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 2023 年 3 月 11 日、12 日に開催した共同研究発表会「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」で研究発表の機会を提供した。
- (2) Sociolinguistics symposium(2022 年 7 月開催)での研究発表を共同で行った。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 地域・社会との連携

- (1) ろう者の研究者（1 名）に本プロジェクトに参加してもらった。
- (2) ろう者と聴者の相互のやり取りに関する聞き取りをろう者 3 名に対し行った【手話研究班】。
- (3) 日本に居住する外国人調査の設計において、調査地点や話者の紹介などの連携を現地にすむ日系ブラジル人（2 名）と連携して行った【言語使用研究班】。

### 研究成果の社会への還元

- (1) 本プロジェクトに関連する内容を含んだオンライン講義を「国語研レクチャーシリーズ 20 社会言語学入門：ことばのバリエーションを見つめる」としてオンラインで配信した。

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者（8 名）をプロジェクト共同研究者として受け入れた。そのうち、共同研究者（2 名）を 2023 年 3 月に日本に招待し、NINJAL コロキウム・研究発表会での講演を行うとともに、2023 年度より言語使用研究班により実施する調査設計を行った。

根拠資料：[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221220a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221220a/)

### 英語による研究成果の発信等

- (1) Handbook of Japanese Sociolinguistics (De Gruyter Mouton)を2022年4月に刊行した。また、Sociolinguistics symposium 24 (SS24)での発表を通して海外に研究成果を発信した。

# 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」 評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

本プロジェクトは、人間文化研究機構の2つの共創先導プロジェクトと連携しつつ、多言語化・多文化による社会変容によって生じている日本社会における言語問題のうち、行政、医療福祉分野を中心に社会調査・基礎調査、分析を行い、その所在を包括的に把握することを目的としている。総括、自治体研究、外来語、言語変異、言語景観、手話、言語使用の7つの班から組織され、調査結果のリアルタイムでの発信、調査データの公開を行う。

6年間の初年度にあたる令和4年度の計画は、概ね予定どおりに実施されたと判断するものの、以下に記すように、いくつかの看過できない問題もある。今後、本プロジェクトを進めていくにあたり、参考にされたい。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

自治体研究班、外来語研究班、言語変異研究班、言語景観研究班、手話研究班が調査を行った。実施時期が年度末（2023年2、3月）に集中しており（5つの調査のうち4つ）、着手したと記載されている調査データの分析、および公開に向けたデータ整備は、当該年度内にはそれほど進まなかったのではないかと推察されるもの、2年目以降は年度初めからの計画的な実施が期待される。

人間文化研究機構の2共創先導プロジェクトとは、オーストラリア科学アカデミーとの活動を通じて連携を図っている。

研究発表会・講演会は計画どおり年2回開催され、研究成果も、書籍一冊の刊行を含め、徐々に始めている。

#### 2. 教育・人材育成について

計画どおり非常勤研究員を3名雇用し、共同で言語景観調査班のデータ収集及び国際会議での研究発表を行った。また非常勤研究員としてプロジェクトに参画したPD1名は大学に就職している。年度末に開催された本共同研究発表会では、当該分野の第一線で活躍する海外研究者とともに若手研究者が研究発表（5件）を行っており、適切な育成の機会を提供していると認められる。

一方、一橋大学大学院の講義では、計画のとおり「本プロジェクトの成果を話題にした」と記されているが、例えば5つの社会調査のどれをどのように取り上げたのか等、その内容の詳細が分かるような記述が求められるのではないかと推察される。同様に、2023年度から始まる総研大の授業シラバスや教材準備についても、より具体的な記載が望ましい。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

手話研究班には研究者を含むろう者4名が参加し、言語使用研究班では日本に居住する日系ブラジル人2名と連携しつつ調査の設計が行われた。加えて、自治体の外国人相談員との懇談会を開催している。次年度以降も、このように当事者とともに研究を進めていくことが期待される。

高校生向けの講義は、よい取り組みである。当該年度は見学のために来訪した生徒が対象だったが、

オンライン講義など、さまざまな可能性を検討してほしい。

#### 4. 国際連携・国際発信について

プロジェクト研究員として受け入れる8名の海外研究者のうち、2名を招いてコロキウム・研究発表会を行った。招聘研究者は、調査設計にも参画している。2.にも記したように、2名が出席する研究発表会で若手が成果を発表する機会を得たのは、有意義と認められる。

#### 5. その他特記事項

全般に、具体性が乏しい。判断できる範囲で評価を行ったが、次年度以降は計画・報告ともより詳細な記載を求めたい。

# 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

## 令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

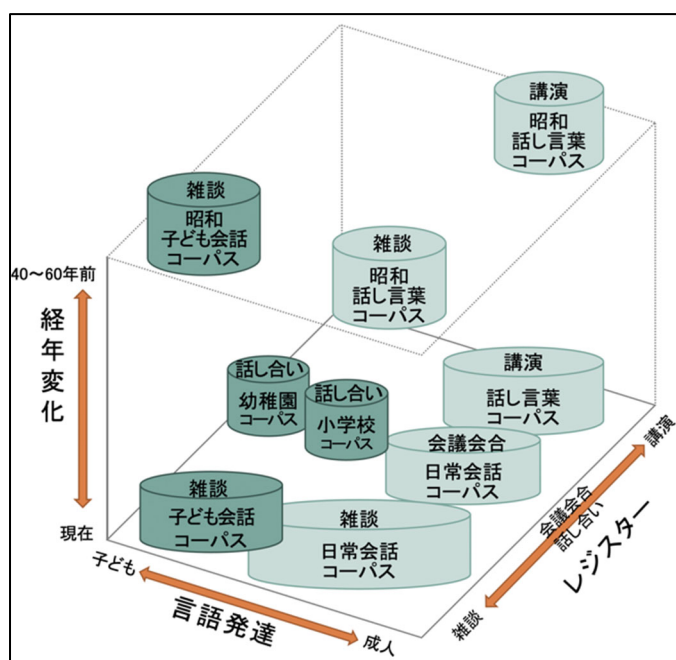
## I. 計画期間内の概要

### 1. 目的及び特色

本プロジェクトは、子どもを中心とする多様な場面・相手との会話を含む映像付きコーパスを新たに開発し、成人中心の既存のコーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで多世代に渡り実証的に研究できる基盤を構築することにより、日本における言語発達研究を幅広い分野の研究者との連携体制のもとで展開させることを目的とする。また、各種会話コーパスを活用した技術開発を見据えた基礎研究を推進する。

これまで乳幼児を含む子どもの言語発達に関する研究が数多く行われてきたが、発達研究は乳幼児に限られるものではなく、学童期、青年期、成人初期、壮年期、老年期など、多世代に渡り見ていく視点も不可欠である。特に、高齢者や子育て世代の孤立など家族の問題が複数世代化し、多世代交流が国の重要施策の一つとして掲げられるなか、乳幼児から高齢者までの多世代を対象に、日常生活の中で交わされるリアルな会話を映像まで含めて記録したコーパスを構築・公開し、各世代の言語使用・コミュニケーション行動の実態やその発達・変化を実証的・多角的に研究することは、学術のみならず社会的にも重要な課題である。

そこで本プロジェクトでは、『子ども日常会話コーパス』『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』『昭和子ども会話コーパス』（いずれも仮称）を整備した上で、第3期までに構築してきたコーパスと合わせて活用することにより、話し言葉の特性を、①言語発達、②言語教育、③時代による言語の変化、④話し言葉のレジス

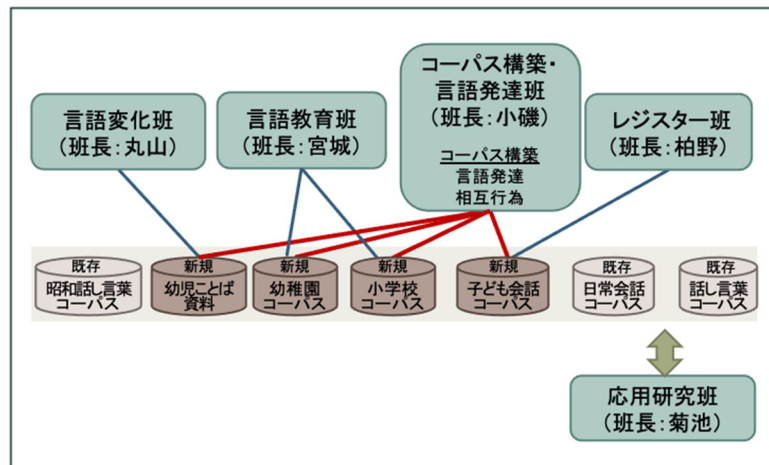


ターの多様性の観点から明らかにすると同時に、⑤各種話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について探る。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### ◆ 全体計画・研究組織 ◆

本プロジェクトの実施にあたって、図に示す5つの班を組織して研究を推進する。



**コーパス構築・言語発達班：**子どもを中心とする会話を収録した映像付きコーパスを新たに構築した上で、成人中心の『日本語日常会話コーパス』(CEJC)も活用することにより、コミュニケーションを含むことばの発達の過程を子どもから成人まで多世代に渡り実証的に研究する。言語発達研究において層の薄い学童期の児童やバイリンガル環境の子どものデータも拡充することで、日本語教育も含めて発達研究を幅広く推進する。

**言語教育班：**コーパス構築・言語発達班と共同で幼稚園および小学校での話し合い活動を中心としたデータを収録し映像付きコーパスを構築した上で、幼児期から学童期にかけての言語使用やコミュニケーション行動の実態とその発達を言語教育の観点から研究する。

**言語変化班：**成人を中心とする50年前の話し言葉と、現代の話し言葉を納めたコーパスを活用し、成人の話し言葉の経年的な変化を実証的に研究する。また50年前の子ども（1名）の会話を対象とする小規模コーパスを新たに構築し、子どもや子どもと接する母親の話し言葉の経年的な変化も研究する。

**レジスター班：**雑談や話し合いなど多様な場面の会話を含む成人中心のCEJCと、子どもの雑談中心の『子ども日常会話コーパス』や話し合いを中心とする『幼稚園話し合いコーパス』『幼稚園話し合いコーパス』を主対象に、国語研所有の多様なレジスターのコーパスも合わせて活用することにより、子どもから成人までの年齢層ごとに言葉のレジスター的多様性を実証的に研究する。

**応用研究班：**第3期で拡充した話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について、基本周波数推定、音源分離、音声認識などの音響処理技術や、会話音声から盛り上がりや話者の感情・態度推定やターン認識などのコミュニケーション評価技術などの観点から検討する。高齢者や子育て世代の孤立という問題は技術的な支援も重要となる。こうした技術開発を見据えた基礎研究をコーパス開発と同時に進め、コーパスを評価する。

◆ 年次計画 ◆

2022 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li> <li>・データ公開</li> <li>・成果発表</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：収録・転記・情報付与開始</li> <li>・幼稚園会話コーパス：収録・転記開始</li> <li>・小学校会話コーパス：収録・転記開始</li> <li>・昭和子どもコーパス：データ整備・転記開始</li> <li>・日本語日常会話コーパス：RDB 一般公開</li> <li>・シンポジウム：2回</li> <li>・コーパス講習会：2回</li> <li>・チュートリアル：1回</li> </ul>
---	---

2023 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li> <li>・データ公開</li> <li>・成果発表</li> <li>・書籍刊行</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：データ収録・転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：収録・転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続</li> <li>・昭和子どもコーパス：転記継続</li> <li>・名大会話コーパス：形態論情報更新・中納言版再公開</li> <li>・子ども会話コーパス：50 時間プロジェクト内部公開</li> <li>・日本語日常会話コーパス関連の論文集：1冊</li> <li>・シンポジウム：1回</li> <li>・コーパス講習会：2回</li> </ul>
--	--

2024 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li> <li>・データ公開</li> <li>・報告書刊行</li> <li>・成果発表</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続</li> <li>・昭和子どもコーパス：転記継続</li> <li>・子ども会話コーパス：50 時間モニター公開</li> <li>・昭和子どもコーパス：本公開</li> <li>・子ども会話コーパスモニター版の設計の報告書：1冊</li> <li>・シンポジウム：1回</li> <li>・コーパス講習会：2回</li> </ul>
---	--

2025 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li> <li>・データ公開</li> <li>・成果発表</li> <li>・書籍刊行</li> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・子ども会話コーパス：100 時間プロジェクト内部公開</li> <li>・幼稚園会話コーパス：プロジェクト内部公開</li> <li>・シンポジウム：1回</li> <li>・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの設計・構築関連の書籍：1冊</li> <li>・コーパス講習会：2回</li> </ul>
--	--

## 2026 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ公開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：100 時間モニター公開</li> <li>・小学校コーパス：プロジェクト内部公開</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・成果発表</li> <li>・書籍刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンポジウム：1 回開催</li> <li>・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの活用法関連の書籍：1 冊</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーパス講習会 2 回</li> </ul>

## 2027 年度

<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ収集・整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：情報付与継続</li> <li>・幼稚園会話コーパス：情報付与継続</li> <li>・小学校会話コーパス：情報付与継続</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・データ公開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども会話コーパス：本公開</li> <li>・幼稚園コーパス：本公開</li> <li>・小学校コーパス：本公開</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・成果発表</li> <li>・書籍刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンポジウム：1 回開催</li> <li>・子ども会話コーパス関連の論文集：1 冊</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・若手育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーパス講習会 1 回開催</li> </ul>

## II. 令和 4 年度の活動

令和 4 年度予算額 26,952 千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『子ども日常会話コーパス』（目標 100 時間）について、8 世帯 14 名の子どもの収録を進め、うち 6 世帯 11 名について予定通り収録調査を終えた。約 20 時間のデータについては文字化と形態論情報付与を進めた。第 3 期に構築した『日本語日常会話コーパス』と同様、映像・音声も含めて公開することから、映像のボカシ処理や音声のマスク処理を進め、公開準備が整った 17 時間のデータについて、「調査データ・データベース等公開」3 に示す通りプロジェクトの共同研究員に限定公開した。
- (2) 『昭和子ども会話コーパス(仮)』について、1975 年から 3 年間かけて国語研で収録した男児 1 名（と女児 1 名）の 1 歳から 4 歳までの話し言葉の記録 100 時間について、これまで文字化資料が『幼児のこことば資料(1)～(6)』（冊子）と CHILDES（電子版）で公開され広く研究に活用されてきたが、音源が公開されていなかった。そこで、研究資料室に保管されている音源を共同利用推進センターと共同で整理し、100 時間分の音声データを全て聞き直した上で文字化（1 次作業）を実施した。
- (3) 『幼稚園会話コーパス(仮)』について、幼稚園での話し合い活動の収録について、コロナの影響で活動が制限されたため今年度は収録できなかったが、収録調査・データ公開に関する同意取得の手続きは進め、状況が整い次第、速やかに収録が再開できるよう準備を進めた。
- (4) 小学校での話し合いを伴う授業を対象とする『小学校会話コーパス(仮)』について、富山大学・宮城准教授と連携して 20 回分の授業の収録を進めた。

- (5) 『名大会話コーパス』について、2016年度に公開した短単位データは解析精度が悪かったため、『日本語日常会話コーパス』を学習データに利用した解析辞書を用いて再解析し、人手修正を加えた上で「調査データ・データベース等公開」2に示す通り再公開した。

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/nuc.html>

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 富山大学教育学部（宮城准教授）と連携し、附属の幼稚園での収録準備、および小学校での収録を進めた（「データベース等の構築」(3)、(4)参照）。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」と連携し、高齢者を対象とする話し合い活動の収録データに対して、修辞機能アノテーションを付与するためにマニュアルを整備した。また試験的に付与したデータに基づき研究を進め、アノテーションの妥当性を検討した。
- (2) プロソディに関するシンポジウムを「イントネーション」プロジェクトと合同開催した（「公開の研究発表会等」1①参照）。
- (3) コーパス講習会を「学習者辞書」プロジェクトと、韻律ラベリング講習会を「イントネーション」プロジェクトと合同開催した（「講習会・講演会」(1)参照）。
- (4) 「言語運用」プロジェクトと連携し、海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの収集・整備を行った。
- (5) 「通時コーパス」プロジェクトの『日本語歴史コーパス 明治・大正編VI落語 SP 盤』の音声データ整備を支援した。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携して『日本語日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム傾向指数調査に基づく研究を進めた。またや昭和大学発達障害医療研究所と連携し、自閉症者との会話を対象とするコーパス構築に向けて準備を進めた。昭和大の倫理審査が終了し現在国語研の倫理審査中。2023年度から収録を開始する。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『日本語日常会話コーパス』について、各種アノテーション（短単位・長単位・係り受け・談話行為・韻律）を統合したリレーショナルデータベース（CEJC-RDB）を新たに構築し、有償版利用者に対して新規に公開した。

根拠資料：CEJC-RDB <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/rdb.html>

- (2) 2016年度に公開した『名大会話コーパス』について、「データベース等の構築」5に記した通り形態論情報の手修正作業を実施し、2023年3月24日にオンライン検索システム「中納言」で再公開した。また全文検索システム「ひまわり」のパッケージも再構築し同日に再公開した。

根拠資料：『名大会話コーパス』 <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/nuc.html>

- (3) 言語資源開発センター・「語彙資源」プロジェクトと合同で現代話し言葉用のUniDicを整備し、3月24日に公開した。
- (4) 構築中の『子ども日常会話コーパス』のうち、映像のボカシ処理など含め公開準備の整った17時間のデータをプロジェクトの共同研究員に限定公開した。令和5年度からは成人中心の『日本語日常会話コーパス』と合わせて研究を進める。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

次の通り4件のシンポジウムを開催した。

- (1) シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」を、社会言語学会および「イントネーション」プロジェクトと共催で9月3日にオンラインで開催した（口頭発表5件、参加者：207名）。

根拠資料：[http://www.jass.ne.jp/?page\\_id=1103](http://www.jass.ne.jp/?page_id=1103)

(2) 人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を2022年12月13・14日に国語院にてハイブリッドで開催した(発表：53件，参加者数：239名)。

根拠資料：<https://jsai-slud.github.io/sig-slud/96th-sig.html>

(3) 各班の成果を発信するために、「日常会話コーパス」シンポジウム VIII を2023年3月3日にオンラインで開催した(口頭：5件，ポスター：23件，参加者数：32名)。

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/sympo8.html>

(4) 関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知インタラクション 11」を2023年3月4日に国立情報学研究所で開催した(口頭：5件，パネル1件，参加者数：32名)。

根拠資料：<https://www.jdri.org/archives/1155>

#### 書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

(1) 『日本語日常会話コーパス』を活用した研究をまとめた論文集の編集を進め，1本を除き入稿を終えた。来年度刊行する。

(2) 今年度は，『日本語日常会話コーパス』など既存のコーパスを活用して研究を進めた。こうした研究の成果を，書籍2冊，ブックチャプター7本，論文18本，発表・講演98件として公表した。

#### データベース等に関する講習会・講演会(アウトプット)

(1) コーパス言語学分野の人材を育成するために，若手研究者や大学院生を主対象とする「中納言」講習会を「学習者辞書」プロジェクト(リーダー：柏野)と共催で2022年11月5日に，また「韻律ラベリング講習会」を「イントネーション」プロジェクト(リーダー：五十嵐)と共催で2022年9月16日に開催した(参加者：140名，12名)。

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/lecture2022b.html>

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/lecture2022a.html>

#### データベース等を使った研究成果・利用実績(アウトカム)

(1) 『日本語日常会話コーパス』(CEJC)活用のための講習会を2回開催するなどした結果，CEJCの「中納言」の登録ユーザ数は，新規登録3280名計22733名(2021年度19453名)，年間検索数は151959件(2021年度102167件，前年度比149%)となった。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 一橋大学連携大学院にて『日本語日常会話コーパス』を活用した演習をおこなった。

(2) 2023年度から開始する総研大に向けてシラバスや教材の準備を進めた。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員を4人雇用し，コーパス構築とそれに基づく研究を行うことにより，コーパスを活用した高度な言語学的研究を推進できる人材を育成した。うち1名が，コーパス活用研究を含む博士論文にて2022年9月に博士号(東京大学)を取得，また2名は大学に就職した

### 大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 大学院生12名を含む若手研究者30名を共同研究員としてプロジェクトに参加させ，『日本語日常会話コーパス』などのコーパスを無償提供するとともに，講習会などを通して利用方法を具体的に学ぶ機会を提供した

### 若手研究者への発表の機会の提供

(1) 若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために，非公開のショートトークの会を6回(2022年7月12・28日，8月24日，9月1日，11月19日，1月17日)開催した。また，各班合同シンポジウム「日常会話コーパス」VIIIにおいて若手9名に発表の機会を提供した。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

(1) コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会を予定通り2回開催した（「データベース等に関する講習会・講演会」(1)参照）。

(2) 日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を若手研究者等に教授することにより、次代の研究者育成を支援することを目的としたNINJALチュートリアル『日本語日常会話コーパス』活用入門』を2023年3月29日に開催した（参加者53名）。

根拠資料：[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230329a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230329a/)

(3) 話し言葉コーパスの設計と構築に関わる言語学レクチャーシリーズ「コーパス言語学—話し言葉コーパスの世界—」をYouTubeで一般公開した。

根拠資料：

<https://www.youtube.com/watch?v=Vib3Cevsdgw&list=PLZfZgVvFbh1a3zOK9Z20Jk6mA0olmcw3u&index=4>

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 産業界との連携

(1) 『日本語日常会話コーパス』の情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、民間企業の研究者も共同研究員等に加えて研究を推進した。「公開の研究発表会」1②に示すように、人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を国語研で開催し連携を深めた。

(2) 民間企業1社と共同研究協定に基づく研究を推進した。

### 研究成果の社会への発信・還元

(1) プロジェクトのホームページを立ち上げ、第3期プロジェクト「日常会話コーパス」の情報とあわせて、プロジェクトの活動・研究成果を広く発信した。

(2) プロジェクトで継続して整備・公開を続ける『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度、それぞれ6789件、5256件、5380件の新規利用申請があった。

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

(1) 海外の研究者3名を共同研究員として加え、海外での映像付きコーパスの公開・利用状況や、個人情報扱いなどについての情報交換も行いながら、研究を推進した。

(2) 海外機関に所属する研究者1名を外来研究員として迎え、『日本語日常会話コーパス』を活用した研究を進めた。

### 海外の大学との連携等

(1) 「言語運用」プロジェクトが海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの収集・整備を支援した（「他のプロジェクトとの合同の活動等」参照）。

### 英語による研究成果の発信等

(1) 『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。また『日本語日常会話コーパス』の成果については、国際会議LREC2022での発表を通して発信した。

# 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」 評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

子どもの言語活動に焦点を当てた多様な場面での映像付き会話コーパスを新たに開発し、既存の成人中心のコーパスと接続させることで、子どもから高齢者までの多世代に渡る言語の発達・変化の過程を実証的に研究できる基盤を構築するという研究目的に沿って、順調に研究活動が開始され、いくつかの成果もすでに出てきている。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

『幼稚園会話コーパス(仮)』はコロナの影響で活動が制限されたが、『子ども日常会話コーパス』、『昭和子ども会話コーパス(仮)』、『小学校会話コーパス(仮)』については、コーパス構築は順調に進展した。既存のコーパスも各種アノテーションの統合や精度を高める手直しなどによりより充実したものになった。研究成果発信も計画を上回る4回のシンポジウムを開催し、また、書籍2冊を始めとして、論文、発表など活発で充実した活動を行った。

#### 2. 教育・人材育成について

一橋大学連携大学院にて『日本語日常会話コーパス』を活用した演習を行い、2023年度から開始する総研大に向けてシラバスや教材の準備を進めた。コーパス言語学分野の人材育成のため、若手研究者や大学院生向けの2回の講習会やチュートリアルを開き、また若手研究者を含むプロジェクトメンバー間の情報交換を密にするため6回のショートトークの会を開催するなど、この分野に関しても積極的な活動が行われた。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

民間企業の研究者を加えて「応用研究班」を設け情報工学的応用可能性について検討し、人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を国語研で開催した。また、『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通して一般に発信し、多くの新規利用申請があった。

#### 4. 国際連携・国際発信について

海外の研究者3名を共同研究員として加え、また海外機関に所属する研究者1名を外来研究員として迎えるなど、国際連携を推進した。『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。『日本語日常会話コーパス』の成果は、SciValの調べで言語学分野でTop 8%の被引用数であり、国内外で広くコーパスが活用されていることが確認された。

#### 5. その他特記事項

特になし。

# 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

プロジェクトリーダー：石黒 圭

## 令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	A

### I. 計画期間内の概要

#### 1. プロジェクト全体の6年間の計画

##### 【計画概要】

本プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者（日本語学習者および定住外国人）の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その研究成果を教育支援に生かすことを目的とする。その目的を達成するため、以下の六つのサブプロジェクトを設置する。

##### (1) 多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究統括（担当：石黒）

下記の(2)～(6)の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援する。

##### (2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国、台湾、韓国、ベトナムの複数の大学と日本語学習者の作文の縦断コーパス調査のネットワークを形成し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる計12回の作文調査を行うプロジェクトです。収集したデータに基づき、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにすることを目指す。

##### (3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国の2大学の日本語学習者を対象に、大学入学から卒業までの4年、1年間に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査と、それに関連する作文調査を行い、縦断談話データベースを構築する。収集したデータを用いて、談話能力の縦断的な発達過程を作文能力との関係で総合的に明らかにすることを目指す。

##### (4) 日本語学習者の作文教育支援研究（担当：山口）

協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討する。また、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにすることを目指す。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究（担当：野山）

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者の縦断インタビュー調査について、第4期も調査を継続する。それとともに、過去の収集データの整備を行い、それらのデータを公開、分析することで、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにすることを旨とする。

(6) 定住外国人のよみかき研究（担当：福永）

生活者としての日本語学習者を対象に、日常生活における文字を介したコミュニケーション（よみかき実践）の種類、方略の使用、新しいメディアの活用等についてデータ収集を行い、よみかき実践研究の発展とよみかきに関わる外国人支援の充実を目指す。

【年次計画】

年次計画は下記の通りである。(1)～(6)、上記の(1)～(6)と対応する。

[2022(R4)年度]

(1)本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の作成・公開開始

(1)五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信

(1)第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

(2)作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回=1,800本）

(2)作文データのデータベース設計の検討

(3)談話データの収集開始（1年目、年2回、西安外国語大学18名分）

(3)談話先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分、データ収集済）

(4)作文・添削支援システムの設計、プロトタイプの実現

(4)作文・添削実践プログラムの設計

(5)生活者縦断調査（14年目）のデータ収集の継続

(5)第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続

(6)よみかき研究に関連する先行研究の動向把握と資料整備

(6)よみかきの社会的実践の予備調査の試行と本調査の設計

(6)よみかきの社会的実践（本調査）実施先との交渉

(6)よみかきの社会的実践をめぐるシンポジウムの開催

[2023(R5)年度]

(1)本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続

(1)五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信

(1)第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

(2)作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回=1,440本）

(2)作文データのデータベース構築開始

(2)作文の自動評価システム設計の検討

(3)談話データの収集継続（2年目、年2回、西安外国語大学18名分）

(3)談話先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分、データ収集済）

(3)談話研究の成果論文集の準備

(4)作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践開始

(4)作文・添削支援システム（プロトタイプ）の機能の追加

- (4) 作文教育支援実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成開始
- (5) 生活者縦断調査（15年目）のデータ収集の継続
- (5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 公開した生活者談話データ活用のための講演会または研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきの社会的実践調査（本調査）・データ収集の実施
- (6) 収集した本調査よみかきデータの文字化作業

[2024(R6)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（3年目，年3回，360名分×3回=1,080本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発開始
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの報告書刊行
- (3) 談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (3) 談話研究の研究成果論文集の刊行
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践継続
- (4) 作文・添削データベース構築準備開始
- (4) 作文教育支援実践マニュアルの作成開始
- (5) 生活者縦断調査（16年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期8年）生活者談話データの文字化・整備作業開始
- (5) 生活者縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集の刊行
- (6) 補完的よみかきデータの収集の実施
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析開始

[2025(R7)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（4年目，年3回，240名分×3回=720本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発継続
- (3) 談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）
- (4) 作文・添削支援システムを用いた本実践開始，効果の検証
- (4) 作文・添削支援システムの試験公開，実践マニュアルの公開
- (4) 作文・添削データベースの構築開始
- (5) 生活者縦断調査（17年目）のデータ収集の継続

- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析継続
- (6) 個人情報の保護を含めたよみかきデータの公開方式検討

[2026(R8)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第 3 期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データのデータベース公開準備
- (2) 作文の自動評価システム開発公開
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の準備
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究支援のワークショップの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開，一般向けの講習の実施
- (4) 作文・添削データベース（合計 3 回分の実践結果）の構築継続
- (4) 作文・添削データベースを用いた分析実施
- (5) 生活者縦断調査（18 年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 生活者談話データベース公開記念のシンポジウムの開催
- (6) 限定された範囲でよみかきデータの公開実施
- (6) 限定公開から得たフィードバックに基づく公開よみかきデータの改善

[2027(R9)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開終了
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第 3 期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (1) 本プロジェクトの 6 ヶ年の研究成果の共同利用推進センターへの移管
- (2) 作文データのデータベース公開
- (2) 作文の自動評価システム運用開始
- (2) 作文研究支援のためのワークショップ開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の刊行
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開後のメンテナンス，システムの改善
- (4) 2026 年度に構築した作文・添削データベースの公開
- (4) 作文・添削データを活用するための講習会の開催
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データベースのメンテナンス
- (5) 生活者談話データベースを活用した研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきデータの本格公開とメンテナンス
- (6) よみかきの社会的実践をめぐるデータ公開記念シンポジウムの開催

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 27,998千円

### (1) 非母語話者日本語運用統括

- ① 下記に記載する五つのサブプロジェクトと連携して研究を進めた成果を、編著書1冊、学術誌論文3本、発表・講演15件、講習会・チュートリアル開催2件、シンポジウム開催1件として公表した（「研究成果一覧」参照）。【共同利用・共同研究】
- ② プロジェクトのサイトの運用を開始した【共同利用・共同研究】
  - ・ 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の運用を2022年4月1日より開始した。
- ③ プロジェクトの情報を発信した【共同利用・共同研究】
  - ・ 五つのサブプロジェクトの研究紹介とイベント情報等を、本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>)、およびTwitter ([https://twitter.com/jsl\\_ninjal](https://twitter.com/jsl_ninjal)) より発信した。
- ④ プロジェクトのサイトで第3期の成果公開を継続した【共同利用・共同研究】
  - ・ 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) において、第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新を継続した。

### (2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

- ① 海外の18大学と共同調査を実施した【共同利用・共同研究】
  - ・ 中国7大学（北京語言大学、天津外国語大学、東華大学、重慶三峡学院、福建師範大学、華中科技大学、長春師範大学）、台湾2大学（国立政治大学、東呉大学）、韓国2大学（韓国外国語大学校、仁川大学校）、ベトナム3大学（フエ大学外国語大学、ドンア大学、ハノイ工業大学）、タイ1大学（タマサート大学）、フランス1大学（フランス東洋言語文化学院）、スロヴェニア1大学（リュブリャナ大学）、イギリス1大学（オックスフォード大学）の計18大学との共同調査体制を構築し、学習者936名（開始時）を対象に、本年度に3回（今年度に調査を開始した3大学は1回のみ）、計1,754本の作文データを収集した。なお、途中で調査を辞退した学生もいるため、開始時よりも人数はやや減少したが、調査は全体として順調に進行している。
- ② 作文データのデータベースの設計の検討に着手した【共同利用・共同研究】
  - ・ 収集した作文データのデータベース構築の方法を検討し、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に、作文データを公開するためのページを作成した。
- ③ 国内外の共同研究体制を整備し、次のような会議を開催した【共同利用・共同研究】
  - ・ 共同研究国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため、全体会議を本年度3回（8月、10月、3月）開催した。
  - ・ 計算機によるテキスト処理の効率化のため、工学系研究者である共同研究員の会議を本年度2回（5月、6月）開催し、今後のデータ処理について検討を行った。
- ④ 研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
  - ・ 講演・発表：所内イベントにおける発表を2件（オープンハウス2022、NINJALシンポジウム）、国内学会における発表を1件（日本語教育学会秋季大会）、国際学会における招待講演・招待発表を2件（第四回東アジア日本学研究国際シンポジウム、台湾日本語文学会国際学術シンポジウム）、海外の講演会における招待講演を1回（北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究センター主催「日本語学・日本語教育シリーズ講座」日本語教育部門第1回講演会）、それぞれ行った。

・論文：学術雑誌に2件、論文を掲載した（『国際学報』、『東アジア日本学研究』）。

⑤若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

・一橋大学との連携大学院の演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。

・4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

・9名（一橋大学4名、お茶の水女子大学2名、明治大学1名、筑波大学1名、東京工業大学1名）の大学院生が共同研究に参画した。

⑥産業界との連携として、次のような活用を行った【地域・社会との連携】

・(株)富士通の富士通研究所と協力し、AIによる作文の自動評価システム開発のための会議の場を設け（10月に1回、11月に1回、12月に1回、1月に2回、2月に1回、3月に1回、計7回）、検討を行った。

⑦グローバル化のため、次のような活用を行った【グローバル化】

・共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者、中国16名、台湾4名、韓国6名、ベトナム4名、タイ2名、スロヴェニア1名、フランス1名、計34名を共同研究員に加え、現地調査を推進した。

・連携して調査を進める海外の大学の教員2名（天津外国語大学、福建師範大学）を外来研究員として招聘した。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

①海外の15大学と共同調査を実施した【共同利用・共同研究】

・中国の西安外国語大学（中国）の学習者28名、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学（ベトナム）の学習者22名、チュラーロンコーン大学（タイ）の学習者20名、合計70名を対象に、年に2回のI-JAS準拠の談話・作文調査を行い、約105時間分の談話データ、および140本の作文データを収集した。

②談話データベースを公開した【共同利用・共同研究】

・収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者17名分、約136時間の談話データベースの構築を行い、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に公開した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

・「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」と連携し、共同で開発した文字入力ツール（EssayLoggerTS）およびシステム（Moodle）を用いて作文のデータ収集を進めた。

④研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

・講演・発表：所内イベントにおける発表を2件（オープンハウス2022、NINJALシンポジウム）、国際学会における招待講演・招待発表を2件（第四回東アジア日本学研究国際シンポジウム、台湾日本語学会国際学術シンポジウム）、それぞれ行った。

・講習会：NINJALチュートリアルを主催し、大学院生等を対象にした学習者コーパスの講習会を行った（2023年3月14日、オンライン、参加者31名）。

・論文：学術雑誌に1件、論文を掲載した（『東アジア日本学研究』）。

⑤若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

・一橋大学との連携大学院の演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。

・4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

・2名（一橋大学1名、東京外国語大学1名）の大学院生が共同研究に参画した。

⑥グローバル化のため、次のような活用を行った【グローバル化】

- ・現地調査を行う西安外国語大学（中国）2名，ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）2名，チュラーロンコーン大学（タイ）2名，および現地調査を共同で行った北京師範大学2名（中国），北京外国語大学4名（中国）の教員，計12名を共同研究員に加え，共同研究を推進した。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究

①プロジェクト関連の情報収集を行った【共同利用・共同研究】

- ・システム開発，システムを用いた実践論文，既存の作文コーパスについて文献調査を行った。
- ・グループ活動を取り入れた教育実践を中心に文献調査を行った。また，大学などで関連する実践を行っている9名の共同研究員にインタビューを行った。

②システムの設計・構築・共有を行った【共同利用・共同研究】

- ・システム全体，作文・添削（アノテーション）支援部分，利用者管理部分（アカウント，グループ管理など）の設計を行った。
- ・作文・添削部分，利用者管理部分を含むプロトタイプシステムをWebアプリケーションとして実装した。また，Webアプリケーション配布・作文データベース用のサーバを用意した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

- ・「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との連携において，文献調査に関連して収集した作文コーパス（2種類）を教育・研究利用するための試行として，全文検索システム『ひまわり』に取り込み，講習会の教材として配布した。また，取り込む方法はWeb上に公開した。

④研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・発表：オープンハウス2022，およびNINJALシンポジウムで本プロジェクトの紹介を行った。また，支援システムの設計について，口頭発表を1件（日本教育工学会）行った。
- ・講習会：既存の作文データ（2種類）を利用するための講習会を1回開催した（2023年2月27日，国語研で開催，参加者11名）。

⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

⑥研究成果の社会への還元に向けて，次のようなシステム公開に着手した。

- ・共同研究員向けにプロトタイプシステムをWeb上に限定公開した。

⑦グローバル化のため，次のような活用を行った【グローバル化】

- ・プロトタイプのユーザインターフェイスを，多言語表示できるよう実装した。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究

①縦断調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・生活者として地域に定住した外国人の日本語会話に関して，OPIを活用した縦断調査を実施した。
- ・フォローアップ調査を行うと共に，次年度の研究協力者との交渉・確認を行った。
- ・生活者としての地域に定住した学習者に対して，リテラシーに関するパイロット調査を，1948年の識字調査を活用して岡山県岡山市と香川県三豊市で実施した。

②公開に向けたデータの更新，整備を行った【共同利用・共同研究】

③国内外の共同研究体制を整備した【共同利用・共同研究】

- ・共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力を実施・展開した。

・社会言語学，会話分析，教育人類学等を専門とする研究者との共同研究を進めた。

④研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

・発表：オープンハウス 2022，およびNINJAL シンポジウムで本プロジェクトの紹介を行った。

・論文：学術雑誌に1件，論文を掲載した（『基礎教育保障学研究』）。

・共編著：野山広・福島育子・帆足哲也・山田泉・横山文夫編（2022）『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』ココ出版を刊行した。

⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

⑥地域・社会との連携として，次のような活用を行った【地域・社会との連携】

・縦断調査やリテラシーに関するパイロット調査を通して，地域・社会との連携強化に貢献した。

・自主夜間中学全国大会にて，リテラシーに関するパイロット調査結果の暫定版報告・発表を行った。

(6) 定住外国人のよみかき研究

①本調査の準備を行った【共同利用・共同研究】

・8名の方を対象に，生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての予備的な調査を実施した。

・国際交流協会3団体，自治体1地域，研究協力者3名に対し，次年度の本調査を実施するフィールドおよび研究協力者と交渉を行った。

②国内外の共同研究体制を整備し，本調査の検討に着手した【共同利用・共同研究】

・公開するデータの様式と規模等について研究会議を9回（オンライン7回，対面2回）開き，検討した。調査協力者の個人情報の取り扱いや配布文書の言語（英語版，ローマ字版，ひらがな版）について検討を進めた。

・他プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」と連携し，地域に在住する外国人の言語問題の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を実施した。

・社会学や移民研究を専門とする研究者との協業を進め，本プロジェクトを多角的に推進するために共同研究員2名が参加した。

③研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

・共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の共催で，生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを早稲田大学で開催した。

・オープンハウス 2022，NINJAL サロンおよびNINJAL シンポジウムで本プロジェクトに関連する発表を行った。

④若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

・一橋大学連携大学院の講義において，本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。

・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

・若手研究者3名（博士課程後期在籍者）および1名（修士号取得者）がプロジェクトに参加した。

・本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/> において，若手研究者による英語論文の文献レビュー論文3本を公開した。

・若手研究者（博士課程後期在籍者）2名の研究費・旅費を支援した。

⑤地域・社会との連携として、次のような活用を行った【地域・社会との連携】

- ・ 3 地域の国際交流協会を訪問し、連携の依頼を行った。そのうち、1 地域の国際交流協会の職員 1 名は共同研究員としてプロジェクトに参加した。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究  
 サブプロジェクト名：日本語学習者の作文の縦断コーパス研究  
 サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトでは、中国6、台湾2、韓国2、ベトナム2の計12大学との共同研究体制を構築し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる縦断調査を行い、計5,000本の作文データベースを構築する。そのデータを用い、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにする。

【特色】

■特色1：日本語をゼロから学ぶ学習者の「多様な習得過程」が見える

従来の作文研究の多くが横断的なものであり、同一の学習者の習得過程を追跡する縦断従来の作文研究の多くが横断的なものであり、同一の学習者の習得過程を追跡する縦断コーパスがきわめて少ない。横断研究では習得過程の予測にすぎず、厳密な意味での学習者一人ひとりの習得過程を知ることはできない。そこで、本研究では、日本に関連する進学や就職が多く、書き言葉のニーズが高い「中国・台湾・韓国・ベトナム」の日本語教育先進地域を対象に4年間にわたるデータ収集を行い、横断コーパスとの比較も視野に入れ、習得上の困難点や習得過程の違いを明らかにする。

調査開始時の対象となる学習者は当初600名（2年目は480名、3年目は360名、4年目は240名を想定）であり、内訳は、中国330名（天津外国語大学180名、北京語言大学20名、重慶三峡学院20名、福建師範大学50名、東華大学20名、長春師範大学40名）、台湾120名（東呉大学100名、政治大学20名）、韓国70名（韓国外国語大学50名、仁川大学20名）、ベトナム80名（フエ外国語大学30名、ドンア大学50名）を予定している。

■特色2：執筆プロセスの可視化により、「文章執筆上の困難点」が見える

作文研究の分析対象はこれまで「執筆のプロダクト（書かれた作文）」であった。しかし、作文を修正する箇所こそが学習者のメタ意識が働く困難点であり、「執筆のプロセス（作文を書く過程）」を分析しなければ学習者の困難点はわからないことが多い。そこで、本研究では、所長裁量経費を用いて開発した作文の執筆プロセス記録システム「EssayLoggerTS」を用いて、学習者の執筆プロセスにおける困難点を明らかにする。

### ■特色3：執筆者による作文の母語訳との対照により、「学習者の誤用」が見える

従来の誤用分析の多くは日本語作文のみを対象に、研究者の判断で分析されてきたが、誤用は本来、何をなぜ間違えたのか、執筆者本人でないと判断することは難しい。そこで作文執筆の際、同じ内容の作文を日本語と母語の両方で入力してもらう方法を採用し、学習者の執筆意図を適切に把握する。

### ■特色4：AIの活用により、「人間の評価に近い自動評価」が見える

本研究では、5,000本の作文データを、六つの印象観点から日本語教師と一般の母語話者に評価してもらい、そうした評価を(株)富士通の判断過程を可視化できるAIに組み込むことで、従来の機械的な評価では叶わなかった、人間の評価に近い、安定した自動評価を可能にするシステムの構築を目指す。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者作文データ収集	収集1年目 1,800本 (600名分)	収集2年目 1,440本 (480名分)	収集3年目 1,080本 (360名分)	収集4年目 720本 (240名分)		
学習者作文データベース	構築準備	構築開始	構築継続	構築継続	公開準備	公開
AI自動評価システム		開発準備	開発開始	開発継続	試験公開	運用開始
シンポジウム・講習会			シンポ1回		シンポ1回	WS1回
刊行・出版			報告書刊行		論文集準備	論文集刊行

#### 【2022(R4)年度】

- ・作文データの収集開始（1年目，年3回，600名分×3回=1,800本）
- ・作文データのデータベース設計の検討

#### 【2023(R5)年度】

- ・作文データの収集継続（2年目，年3回，480名分×3回=1,440本）
- ・作文データのデータベース構築開始
- ・作文の自動評価システム設計の検討

#### 【2024(R6)年度】

- ・作文データの収集継続（3年目，年3回，360名分×3回=1,080本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発開始
- ・国際シンポジウムの開催
- ・国際シンポジウムの報告書刊行

#### 【2025(R7)年度】

- ・作文データの収集継続（4年目，年3回，240名分×3回=720本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発継続

#### 【2026(R8)年度】

- ・作文データのデータベース公開準備
- ・作文の自動評価システム開発公開
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の準備

## 【2027 (R9) 年度】

- ・ 作文データのデータベース公開
- ・ 作文の自動評価システム運用開始
- ・ 作文研究支援のためのワークショップ開催
- ・ 研究成果論文集の刊行

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 12,765千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

(1) 中国7大学 (北京語言大学, 天津外国語大学, 東華大学, 重慶三峡学院, 福建師範大学, 華中科技大学, 長春師範大学), 台湾2大学 (国立政治大学, 東吳大学), 韓国2大学 (韓国外国語大学校, 仁川大学校), ベトナム3大学 (フェ大学外国語大学, ドンア大学, ハノイ工業大学), タイ1大学 (タマサート大学), フランス1大学 (フランス東洋言語文化学院), スロヴェニア1大学 (リュブリャナ大学), イギリス1大学 (オックスフォード大学) の計18大学との共同調査体制を構築し, 学習者936名 (開始時) を対象に, 本年度に3回 (今年度に調査を開始した3大学は1回のみ), 計1,754本の作文データを収集した。なお, 途中で調査を辞退した学生もいるため, 開始時よりも人数はやや減少したが, 調査は全体として順調に進行している。

#### データベース等の構築 (アクティビティ)

(1) 収集した作文データのデータベース構築の方法を検討し, <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に, 作文データを公開するためのページを作成した。【オープンデータ】

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 国際的な研究拠点形成のために, 中国は天津外国語大学, 台湾は東吳大学, 韓国は韓国外国語大学校とそれぞれ学術交流協定を締結している。ベトナムとはドンア大学と学術交流協定締結の方向で現在準備中である。(注:「グローバル化に関する計画」との重複有)
- (2) 国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため, 全体会議を本年度3回 (8月, 10月, 3月) 開催した。(注:「グローバル化に関する計画」との重複有)

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために, サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」のリーダー (山口昌也) との会議を2回 (8月, 1月) 開催し, 収集した作文データの活用方法を検討した。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) 計算機によるテキスト処理の効率化のため, 工学系研究者である横野准教授 (明星大学), 永田亮准教授 (甲南大学), 古山翔太院生 (東京工業大学) との会議を本年度2回 (5月, 6月) 開催し, 今後のデータ処理について検討を行った。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

(1) 2022年5月27日, 北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究中心主催「日本語学・日本語教育シリーズ講座」日本語教育部門第1回講演会において「中国人日本語学習者に見られる作文執筆の産出過程」というタイトルで招待講演を行った。

<https://bjryzx.bfsu.edu.cn/info/1113/1749.htm>

(2) 2022年9月11日, 第四回東アジア日本学国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのかーポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法ー」というタイトルで招待

講演を行った。(オンライン, URL なし) (注: サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有)

- (3) 2022年12月10日, 台湾日本語学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」というタイトルで招待発表を行った。(オンライン) (注: サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有)

<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首頁

- (4) 2022年12月10日, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」において「学習者の習得過程を可視化する—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」—」というタイトルで口頭発表を行った。(オンライン) (注: サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221210a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表 (アウトプット)

- (1) 2023年3月, 論文「日本語教育研究のための「かんたん日本語テスト」の開発—テスト開発経緯と項目分析結果を中心に」が『国際学報』創刊号(東京都立大学)に掲載された。
- (2) 2023年3月, 寄稿論文「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」が『東アジア日本学研究』第9号に掲載された。(注: サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果)

<https://www.east-asia.info/studies/009.pdf>

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院(一橋大学: 石黒担当)の演習において, 本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。【若手支援】

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために, 4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し, データの収集・整理に携わったほか, プロジェクトのミーティングに参加し, データの分析やアノテーションの付与などの検討を共同で行った。【若手支援】

### 大学院生, 学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院(一橋大学: 石黒担当)の演習等の機会を利用して, 本プロジェクトに参画する大学院生を募り, 9名(一橋大学4名, お茶の水女子大学2名, 明治大学1名, 筑波大学1名, 東京工業大学1名)がプロジェクトのミーティングに参加し, それぞれの研究観点に基づき, 収集中の作文データの分析法の発表を行った。【若手支援】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 産業界との連携

- (1) 作文の自動評価システム開発のため, (株)富士通の富士通研究所を中心としたAIの専門家との会議の場を設け(10月に1回, 11月に1回, 12月に1回, 1月に2回, 2月に1回, 3月に1回), 検討を行った。

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

- (1) 共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者，中国 16 名，台湾 4 名，韓国 6 名，ベトナム 4 名，タイ 2 名，スロヴェニア 1 名，フランス 1 名，計 34 名を共同研究員に加え，現地調査を推進した。
- (2) 連携して調査を進める海外の大学の教員 2 名（天津外国語大学，福建師範大学）を外来研究員として招聘した。

#### **海外の大学との連携等**

- (1) 国際的な研究拠点形成のために，中国は天津外国語大学，台湾は東呉大学，韓国は韓国外国語大学校とそれぞれ学術交流協定を締結している。ベトナムとはドンア大学と学術交流協定締結の方向で現在準備中である。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）
- (2) 国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため，全体会議を本年度 3 回（8 月，10 月，3 月）開催した。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

#### **国際シンポジウムの開催**

- (1) 2022 年 9 月 11 日，第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのかーポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法ー」というタイトルで招待講演を行った。（オンライン，URL なし）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）
- (2) 2022 年 12 月 10 日，台湾日本語文学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程ー日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴ー」というタイトルで招待発表を行った。（オンライン）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首 頁

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究  
 サブプロジェクト名：日本語学習者の談話の縦断コーパス研究  
 サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	S
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	-
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトでは、中国国内の2大学の学習者35名（北京師範大学17名、西安外国語大学18名）を対象に、大学入学から卒業までの4年、年に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査を行い、420時間分の縦断談話データベースを構築する。同時に、収集する談話の内容に関連する作文データを収集し、縦断作文データベースをあわせて構築する。その二つのデータに第3期で構築したI-JASの横断的データも関連付けながら、談話・作文能力の発達過程を総合的に明らかにすることを旨とする。

【特色】

学習者コーパスを構築するさいの調査は継続的でないものが多く、第二言語習得研究における習得の過程を分析するのに不十分である。とくに、話し言葉と書き言葉の発達の連関や総合的な技能の発達の研究は立ち後れている現状がある。本サブプロジェクトでは、学習者談話の研究と学習者作文の研究とを連動しながら行ことによって、発話産出と文章産出との関係について明らかにする。

本サブプロジェクトの特色は以下の4点にまとめられる。

■特色1：縦系と横系を組み合わせた習得過程の分析

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」であるI-JASに準拠する形で学習者の日本語運用の縦断データを経年的に収集し、縦横双方の観点を比較しながら第二言語習得研究が可能な学習者産出データを整備する。

■特色2：話し言葉と書き言葉の連動による習得過程の分析

談話データと作文データを並行して収集することにより、その両データを有機的に関連付け、話し言葉と書き言葉の連動も含めた学習者の総合的な習得過程を明らかにできるデータを整備する。

■特色3：各種アノテーションによる習得過程の分析

談話データには話し言葉特有の分析に必要なフィラーを識別するタグを付与したり、作文データには母語による対訳作文から得た誤用タグを付与したりするなど、それぞれのデータの分析に有効な各種アノテーションを付与し、習得過程の多角的分析を容易にするデータを整備する。

## ■特色4：背景情報による習得過程の分析

学習者・担当教師へのアンケート調査やインタビュー調査、使用教材や授業のシラバスなど、日本語の学習を背後で支える背景情報を収集し、分析に役立てる。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者談話データ収集	収集1年目 (18名分)	収集2年目 (18名分)	収集3年目 (18名分)	収集4年目 (18名分)		
学習者談話データベース	先行データ 公開準備	先行データ 公開	後続データ 構築開始	後続データ 構築継続	後続データ 公開準備	後続データ 公開
シンポジウム・講習会			シンポ1回		WS 1回	シンポ1回
刊行・出版		論文集準備	論文集刊行			

### 【2022(R4)年度】

- ・談話データの収集開始（1年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分，データ収集済）

### 【2023(R5)年度】

- ・談話データの収集継続（2年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分，データ収集済）
- ・研究成果論文集の準備

### 【2024(R6)年度】

- ・談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の刊行

### 【2025(R7)年度】

- ・談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）

### 【2026(R8)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・談話研究支援のワークショップの開催

### 【2027(R9)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・国際シンポジウムの開催

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 5,783千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 西安外国語大学（中国）、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学（ベトナム）、チュラーロンコーン大学（タイ）の学生を対象に、I-JASに準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。初年度となるR4年度は3回分のデータを収集し、合計168時間分の談話データ、および446本分の作文データを収集した（今後は年2回の予定）。内訳は次のとおりである。

西安外国語大学：談話（約 66 時間分 平均 45 分×88 名 [第 1 回 31 名・第 2 回 30 名・第 3 回 27 名]）  
作文（176 本 2 課題×88 名）

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学：談話（約 49 時間分 平均 45 分×65 名 [第 1 回 22 名・第 2 回 22 名・第 3 回 21 名]）作文（130 本 2 課題×65 名）

チューラーロンコン大学：談話（約 53 時間分 平均 45 分×70 名 [第 1 回 27 名・第 2 回 23 名・第 3 回 20 名]）作文（140 本 2 課題×70 名）

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）の談話データベースの構築を行い、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に公開した（公開日：2023 年 3 月 14 日）。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と、学術交流協定の提携の準備を進めた。（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し、共同で開発した文字入力ツール（EssayLoggerTS）およびシステム（Moodle）を用いて作文のデータ収集を進めた。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの構築を行い、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に公開した（公開日：2023 年 3 月 14 日）。（注：「データベース等の構築」との重複有）。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2022 年 9 月 11 日、第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルで招待講演を行った。（オンライン、URL なし）（注：サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有）
- (2) 2022 年 12 月 10 日、台湾日本語学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」というタイトルで招待発表を行った。（オンライン）（注：サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有）

<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首頁

- (3) 2022 年 12 月 10 日、NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」において「学習者の習得過程を可視化する—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」—」というタイトルで口頭発表を行った。（オンライン）（注：サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との共同成果）

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221210a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 2023 年 3 月、寄稿論文「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」が『東アジア日本学研究』第 9 号に掲載された。

<https://www.east-asia.info/studies/009.pdf>

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2023 年 3 月 14 日、第 45 回 NINJAL チュートリアルにおいて「日本語学習者の話し言葉の分析—北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）を用いて—」というタイトルで大学院生等を対象としたオンライ

ン講習会を行った。(参加者 31 名, うち学生 20 名) (注:「大学院教育・若手研究者育成に関する計画」との重複有)【若手支援】

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230314a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230314a/)

#### 【Sと自己評価した理由】

(1) Sという評価を行ったのは、調査の計画では、漢字・漢語圏の西安外国語大学(中国)の学生のみの予定であったが、調査の実施では、非漢字・漢語圏のベトナム国家大学ハノイ校外国語大学(ベトナム)、非漢字・非漢語圏のチュラーロンコーン大学(タイ)の学生たいしても調査を行い、調査対象者の多様性が格段に増したため。

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 連携大学院(一橋大学:石黒担当)の演習において、北京師範大学で収集したデータを活用した授業を行った。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) 本プロジェクトの研究推進のために、4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し、データの収集・整理に携わったほか、プロジェクトのミーティングに参加し、文字起こしの効率的な方法などの検討を共同で行った。

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 連携大学院(一橋大学:石黒担当)の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、2名(一橋大学1名、東京外国語大学1名)の大学院生が共同研究に参画し、談話分析の方法をめぐる情報交換を行った。

### 若手研究者向けのチュートリアル等

(1) 2023年3月14日、第45回NINJALチュートリアルにおいて「日本語学習者の話し言葉の分析—北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)を用いて—」というタイトルで大学院生等を対象としたオンライン講習会を行った。(参加者31名,うち学生20名)(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20230314a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230314a/)

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の研究者の受入

(1) 現地調査を行う西安外国語大学(中国)2名、ハノイ国家大学外国語大学(ベトナム)4名、チュラーロンコーン大学(タイ)2名、および現地調査を共同で行った北京師範大学2名(中国)、北京外国語大学4名(中国)、計14名の教員を共同研究員に加え、共同研究を推進した。

### 海外の大学との連携等

(1) 連携して調査に当たる西安外国語大学(中国)と、学術交流協定の提携の準備を進めた。(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)

### 国際シンポジウムの開催

- (1) 2022年9月11日, 第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルで招待講演を行った。(オンライン, URLなし)(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)
- (2) 2022年12月10日, 台湾日本語文学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」というタイトルで招待発表を行った。(オンライン)(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)  
<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首 頁

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の作文教育支援研究

サブプロジェクトリーダー：山口 昌也

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	C
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

##### ■プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討することである。さらに、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにする。

##### ■プロジェクトの特徴

作文教育では、教師の指導のみに依拠しない、協同型の授業活動が広く行われている。そこには作文・添削活動自体を評価するプロセスが含まれているが、評価に欠かせない、作文・添削活動の記録や、記録データ活用のための環境が十分整っていないのが現状である。また、現状の作文支援システムは、グループ利用ではなく個別利用向けであるとともに、システムが作文を評価する点に焦点が置かれており、協同型の作文教育には適していない。そこで、次の二つの機能を併せ持つ、作文・添削支援システムを構築する。

#### ①教師・学習者がインターネット上で作文・添削活動を行うための機能

教室や家庭での利用、海外居住者との協同を考慮するとともに、インストール不要で利用できるよう、Webブラウザ上で動作するWebアプリケーションとして実現する。

#### ②実施された作文、添削をデータベース化し、ふりかえり活動や教師の分析を支援する機能

例えば、(1)作文や添削結果の検索、作文・添削過程の閲覧など、教師の分析や学習者のふりかえりを支援する機能、(2)学習者の気づきをグループで共有しやすくするなど、グループでのふりかえり活動を支援する機能を実現する。

この二つの機能を踏まえて、作文・添削支援システムを授業に導入する方法を確立する。アカデミックライティング（日本人大学生、日本語学習者）、作文（日本語学習者）の3種類の実践プログラムを作成し、授業で実践する。そして、実践結果から得られたデータを用いて作成する作文・添削データベースを用いて、効果的な作文添削の方法、作文技能の習得過程などを明らかにする。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

### ◆年次計画

#### 【2022年度】

既存の実践手法、支援システムを調査し、作文・添削支援システムの設計を行う。システムのうち、まず、作文・添削部分について、プロトタイプシステムを実現する。また、本システムの利用を想定した実践プログラムを設計する。【2023年度】

2022年度に実現したプロトタイプシステムを使用して、予備実践を実施する。また、支援システムのふりかえり部分の設計し、プロトタイプシステムへ機能を追加する。さらに、実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成に着手する。

#### 【2024年度】

作文・添削支援のプロトタイプシステムを使用して、（作文・添削・ふりかえりを含む）予備実践を実施する。作文・添削データベース構築の準備を開始する。実践マニュアルの作成を進める。

#### 【2025年度】

作文・添削支援システムを用いた本実践を行い、効果を検証する。また、作文・添削支援システムをインターネット上に試験公開し、合わせて実践マニュアルも公開する。さらに、これまでに実施した実践結果から共有可能なデータを選別し、作文・添削データベースを構築する。

#### 【2026年度】

作文・添削支援システムの本公開を行い、一般向けの講習会を実施する。また、作文・添削データベースの構築を進める（合計3回分の実践結果）。さらに、データベースを用いた分析を行う。

#### 【2027年度】

作文・添削支援システムの公開後のメンテナンスを行い、システムを改善する。2026年度に構築した作文・添削データベースをインターネット上に公開する。実践の結果得られた作文・添削データを活用するための講習会を開催する。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 3,200千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 作文支援、添削支援、協同学習支援など、本プロジェクトで構築する作文・添削システム開発に関する論文のほか、システムを用いた実践論文を収集・調査した。また、既存の作文コーパスについても、構築の背景、利用方法、アノテーション、データ構造などについて調査した。
- (2) 学習者のピアでのグループ活動を取り入れた教育実践を中心に国内外の文献調査を行った。また、大学などで関連する実践を行っている9名の共同研究員にインタビューし、実践方法、必要とされる機能、システム完成時の導入方法などを調査した。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) プロジェクトの設計方針、「フィールド調査・実験等」の結果をもとに、システム全体、および、作文・添削（アノテーション）支援部分の設計を行った。さらに、「フィールド調査・実験等」(2)でのインタビューにより、授業へ容易に導入できることの重要性が明らかだったため、利用者の管理部分（アカウント、グループ管理など）の設計を行った。
- (2) (1)に基づき、作文・添削部分・利用者管理部分を含むプロトタイプシステムをWebアプリケーションとして実装した。また、Webアプリケーション配布・作文データベース用のサーバを用意した。

- (3) プロトタイプシステムの完成をもとに実践プログラムの設計を行うことを計画していたが、システムの作成に時間がかかったため、実践プログラムの作成までにはならず、「フィールド調査・実験等」(2)で行ったインタビューに基づく計画段階のものにとどまった。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文縦断研究」(プロジェクトリーダー: 石黒圭教授)との会議を2回(8月, 1月)開催し、収集した作文データの活用方法を検討した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」(2023-12-10, オンライン)で本プロジェクトの紹介を行った。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221210a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表 (アウトプット)

- (1) 「データベース等の構築」1に基づき、支援システムの設計について、日本教育工学会2023年春季全国大会で口頭発表を1件行った。(2023-03-25, 東京学芸大)

<https://www.jset.gr.jp/taikai42/index.html>

#### データベース等に関する講習会・講演会 (アウトプット)

- (1) 既存の作文データ(2種類)を利用するための講習会を1回開催した。(2023-02-27, 国語研で開催, 参加者11名)

『ひまわり』講習会 <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?lesson2203>

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 7月から2名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し、ICTおよび言語データを活用した作文教育を推進できる人材を育成した。うち、1名が大学常勤職へ就職した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) 共同研究員向けにプロトタイプシステムをWeb上に限定公開した。

## 4. グローバル化に関する計画

### 英語による研究成果の発信等

- (1) プロトタイプの作文・添削支援システムに関して、ユーザインターフェイスは、多言語表示できるように実装した。現在は、日本語・英語について表示用テキストを用意している。

## 5. その他

- (1) 「フィールド調査・実験等」2で調査した作文コーパス(2種類)を教育・研究利用するための試行として、全文検索システム『ひまわり』に取り込んだ。取り込んだ結果は、著作権者の許可を取った上で、「データベース等に関する講習会・講演会」(1)の講習会の受講者に教材として配布した。また、取り込む方法はWeb上(『ひまわり』HP, GitHub, とともに【オープンアクセス】)に公開した。

JASWRIC: <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?JASWRIC>

日本語学習者作文コーパス <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?JLCC>

- (2) 「データベース等に関する講習会・講演会」(1)の講習会の補助資料として、チュートリアルビデオ5本(うち3本は既存ビデオの改訂版)をYouTubeで公開した。【オープンアクセス】

[https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?vt\\_himawari](https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?vt_himawari)

(「インストール(Windows)」『名大会話コーパス』の例』『青空文庫』パッケージの例「JASWRIC の利用」  
「日本語学習者作文コーパスの利用」)

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人の談話の縦断研究

サブプロジェクトリーダー：野山 広

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	—

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

本研究の目的と特色（研究課題）は以下の通りである。

##### 【本研究の目的】

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者に対するOPIの枠組みを活用した日本語会話の縦断的インタビュー調査について、第四期も継続するとともに、過去の収集データ（約13年分：一次データ＝当初の5年分、二次データ＝次期の8年分）の更新、整備を行い、それらのデータを公開、分析する。そのことを通して、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにする。最終的に、こうした調査・研究の成果を踏まえて、定住外国人の日本語習得過程の実証的研究に資することを目指す。

##### 【本研究の特色】

本プロジェクトでは、生活者の中で特に日本語学習を必要とする人々のニーズに応えるため、主に外国人の散在地域（秋田県A市）に定住する外国人住民（国際結婚の配偶者）に対して縦断調査を行い、生活者談話の縦断的なデータベースを構築する。本研究の特色＝課題は次の四つにまとめられる。

①生活者の日本語会話力の長期的習得過程の解明把握：OPIの枠組みを活用したインタビューを毎年1度ずつ行い、日本語会話力と言語生活・環境の実態を縦断的に探る。

②生活者支援に結びつく形成的フィードバック：学習者や現場の関係者に対する形成的なフィードバックを行うこと等を通して、現場のニーズに応じた、変革・改善に貢献できるような支援活動を行う。

③会話の傾向や特徴の分析：構築してきたデータベース及びOPIの調査結果を踏まえつつ、音声・文字化データやレイティング結果等からみえてくる会話の傾向や特徴を明確化する。

④生活者の日本語会話力の摩滅・喪失過程の解明：地域日本語教育の効果や課題、日本語会話力の習得過程及び高齢の定住外国人の日本語会話力の摩滅・喪失過程に関して明らかにするとともに、国内外の関連領域・分野の人々とネットワークを構築、拡充する。

## 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027 前半
生活者談話データ収集	収集1年目 (3~5名)	収集2年目 (3~5名)	収集3年目 (3~5名)	収集4年目 (3~5名)	収集5年目 (3~5名)	
生活者談話データベース	一次データ 公開準備	一次データ 公開	二次データ 構築開始	二次データ 構築継続	二次データ 公開	二次データ メンテナンス
シンポジウム・講習会		講演会か研修			シンポ1回	研修・講習会
刊行・出版			論文集刊行			

2022(R4)年度：縦断調査（14年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新，整備作業を継続する。

2023(R5)年度：縦断調査（15年目）のデータ収集を継続する。生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新，整備作業を終え，公開する。公開したデータ活用のための講演会あるいは研修（ワークショップ）を開催する。

2024(R6)年度：縦断調査（16年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化，整備作業に着手する。縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集を刊行する。

2025(R7)年度：縦断調査（17年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化，整備作業を継続する。

2026(R8)年度：縦断調査（18年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化データベースを公開し，公開記念のシンポジウムを開催する。

2027(R9)年度：公開した第二次（次期8年）談話データベースのメンテナンスを行い，成果を活用した研修・講習会を開催する。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 3,200千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 生活者として地域に定住した外国人（主に国際結婚の配偶者）の日本語会話（談話）に関して，OPIを活用した縦断調査を実施する予定であったが，コロナの影響で2023年4月に延期となった。
- (2) フォローアップ調査を行うと共に，次年度の研究協力者との交渉・確認を行った（2023年3月）。
- (3) 生活者としての地域に定住した学習者に対して，リテラシーに関するパイロット調査を，1948年の識字調査を活用して実施した（7月30日：岡山県岡山市，12月21日：香川県三豊市）

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 公開に向けたデータの更新，整備を行った。
- (2) 個人情報の取り扱いについては，最新の著作権法等の動向を踏まえて，改めて配慮を行った。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力を実施・展開した。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会言語学，会話分析，教育人類学等を専門とする研究者との共同研究を進めた。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 総括班と連携して本プロジェクトのサイトを作成し、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に2022年4月に公開した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) イベントの開催に際し、本プロジェクトのサイト<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>、及びTwitter[https://twitter.com/jsl\\_ninjal](https://twitter.com/jsl_ninjal)で、オープンハウス2022（「定住外国人の日本語使用と談話に関する縦断的研究」、8月）、NINJALシンポジウム（「生活者の談話等に関する縦断的研究」、12月）等の情報を発信した。
- (2) 第7回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウムを9月17日に開催した（参加者90名）。
- (3) 学習者コーパス（I-JAS）研究会を7回開催した（4月23日、6月25日、8月21日、9月17日、10月8日、12月11日、2月19日）。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 野山広（2022）「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の意義と留意点—「特定課題研究」シンポジウムより—」（【特集】「リテラシー調査の意義と課題」について）『基礎教育保障学研究』第6号、3-10、基礎教育保障学会
- ・野山広（2022）「基礎教育の保障と第一言語／第二言語としての日本語教育の重要性」『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』、211-229、ココ出版
- ・野山広・福島育子・帆足哲也・山田泉・横山文夫編（2022）『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』、ココ出版

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を2名雇用した。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 地域・社会との連携

- (1) 縦断調査やリテラシーに関するパイロット調査を通して、地域・社会との連携強化に貢献した。

### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) リテラシーに関するパイロット調査結果の暫定版報告・発表を行った（自主夜間中学全国大会，岡山，2022年8月27日）。

## 4. グローバル化に関する計画

特になし。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人のよみかき研究

サブプロジェクトリーダー：福永 由佳

#### 令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

生活者としての定住外国人は、留学生と異なり、教育機関における日本語学習を経験していない人が多いにもかかわらず、日常生活のさまざまな場面で日本語のよみかきが求められる。彼らの「字をよみかきする社会的実践」(=Literacy)は、これまで日本語教育の研究対象としては注目されることは少なく、支援の取り組みも諸外国に比べ立ち遅れていることが指摘されている。

本サブプロジェクトでは、生活者としての定住外国人の日常生活におけるよみかき社会的実践について調査を実施し、よみかき社会実践の類型化とともに、その特徴(新しいメディアや社会的ネットワークの活用等)を明らかにすることを試みる。

それらの基礎的なデータを収集し分析することにより、自治体等が提供する翻訳サービスや「やさしい日本語」をはじめとする既存の言語サービス等の有効性等を検討することやこれまで議論が及んでいなかった言語権やよみかきをめぐるイデオロギーや政治性の問題を考察することが可能となる。

本研究の最終的な目的は、生活者のよみかきを文字の学習ではなく、文字を介したコミュニケーション(字をよみかきする社会的実践)と捉えなおし、その実態を明らかにすることを通して、よみかきに関する諸課題を議論し外国人支援の充実に資することを目指す。

#### 2. 年次計画(6年間のロードマップ)

2022(R4)年度：よみかきやリテラシー等、本研究に関連する先行研究の動向を把握し、資料として整備する(500件程度)。生活者が行う字をよみかきする社会的実践を探索する予備的な調査を限定的な範囲で試行し、その結果にもとづき本調査の設計を行う。また、共同研究者を窓口として、字をよみかきする社会的実践調査(本調査)を実施予定のフィールドや研究協力者と交渉を行う。生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐりシンポジウムを開催する。

2023(R5)年度：字をよみかきする社会的実践調査(本調査)を開始し、データ収集を行う。収集したデータは順次公開に向けた文字化等の作業を行う。

2024(R6)年度：補完的データの収集と、データの分析(よみかき社会的実践の類型化とよみかき社会的実践の特徴)に着手する。

2025(R7)年度：昨年度に引き続き、データ分析を継続し、個人情報保護を含めたデータ公開の方式等を検討する。

2026(R8)年度：限定された範囲でデータの公開を行い、フィードバックを得て、公開に関する問題点の改善を行う。

2027(R9)年度：公開データのメンテナンスを行い、本格的にデータ公開を行う。データ公開にともない、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催する。

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 2,400千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての予備的な調査を実施した（8名、インタビュー303分）。
- (2) 次年度の本調査を実施するフィールドおよび研究協力者と交渉を行った（国際交流協会3団体、自治体1地域、研究協力者候補3名）。

#### データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 公開するデータの様式と規模等について、研究会議で検討を行った（オンライン7回、対面2回）。
- (2) 個人情報の取り扱いについて検討し、個人情報が含まれたデータと個人情報の消去・匿名化を施した研究用データの2種類のデータを作成することを取り決め、2022年11月の研究倫理審査に申請し承認を得た。
- (3) 調査協力者に配布する調査協力依頼書及び協力への同意書書類は、協力者の要望に応じられるよう、英語版、ローマ字版、ひらがな版を作成した。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」と連携し、地域に在住する外国人の言語問題（よみかきを含む）の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を実施した（2023年2月13日）。
- (2) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の共催で、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催した（詳細は「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照）。

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会学や移民研究を専門とする研究者との協業を進め、本プロジェクトを多角的に推進するために共同研究員として参加した（2名）。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 調査データ等の研究成果を公開するために、総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して、本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/> を開設した。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウム（国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へー中国・サハリン帰国者の事例からー」）を開催した（2023年3月12日、早稲田大学、参加者31名）  
<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html>
- (2) 国立国語研究所オープンハウス2022において、ポスター発表「文字社会日本の「よみかき」再考」を行い、本プロジェクトの問題意識等について発表した（2022年9月9日～現在 オンライン公開中）。

<https://www2.ninjal.ac.jp/openhouse/2022/announcement-c.html>

- (3) NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」において、ポスター発表「定住外国人のよみかき研究：識字から字をよみかきする社会的実践へ」を行い、本プロジェクトの趣旨・計画について発表した（2022年12月10日 オンライン）。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20221210a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/)

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員・福村真紀子氏が、識字についての文献研究に関する口頭発表「よみかきに内在するイデオロギーー日本語学習支援を再考するための文献研究」を行った（2022年11月29日 第245回 NINJAL サロン）。
- (2) 文献レビュー論文（日本語文献の文献レビュー論文5本、英語文献の文献レビュー論文3本）を本プロジェクトのサイトにおいて公開した。

<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html>

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 一橋連携大学院の講義「日本語学講義A」で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした（言語社会研究科，2022年度秋冬学期）。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者（博士後期課程在籍者）1名をプロジェクト非常勤研究員として9月から雇用し、プロジェクトに参加させ、先行研究の収集、調査票の整備、調査データの分析などを通して質的研究法を学ぶ機会を提供した【若手支援】

### 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 若手研究者3名（博士課程後期在籍者）および1名（修士号取得者）をプロジェクトに参加させ、文献レビュー論文の執筆、北海道ニセコ観光圏における予備調査、シンポジウムなどに参加の機会を持った。【若手支援】

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 若手研究者による文献レビュー論文（英語文献の文献レビュー論文3本）を本プロジェクトのサイトにおいて公開した。 <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> 【若手支援】【オープンアクセス】（既出：「共同利用・共同研究」）

### 若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者（博士課程後期在籍者）2名の研究費・旅費（予備調査参加・シンポジウム参加）を支援した。【若手支援】

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 地域・社会との連携

- (1) 地域・社会との連携を深めるために、3地域（関東、関西、北海道）の国際交流協会を訪問し、日本語学習支援の情報収集および連携の交渉を行った。そのうち、関東地域の国際交流協会の職員1名は共同研究員としてプロジェクトに参加した。
- (2) 茨城県に暮らす外国人の状況、地域日本語教育の状況について、国際交流協会担当者が研究会議において発表を行った（2022年8月31日オンライン）

### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウム（国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム「「識字」から「社会的実践と

してのよみかき」へ「中国・サハリン帰国者の事例から」)を開催した(詳細は「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照)。

#### **研究成果の社会への還元**

- (1) 文献レビュー論文(日本語文献の文献レビュー論文5本, 英語文献の文献レビュー論文3本)を本プロジェクトのサイトにおいて公開した(<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>)。【オープンアクセス】(既出:「共同利用・共同研究」)

#### **4. グローバル化に関する計画**

##### **海外の研究者の受入**

- (1) 多様な視点や幅広いネットワークを本プロジェクトに取り入れるために, 海外出身者の研究者を共同研究に参加するように積極的に働きかけ, 2名が共同研究員として参画した(ロシア出身の研究者1名, 韓国出身の研究者1名)。

# 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトは、日本語非母語話者の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その成果を教育支援に生かすことを目的としている。実質5つの研究サブプロジェクトと1つの統括サブプロジェクトによって構成され、本年度（2022(R4)）は6年計画の初年度にあたる。

共同研究プロジェクト全体の自己点検報告書と各サブプロジェクトの自己点検報告書それぞれを検討してみると、自己評価が多少自己抑制的かと思えるところが散見された。以下の各項目別コメント欄に記載したとおり、評価者の立場から、記載されている計画と実施された事柄や成果を比較・再検討して評価を一部見直した。まず、各サブプロジェクトの項目評価を一部見直し、その結果上方修正が妥当と考えたものを含む全てのサブプロジェクトの総合評価を踏まえて、統括サブプロジェクト「非母語話者日本語運用統括」の総合評価の自己評価「B」を「A」に修正した。さらに、上記の各サブプロジェクトの項目評価の一部修正を反映して、共同研究プロジェクト全体自己評価の項目の「2 大学院教育・若手研究者育成に関する計画」の自己評価「B」を「A」に修正した。

日本語非母語話者の言語運用の実態に関して、観察・調査・研究・教育・制度構築など多様な視点からの吟味検討の機運が拡大しているといえるが、本プロジェクトは包括的な観点からの研究体制を稼働させており、初年度から計画を上回っていくつかの貴重な成果を生み出していると評価できる。以下の各項目別コメント欄に記載した評価の多少の上方修正を踏まえた上で、改めて全項目の総合評価は、自己評価どおり「A」が妥当であると考えられる。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の当該項目の自己評価は「A」であるが、フィールド調査体制への参加大学の数・対象学習者数が計画を大きく上回っており、また計画にはなかった講演会等が4件、論文等によるアウトプットが2件追加されており、より高い評価（Sに近いA）が考えられる。

サブプロジェクト「定住外国人の談話の縦断研究」の自己評価は「B」であるが、共同研究の成果として計画にはなかった論文2編、共著書1冊が追加されており、評価者としては「A」評価とした。

以上の点を踏まえて、また、その他さまざまな共同研究・連携研究が遂行されていることを踏まえて、当該項目の総合評価「A」は妥当だと判断した。

#### 2. 教育・人材育成について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の当該項目の自己評価は「B」であるが、大学院生を募り「参加を促す」計画に対して、9名の院生が参加し発表を行っており、教育・人材育成面でのより高い評価（Aに近いB）が考えられる。

サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」の自己評価は「B」であるが、非常勤研究員の「雇用を検討する」計画のもとで2名の雇用とそのうち1名の大学常勤職への就職を実現している。大学などの常勤研究職への就職が非常に厳しくなっているおり人材育成の観点から十分評価に値すると言える。「A」評価が妥当ではないか。

以上の点を踏まえて、当該項目の総合評価を「B」から「A」に変更することが妥当だと考える。

### 3. 社会連携・社会貢献について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」の当該項目の自己評価は「C」であるが、2名の非常勤研究員を雇用してそのうち1名の大学常勤職への就職を実現している。上記2の後半部での指摘と同様に、人材育成の観点から十分評価に値すると言える。「B」評価が妥当ではないか。

サブプロジェクト「定住外国人のよみかき研究」の自己評価は「B」であるが、計画になかった連携活動として、関東、関西、北海道の3地域の国際交流協会との連携交渉を行い、1名の協会職員を共同研究員として採用しており、別の協会担当者がオンラインで発表も行なっている。また、計画にはなかった文献レビュー論文計8本を公開しており、総じて計画を上回る成果を上げていると考えられる。「A」評価が妥当ではないか。

以上の点を踏まえて、当該項目の総合評価「A」は妥当だと判断した。

### 4. 国際連携・国際発信について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の当該項目の自己評価は「B」であるが、以下の理由から「A」評価が妥当ではないかと考える。計画では中国、台湾、韓国、ベトナムの12大学から共同研究員を募ることになっていたが、タイ、スロヴェニア、フランスの3カ国を加えて7カ国から合計34名の共同研究員（計画時の人数は不明）を動員しており、計画を上回っていること、また外来研究員として1名招聘する計画に対して2名の招聘を実現していること、さらに計画にはなかった国際シンポジウムを2回開催していること、以上の3点が上記サブプロジェクトの当該項目「B」評価を「A」評価に変更する理由である。

以上の点を踏まえて、当該項目の総合評価「A」は妥当だと考える。

### 5. その他特記事項

複数のサブプロジェクトを組み込んだ共同研究プロジェクトであるため、評価すべき項目や内容が入り組んでいるが、評価手順としては、各サブプロジェクトの成果実績を評価し直すことで項目ごとの自己評価を見直し、その結果サブプロジェクトそれぞれの総合評価を見直して、3つの「B」評価を「A」評価に変更し、また、統括サブプロジェクトの総合評価の「B」を「A」に修正した。

さらに、上記項目別コメント欄の2に記載したとおり、共同研究プロジェクト全体自己評価の項目の「2 大学院教育・若手研究者育成に関する計画」の自己評価「B」を「A」に修正した結果、項目別の評価の全てが「A」評価となった（自己評価は「A」が3つ、「B」が1つ）が、全項目の総合評価「A」はそのまま妥当すると判断し、外部委員評価を「A」とした。

## 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告

プロジェクト名：開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

### 令和4年度プロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 計画期間内の概要

#### 1. 目的及び特色

第3期までの構築分では不足する日本語史研究資料の増補を、本プロジェクト主体による整備だけでなく、開かれた共同構築環境のもとで全国の（世界中の）研究者と連携して行う。そのために、国語研の『日本語歴史コーパス』と親和性の高い標準データ形式を共同で策定し、この形式でデータを作成するための補助ツールを開発、チュートリアルを開催して普及を図る。そのうえで、標準データ形式のデータを国語研で受け入れてコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して公開、共同利用に供する。さらに、「昭和・平成書き言葉コーパス」科研（代表者：小木曾）と連携することで上代語から現代語まで接続した真の通時コーパスとして成立させる。

なお、『日本語歴史コーパス』の増補に際しては、フィージビリティスタディを継続して機械翻訳による現代語訳付与を模索する。

#### 2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4)年度	「通時コーパス」プロジェクトの引き継ぎ OpenCHJ の環境整備  日本語歴史コーパスの増補	『日本語歴史コーパス』増補作業の引き継ぎ  「OpenCHJ 中納言」サーバーの準備 標準データフォーマットの準備・調査 拡張 Web 茶まめ（OpenCHJ 構築支援ツール）の試作 『日本語歴史コーパス』の増補（一部公開） 機械翻訳による現代語訳試行 （必要に応じ ONCOJ の更新，以下同じ）

2023 (R5) 年度	OpenCHJ の公開開始  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」によるデータ公開 標準データフォーマットの策定 拡張 Web 茶まめ (OpenCHJ 構築支援ツール) の公開 OpenCHJ チュートリアルを開催  『日本語歴史コーパス』増補データの公開 機械翻訳による現代語訳試行 (この頃までに方針決定し、 実用可能なら『日本語歴史コーパス』増補に現代語訳付与を 含める。短期的な実用化が難しい場合は基礎研究を継続)
2024 (R6) 年度	OpenCHJ の公開  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍刊行の準備  『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2025 (R7) 年度 (前半)	OpenCHJ の普及  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍の刊行  『日本語歴史コーパス』増補データの公開
	暫定評価	
2026 (R8) 年度	OpenCHJ の定着  日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催  『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2027 (R9) 年度	OpenCHJ の総括	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催

## II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 11,495千円

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 『昭和・平成書き言葉コーパス』のデータ整備を科研プロジェクトと共同で行い、雑誌・ベストセラー書籍・新聞のデータ約3340万語の整備を行った。
- (2) 『日本語歴史コーパス』江戸時代編IV随筆・紀行への作品追加のほか、近代語のサブコーパスを中心にデータの修正・整備を行った。※調査データ・データベース等公開参照
- (3) OpenCHJのXML形式について検討し、「Web茶まめ」の機能拡張について設計を行った(試作は2023年度予定)。

- ・「オープンサイエンス」科研（20K20411）で構築したコーパスアノテーション環境を活用したコーパスの形態論情報修正システム「みんなごん」を実装してコーパスユーザーから修正情報を取得可能にした。
- ・『日本語歴史コーパス』簡易検索ツール「ことねり」に意味分類による検索機能を追加して公開した（12月9日）。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (ONCOJ) の検索インターフェイスに辞書機能を追加し、ウェブページの更新を行なった（2023年3月）。【オープンデータ】
- (2) 法政大学能楽研究所と連携協定を結び（2022年9月）、謡曲データベース構築の共同研究の準備を行った。
- (3) 国立国会図書館（NDL ラボ）との連携協定について話し合いと準備を行った（2023年3月）。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 語彙資源プロジェクト・言語資源開発センターと合同で見出し語を追加し語彙素 ID に対応した古文用 UniDic10 種の開発を行った（公開は「Web 茶まめ」の更新に合わせて 2023 年度に予定）。【オープンデータ】
- (2) 言語資源開発センターと合同で『昭和・平成書き言葉コーパス』（試験公開版）、『日本語歴史コーパス』増補データを中納言上で公開した。【重複】※調査データ・データベース等公開参照

#### 異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 自然言語処理の分野の研究者を 5 名共同研究者に迎え、自然言語処理技術を活用した言語変化研究（持橋班）、古文の現代語訳研究（古宮班）を行った（論文 5、解説論文 1）。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『昭和・平成書き言葉コーパス』（試験公開版）を「中納言」上で公開した（3月24日）。
- (2) 『日本語歴史コーパス』の増補データとして、「中納言」上で以下 9 件の公開を行った。
  - 『日本語歴史コーパス』平安時代編 I 仮名文学 ver. 1.2（10月31日）
  - 『日本語歴史コーパス』和歌集編 ver. 1.1（10月31日）
  - 『日本語歴史コーパス』明治・大正編 VI 落語 SP 盤 ver. 1.0（10月31日）
  - 『日本語歴史コーパス』平安時代編 I 仮名文学 ver. 1.3（3月29日）
  - 『日本語歴史コーパス』江戸時代編 IV 随筆・紀行 ver. 0.8（3月29日）
  - 『日本語歴史コーパス』明治・大正編 II 教科書 ver. 1.1（3月29日）
  - 『日本語歴史コーパス』明治・大正編 V 新聞 ver. 0.8（3月29日）

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」シンポジウム 2023 をオンライン開催し、11 件の研究発表を行ってプロジェクトの成果を発信した。参加登録 120 名、録画配信あり（3月10日）。

#### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 第 3 期の成果を引き継いで『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』（青木博史, 岡崎友子, 小木曾智信編, ひつじ書房）を 2022 年 10 月に刊行した。
- (2) 共同研究員による研究成果として、論文 10 本、ブックチャプター 16 本（コーパスによる日本語史研究『中古・中世編』所載分を含む）、解説論文 2 本を発表した。また、学会等において 19 本の口頭発表を行った。

#### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会を「初級編」（8月23日）、「Excel 中級編」（8月26日）の 2 回行った。

(2) NINJAL サロン（言語資源開発センターのコーパスの紹介）で『日本語歴史コーパス』の照会を行った（5月24日）。

(3) 日本語学会においてワークショップ「みんなで直す『日本語歴史コーパス』—中納言+みんなごん—」を開催した（10月29日）。

#### **データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）**

(1) 『日本語歴史コーパス』の中納言について、2023年度全体で、504878件の検索があった（2022年度は456147件）。

(2) CHJを利用した研究論文数（全国学会の予稿集を含む）について、2023年3月時点での調査で、70件が確認できた（2022年度は88件確認）。

## **2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画**

### **総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等**

(1) 2023年度に開講する総研大の「言語資源学」「言語資源学演習」で『日本語歴史コーパス』を活用するためのシラバス作成・授業準備を行った。

### **プロジェクト非常勤研究員の雇用**

(1) プロジェクト非常勤研究員を2名（3月は3名）雇用して『日本語歴史コーパス』に関する知識、活用方法を習得させた。【若手支援】

### **大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加**

(1) プロジェクトに共同研究員として大学院生2名、学術振興会特別研究員（PD）1名を参加させ『日本語歴史コーパス』を活用した研究の指導を行った。【若手支援】

### **若手研究者への発表の機会の提供**

(1) 「通時コーパス」シンポジウム2023で大学院生等の若手研究者の研究発表を6件実施した（大学院生3件、プロジェクト非常勤研究員3件）。【若手支援】

### **若手研究者への研究費・発表旅費の支援**

(1) EMNLP2022（ドバイ）における口頭発表（<https://aclanthology.org/2022.emnlp-main.104/>）のため、大学院生（共同研究員の指導学生）に対する旅費の支援を行った（12月）。その他、プロジェクト非常勤研究員に対してオンライン参加のための学会参加費の支援を行った。【若手支援】

### **若手研究者向けのチュートリアル等**

(1) 『日本語歴史コーパス』『中納言』オンライン講習会を「初級編」（8月23日）、「Excel 中級編」（8月26日）の2回行った。【重出】※データベース等に関する講習会・講演会参照

## **3. 地域・社会との連携に関する計画**

### **産業界との連携**

(1) 小学館出版局との連携協定の下で「新編日本古典文学全集」を活用して『日本語歴史コーパス』の更新を行い、JapanKnowledge 本文へのリンクを継続した。

### **一般向け講義・講演会・フォーラム等**

(1) 国語研オープンハウスで「通時コーパス」に関連する一般向け発表を2件行った（9月9日）。

(2) 言語学レクチャーシリーズ「Vol.19 コーパスを使って日本語の歴史を探る」をYouTubeで一般公開した（12月）。

### **研究成果の社会への還元**

(1) 日本語の歴史に関する解説・監修をNHKのテレビ番組3件で行った（4月28日、9月6日、11月4日）。

#### 4. グローバル化に関する計画

##### 海外の大学との連携等

- (1) オックスフォード大学と連携して ONCOJ のアップデートを行った。【重出】※「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」参照

##### 英語による研究成果の発信等

- (1) 『日本語歴史コーパス』を活用して、共同研究員による国際会議 2 件 (PACLIC, EMNLP), 英語論文 1 本の発表を行った。
- (2) 『日本語歴史コーパス』の増補分について英語版ページを作成・更新した。

# 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画を上回って実施している

本プロジェクトは、第3期の「通時コーパス」プロジェクトを引き継ぎ、新たに開かれた共同構築環境を整備して通時コーパスを活用しようとするもので、本年度は、その初年度に当たる。

本プロジェクトの軸となる『日本語歴史コーパス』は、既に、日本語研究の諸分野において、必須の研究資源となっており、そのことは、同コーパスの1年間の検索クエリ数が50万件を超え、同コーパスを活用した研究論文が今年度だけで70件に及ぶことから窺える。

本年度には、自己点検報告書に列挙される通り、複数のサブコーパスを追加公開・更新し、同コーパスの増補がなされたことに加え、本プロジェクトのリーダーと共同研究員が中心に編まれた書籍『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』の刊行、ユーザーからの修正情報を集積してのコーパス内容の更新等、幾つかの優れた成果が見られている。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

総括にも示した通り、本プロジェクトの軸となる『日本語歴史コーパス』について、複数のサブコーパスを追加公開・更新しているが、中でも、歴史的録音資料の音声データともリンクさせた『日本語歴史コーパス』明治・大正編VI落語SP盤 ver. 1.0の構築・公開は、歴史コーパスの拡張の試みとして、大いに注目・評価されるべきであろう。

通時コーパスを活用した日本語史研究の推進としては、本プロジェクトのリーダー・共同研究員たちによって編まれた、青木博史・岡崎友子・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房（2022年10月）の刊行が、特筆すべき共同研究成果といえよう。

また、本プロジェクトに関連する科研費（20K20411）で開発したコーパスの形態論情報修正システム「みんなごん」を活用して、コーパスユーザーから修正情報を集積し、『日本語歴史コーパス』の修正に活用したことも、新たな共同利用・共同研究の可能性を示したものとなっている。

#### 2. 教育・人材育成について

『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会を複数回実施したこと、大学院生2名学術振興会特別研究員（PD）1名をプロジェクト共同研究員として参加させたこと等、教育・人材育成にも精力的に取り組んでいる。

（『日本語歴史コーパス』は、大学等、国内外の諸機関において、教育研究指導に活用されていると思われるが、それらの成果の収集、本プロジェクト推進への反映も、有益な試みとなると思われる。）

#### 3. 社会連携・社会貢献について

出版社・小学館との協定の下で、『日本語歴史コーパス』を更新し、同社が展開しているオンライン辞書・事典検索サイト Japan Knowledge 本文へのリンクを継続する等の活動を行っている。

なお、本プロジェクトのリーダー等は、NHKのテレビ番組等で、日本語の歴史に関する解説・監修を行なっているが、その際、『日本語歴史コーパス』の活用へのアピール等を織り込むことも、社会貢

献の一環として、考えられるかも知れない。

#### 4. 国際連携・国際発信について

英国オックスフォード大学と連携しての「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデート、『日本語歴史コーパス』の増補分について英語版ページを作成・更新等を実施し、国際連携・国際発信についても、一定の成果を示しつつある。

#### 5. その他特記事項

「共同利用・共同研究」項目でも言及したが、『日本語歴史コーパス』中に、文献資料群に加え、歴史的録音による音声データを織り込んだことは、言語史資源の活用・拡張の観点から、大いに注目すべき試みであり、今後、それを活かした研究の蓄積が期待されよう。

また、これも同項目で取り上げた「みんなごん」を活用した『日本語歴史コーパス』の修正も、新たな試みとして注目されるものであろう。

## 令和4年度 センターに関する評価

- 言語資源開発センター
- 共同利用推進センター

# 「言語資源開発センター」自己点検評価報告

センター名：言語資源開発センター

センター長：山崎 誠

## 令和4年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	C

### I. 令和4年度活動概要

令和4年度予算額 48,131千円

#### 令和4年度 成果の概要

令和4年度は主に第4期の目標であるオープンデータ、オープンサイエンスを推進するための活動を行った。具体的には、以下のとおり。

#### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) 複数のプロジェクトと共同で形態素解析用辞書 UniDic を更新した。
- (2) コーパス検索ツール「中納言」を安定的に運用し、年度末には、データの修正（名大会話コーパス）、追加（日本語歴史コーパス・日本語諸方言コーパス）、及び機能拡張を行った。利用者数は年間で4万人ほど増加した。
- (3) 外部公募の共同利用型共同研究（C）（言語資源型）を8件実施し、所外研究者との交流を図った。
- (4) 言語資源に関する知識・技術の普及を図るため、言語資源チュートリアル、「中納言」講習会を複数のプロジェクトと連携して開催した。
- (5) 言語資源開発センター専任職員・研究員による研究発表11件、データ公開1件を行った。目標をやや下回った。

#### 2. 大学院教育・若手育成に関する計画

連携大学院で言語資源に関する知見・技術の普及を図った。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ2022」を開催した。発表の実績を残すために、論文とポスターの両方を『言語資源ワークショップ2022 発表論文集・ポスター集』としてまとめ国語研の学術情報リポジトリに登録した。

#### 3. 地域・社会との連携に関する計画

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した（126件、対象者（受講者）は4133名）。

#### 4. グローバル化に関する計画

英文 HP の充実を図ったが利用成果のページを作成するにとどまった。

#### 5. その他

「中納言」のユーザグループのメーリングリストを作成し運用を開始した。

## II. 令和4年度の項目ごとの状況

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 形態素解析用電子化辞書 UniDic として以下3つの整備を行った。

①古文用の UniDic 10 種 (ver. 2022-03) を更新・新規公開した。(2022 年 4 月 18 日)

(「通時コーパス」プロジェクトと連携)

②現代語用 UniDic v3.1.1 (書き言葉用, 話し言葉用) を公開 (3.1.0 の修正版)

(2022 年 9 月 6 日)

③現代語用の UniDic v2023.3 (書き言葉用, 話し言葉用) を公開 (2023 年 3 月 24 日)

<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>

(2) 言語資源に対するメタ情報やアノテーションの標準化のための規格については, 検討を行ったが実施には致らなかった。

(3) 「分類語彙表データベース」に収録されている多義語に対して, 代表的な意味を特定したデータを作成した (公開は令和5年度)。また, BCCWJ 短単位語彙表の上位語 1000 語に対して分類語彙表番号を付与した (公開は令和5年度)。

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 外部公募の共同利用型共同研究 (C) を 8 件実施した。これは研究所が保有する言語資源を利用して研究を行うものである。使用コーパスは, BCCWJ 7 件, CSJ 2 件, CEJC 3 件。いずれもセンターの併任教員がコーディネータを務めている。

<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/>

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 「中納言」講習会の開催 (重出「データベース等に関する講習会・講演会」参照)

(2) 言語資源ワークショップの開催 (8 月 30~31 日) (重出「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照)

(3) コーパス構築に関わるプロジェクトと連携して各種コーパスのデータ修正等を実施した (重出「調査データ・データベース等公開」参照)

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

(1) コーパス検索ツール「中納言」について次の通りデータ更新等を実施した

①名大会話コーパス「中納言」データ修正 (3 月) ※多世代会話コーパス P と連携

②日常会話コーパス「中納言」メタ情報修正 (3 月) ※多世代会話コーパス P と連携

③日本語歴史コーパス「中納言」データ追加 (3 月) ※通時コーパス P と連携

④日本語諸方言コーパス「中納言」データ追加 (3 月) ※危機言語 P と連携

⑤「中納言」インターフェース機能拡張 (3 月)

⑥「まとめて検索」機能拡張 (2023 年 3 月)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ 2022」をオンラインで開催した（8月30～31日）。参加者総数 198 名（うち、国外機関からの参加 11 名、学生 50 名）。発表 55 件（口頭 14 件、ポスター 39 件、招待講演 2 件）。発表の実績を残すために、発表論文及びポスターを『言語資源ワークショップ 2022 発表論文集・ポスター集』としてまとめ国語研の学術情報リポジトリに登録した（2023 年 3 月）。
- (2) 一般の人を対象とする NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」をオンラインで開催した（2023 年 2 月 18 日、参加者 214 名）。
- (3) 若手研究者を主対象とする NINJAL チュートリアル『「分類語彙表」による日本語研究』をオンラインで開催した（8月6日、参加者 62 名）。

### 書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 発表 12 件（筆頭 2 件）、論文 0 件、データ公開 1 件。投稿中、投稿予定、掲載予定のものを入れると発表 15 件（筆頭 5 件）、論文 1 件（筆頭 1 件）、データ公開 1 件。いずれも年度内に発表・掲載のもの。

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) コーパスオンライン検索システム「中納言」の利用講習会を、コーパス構築に関わるプロジェクトと共催で次の通り 5 回開催した。
  - 「中納言」講習会（BCCWJ）（7月28日、参加者 61 名）
  - 「中納言」講習会（CHJ）（8月23日・26日、参加者 45 名・65 名）
  - 「中納言」講習会（I-JAS）（9月17日、参加者 45 名）
  - 「中納言」講習会（COJADS）（10月15日、参加者 33 名）
  - 「中納言」講習会（CEJC）（11月5日、参加者 61 名、参加者 140 名）
- (2) 言語資源チュートリアル（第 1 回・書き言葉編）をセンター主催で 8 月 4 日に開催した（参加者 47 名）。

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 講習会などを通して「中納言」の利用を促進したことにより、利用者が昨年度より 60,708 名増加し 247,223 名となった。  
<https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html>

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### 総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 教員 1 名が連携大学院（一橋大学言語社会研究科）において指導（併任教員による）。

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 非常勤研究員 3 名を雇用した。それぞれ、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」「消滅危機言語の保存研究」のデータ整備に貢献した。

### 若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 言語資源ワークショップ 2022 を開催した（8月30～31日）（重出「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照）

### 若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 若手を主対象とする「中納言」講習会を 5 回開催した。（重出「データベース等に関する講習会・講演会」参照）

### 3. 地域・社会との連携に関する計画

#### 地域・社会との連携

- (1) コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した（126件、対象者（受講者）は4216名）。

#### 一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 6月25日、26日に放送大学「コーパス日本語学概論」を実施した（受講者12名）。

### 4. グローバル化に関する計画

#### 英語による研究成果の発信等

- (1) コーパスの利用成果のページを追加した（2023年2月）

<https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html>

### 5. その他

- (1) コーパス検索ツール「中納言」のユーザグループのメーリングリストを作成し2023年1月に運用を開始した。

# 「言語資源開発センター」 評価結果

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

プロジェクトは全体的にはほぼ計画通りに進捗している。一部の目標については達成されていない点が課題となっているが、多くの分野で所期の成果が上がっている。

共同利用・共同研究はほぼ計画通り進捗しているが、メタ情報やアノテーションの標準化の規格策定が未達で、論文の発表も予定数に達していないのは課題である。

教育・人材育成については、計画通りに進捗し、言語資源の知見・技術の普及、データ整備への貢献、若手研究者への支援などを行なった。

社会連携・社会貢献は計画通り進捗し、「中納言」の授業用アカウントの発行や放送大学でのコース実施などを行なった。

国際連携・国際発信は遅延が発生し、英文HPの利用成果のページ作成にとどまっている。

その他は計画通りに進捗し、「中納言」のユーザグループのメーリングリストの運用を始めた。

若干の未達はあるものの、全体としてはほぼ計画どおりに実施されていると認め、B評価とする。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

ほぼ計画通り進捗している。古文用および現代語用の UniDic の更新・公開、8件の共同利用型共同研究の実施、言語資源ワークショップと NINJAL フォーラムの開催、15件の研究発表、5回の「中納言」利用講習会の開催に加えて、「中納言」の利用者が60,708名増加するなど、多くの活動に関して成果が上がっている。また、分類語彙表データベースのデータ作成と分類語彙表番号の付与は行われ、公開が予定されている。「中納言」のデータ更新と機能拡張も行われ、言語資源チュートリアルも開催された。このように、計画されたアクティビティとアウトプットの多くは達成され、プロジェクトの目標達成に向けてほぼ順調に進捗していると認められる。ただし、メタ情報やアノテーションの標準化の規格策定は未達であり、予定の論文2件に対して1件しか達成できなかった点も課題である。

#### 2. 教育・人材育成について

計画通りに進捗している。教員1名が連携大学院（一橋大学言語社会研究科）で指導し、言語資源に関する知見・技術の普及を図った。非常勤研究員3名を雇用し、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」「消滅危機言語の保存研究」のデータ整備に貢献した。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ2022」を開催した。発表の実績を残すために、論文とポスターの両方を『言語資源ワークショップ2022発表論文集・ポスター集』としてまとめ国語研の学術情報リポジトリに登録した。計画通り進捗している。若手を主対象とする「中納言」講習会を5回開催した。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

計画通りに進捗している。コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを126件(受講者は4133名)発行した。また、放送大学「コーパス日本語学概論」を

実施した（受講者 12 名）。

#### 4. 国際連携・国際発信について

計画の実施が遅延している。英文 HP の充実を図ったが利用成果のページを作成するにとどまった。

#### 5. その他特記事項

計画通りに進捗している。「中納言」のユーザグループのメーリングリストを作成し運用を開始した。

## 「共同利用推進センター」自己点検評価報告

センター名：共同利用推進センター

センター長：石黒 圭

### 令和4年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

### I. 令和4年度活動概要

令和4年度予算額 34,100 千円

#### 令和4年度 成果の概要

##### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) オープンアクセス方針に沿って「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での研究成果の登録・公開を推進した。今年度追加219件、総数3,020件となった。
- (2) 日本語研究・日本語教育研究分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備した。「日本語研究・日本語教育文献データベース」に5,742件を追加登録し、総データ件数は280,504件となった。
- (3) 研究図書室収蔵図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで1,542件、電子ブックを含めると1,641件となった。
- (4) 貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」に13件追加公開した。
- (5) 研究資料室収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は18件、収蔵資料目録試行版の追加登録は1,809件となった。
- (6) 研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影(67,382枚)と音声・映像資料の媒体変換(724点)を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充し(音声173点、映像46点)、共同利用環境を整備した。
- (7) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍の画像データ化の準備を行った。
- (8) 併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、構築済みのコーパスの管理・公開体制を整えた。
- (9) 日本語教育映像教材シリーズの映像データ(mp4形式)の申込制による配布を開始し、国内外から27件の利用申込があった。
- (10) 国立国語研究所が実施した社会調査の回答データを公開した。また、語彙表データを公開した。
  - ・外来語に関する意識調査(全国調査)データベース ver.1.0(2023年3月30日公開)
  - ・『日独仏西基本語彙対照表』データ(2023年3月1日公開)
- (11) 第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料12件を受け入れ、研究資料室に入室利用ができるよう資料整備を進めた。

(12) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2022年9月12日に2022年度共同利用セミナーをWeb開催で行い、研究資料室の資料3点の紹介を行った。参加者は108名であった。

(13) 所外で研究資料室の資料の紹介を3件行った（日本語教育学会春季大会、世論調査協会研究大会、図書館総合展）。

(14) データベース等に多くのアクセスを得た。

- ・ 国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数 26.3万
- ・ 日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数 19万
- ・ 日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕 セッション数 2.2万
- ・ 国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数 5,700
- ・ 共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数 3.1万
- ・ 雑誌「国語学」全文データベース セッション数 3.5万
- ・ 研究資料室の閲覧利用者 57名

## 2. 大学院教育・若手育成に関する計画

(1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進、社会調査の回答データの整備・公開のため、プロジェクト非常勤研究員を6名雇用了。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

(1) 『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を2回発行した。

## 4. グローバル化に関する計画

(1) 韓国日語教育学会、韓国日本語學會と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。

(2) 日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点追加公開した。

## 5. その他

(1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2022年度共同利用型共同研究の採択課題11件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。

(2) 言語系学会連合との覚書に基づき、言語系学会連合関連の二つの学術誌に対して研究文献データの先行提供を行った。

## II. 令和4年度の項目ごとの状況

### 1. 共同利用・共同研究に関する計画

#### データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 国立国語研究所の研究成果のオープンアクセスを加速するため、オープンアクセス方針に沿って研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を推進した。今年度追加219件、総数3,020件となった。【オープンアクセス】

<https://repository.ninjal.ac.jp/>

(2) 日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に5,742件を追加登録し、総データ件数は280,504件となった。また、大学学術機関リポジトリ及び学協会誌公開プラットフォームに掲載された論文本文PDFへのリンク件数は37,603件である。【オープンアクセス】

<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/ja/>

(3) 研究図書室収蔵図書資料の利活用のため、図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで1,542件、電子ブックを含めると1,641件となった。

<https://libgw.ninjal.ac.jp/drupal/>

(4) 国立国語研究所が所蔵する貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」に13件追加公開した。なお、2022年度に公開した「国民之友」画像は、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センターとの連携事業として作成・公開したものである。【オープンデータ】

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/>

(5) 研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は18件、収蔵資料目録試行版の追加登録は1,809件となった。

<https://rnr.ninjal.ac.jp/>

(6) 研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影（67,382枚）と音声・映像資料の媒体変換（724点）を行った。また、所内専用視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充し（音声173点、映像46点）、共同利用環境を整備した。

<http://mereco/>

#### 国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍の画像データ化の準備を行った。

#### 他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、構築済みのコーパスの管理・公開体制を整えた。

#### 調査データ・データベース等公開（アウトプット）

(1) 日本語教育映像教材シリーズの映像データ（mp4形式）の申込制による配布を2022年5月26日に開始し、国内外から27件の利用申込があった。

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/evmds/>

(2) 国立国語研究所が実施した社会調査の回答データを公開した。また、語彙表データを公開した。

・外来語に関する意識調査（全国調査）データベース ver.1.0（2023年3月30日公開）【オープンデータ】

[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo\\_zenkoku/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_zenkoku/)

・『日独仏西基本語彙対照表』データ（2023年3月1日公開）【オープンデータ】

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/fvjgfs/>

(3) 第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料12件を受け入れ、研究資料室に来室利用ができるよう資料整備を進めた。

#### 公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2022年9月12日に2022年度共同利用セミナーをWeb開催で行った。参加者は108名（うち海外機関所属者数4名、学生数10名）であった。

[https://www.ninjal.ac.jp/events\\_jp/20220912a/](https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220912a/)

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2022年9月12日，2022年度共同利用セミナー（Web開催，情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催）において，「日本語教育映像教材シリーズ」 「社会調査回答データ」「1948年読み書き能力調査資料」の紹介を行った。
- (2) 2022年5月22日，国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズ公開についての説明会，2022年度日本語教育学会春季大会  
[https://www.nkg.or.jp/event/taikai/20220521\\_2161929.html](https://www.nkg.or.jp/event/taikai/20220521_2161929.html)
- (3) 2022年11月11日，社会調査型言語調査資料の保存と活用，2022年度世論調査協会研究大会  
<http://japor.or.jp/c20221111/>
- (4) 2022年11月1ヶ月間，オンライン上で開催された「図書館総合展2022」に，国立国語研究所研究資料室が出展し，研究資料室の活動内容と各種データセットの概要の紹介を行った。  
<https://www.libraryfair.jp/poster/2022/77>

### データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) アクセス数等  
国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数 26.3万  
日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数 19万  
日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵] セッション数 2.2万  
国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数 5,700  
共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数 3.1万  
雑誌「国語学」全文データベース セッション数 3.5万
- (2) 研究資料室の閲覧利用者 57名

## 2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

### プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発，研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進，社会調査の回答データの整備・公開のため，プロジェクト非常勤研究員を6名雇用了。

## 3. 地域・社会との連携に関する計画

### 研究成果の社会への還元

- (1) 『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を2回発行した（23号は2022年7月，24号は2023年1月）。論文の関連データは毎号あるとは限らないが，23号に該当1件あり，ライセンスを明示して公開した。【オープンアクセス】  
<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/23/>  
<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/24/>

## 4. グローバル化に関する計画

### 海外の大学との連携等

- (1) 韓国日本語教育学会，韓国日本語學會と連携し，韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した

### 英語による研究成果の発信等

- (1) 日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち，その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し，Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点追加公開した。【オープンアクセス】  
<https://www2.ninjal.ac.jp/plwj/>

## 5. その他

- (1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2022年度共同利用型共同研究の採択課題11件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。
- (2) 言語系学会連合との「日本語研究・日本語教育文献データベース」掲載データのWeb公開前の先行提供に関する覚書に基づき、『日本語の研究』（展望記事執筆のため）、及び『日本語文法史研究』（「日本語文法史研究文献目録」作成のため）に、研究文献データの先行提供を行った。

# 「共同利用推進センター」 評価結果

## 令和4年度の評価

### 《評価結果》

#### 計画どおりに実施している

全体として計画どおりに実施していると認められる。

主な活動である共同利用・共同研究において数々の取り組みを進め、公開したデータベースやコンテンツが広く活用されている。これらは、日本語研究・日本語教育の発展に寄与し、日本の言語文化資産の保存・活用・普及にも貢献していると考えられる。また、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信等についてもプロジェクトが予定通り進行している。

### 《評価項目》

#### 1. 共同利用・共同研究について

計画通りに進捗している。オープンアクセス方針に沿った研究成果の登録・公開、書誌情報や貴重図書デジタル化、収蔵資料の整備・公開・保全、社会調査のデータ公開、共同研究の推進、コーパスの管理・公開、映像教材の配布、研究資料の受け入れと整備、共同利用セミナーの開催、資料の外部での紹介などの取り組みにより、総データ件数、受入図書数、デジタル化資料数、公開データ数、セミナー参加者数、データベースのアクセス数など、各分野での成果が顕著に向上した。特に、学術情報リポジトリのダウンロード回数が26.3万、日本語研究・日本語教育文献データベースのセッション数が19万に達するなど、国内外からの関心が高まっていることは特筆に値する。また、国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への協力や、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催セミナーなど、他機関との連携も進んでいる。

#### 2. 教育・人材育成について

計画通りに進捗している。「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進、社会調査の回答データの整備・公開のため、予定通り、プロジェクト非常勤研究員を6名雇用した。

#### 3. 社会連携・社会貢献について

計画通りに進捗している。『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を予定通り2回発行した。いずれも国語研のサイトで一般公開している。その際に論文の関連データがある場合は、ライセンスを明示している。

#### 4. 国際連携・国際発信について

計画通りに進捗している。韓国日語教育学会、韓国日本語学会と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとしてオープンアクセスで3点追加公開した。

## 5. その他特記事項

計画通りに進捗している。研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2022 年度共同利用型共同研究の採択課題 11 件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。また、言語系学会連合との「日本語研究・日本語教育文献データベース」掲載データの Web 公開前の先行提供に関する覚書に基づき、『日本語の研究』（展望記事執筆のため）、及び『日本語文法史研究』（日本語文法史研究文献目録作成のため）に、研究文献データの先行提供を行った。

# 令和4年度管理業務に関する評価

## 業務運営の改善及び効率化に関する取組

### 1. 組織運営の改善に関する取組

- ・研究所の管理運営に関する重要事項について審議する運営会議については、毎回（年3回開催）議事要旨を国語研ウェブサイトに掲載した。
- ・新型コロナウイルス感染症への対策のため業務運営の改善を実施すべく、特例として在宅勤務を基本としていたが、今後、コロナ禍が続いても円滑な業務が運営できるよう、週あたりの在宅勤務日数制限がある在宅勤務規程による運用に移行する準備を開始し、在宅勤務の運用に関する申し合わせについて検討を行った。

### 2. 教育研究組織の見直し（強化）に関する取組

- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」博士後期課程（3年）の令和5年4月の開設に向け、「日本語言語科学コース準備委員会」、「入学者選抜委員会」を立ち上げ、制度設計、広報の方法等について検討を行った。また、研究所で行う大学院教育の紹介ページを8月にウェブサイトに新たに公開するとともに、関連学会において「総合研究大学院大学日本語言語科学コース」のブースを出展した。また、9月には大学院説明会をオンライン及び対面で合計3回開催し40名の参加を得るなど、積極的に広報活動に取り組んだ結果、募集人員を上回る4名が入学した。
- ・機関拠点型基幹研究プロジェクトについては、各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。
- ・機関拠点型プロジェクトの6年間の計画と初年度実績を紹介するために、全ての班が連携してNINJALシンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」を令和4年12月10日にオンラインで開催した。
- ・言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室が支援して、韓国日本語学会及び韓国日語教育学会と共催で海外におけるチュートリアル授業（韓国）をオンラインにて令和4年8月6日に実施した。
- ・謡曲データベース構築に関する共同研究を進めるために法政大学能楽研究所と令和4年9月に学术交流協定を、また、第4期の体言化プロジェクトにおいて、インド諸語の体言化研究のハブとして位置づけるため、これまでも研究交流のあったデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートと令和4年7月に学术交流協定を締結するなど、大学との連携体制を強化した。
- ・IR推進室では、研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに、自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また収集したデータに基づき国立国語研究所年報を編集・刊行した。

### 3. 事務等の効率化・合理化に関する取組

- (1) 研究所における事務組織の見直し、事務等の効率化・合理化について

- ・新たに総研大業務が研究推進課の業務に加わったことから、同課の業務について見直しを行い、研究支援グループで実施していた、出張手続き等の業務について新たに新設した研究支援室の業務とすることとし、教員への対応の迅速化・効率化を図った。
- ・研究所内で実施している会議については、コロナ禍の状況を踏まえ、引き続きオンライン開催を原則としたが、令和5年度に予定されている新型コロナウイルス感染症の法的位置付けの「5類」に移行に向けて、オンラインと対面を合わせたハイブリッドでの開催を試行するなど、円滑な運営に努めた。
- ・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、引き続き外部委託を行い、業務の効率化を図った。

## (2) 機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施について

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。
- ・立川地区（人間文化研究機構国文研、国語研及び情報システム研究機構極地研、統数研の2機構4機関）で、自販機設置運営業務を実施し、116千円の手数料収入を得た。（5年契約3年目）

## 財務内容の改善に関する取組

### 1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する取組

- ・令和4年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者27名のうち24名が参加した（参加率88.9%、新規課題採択率55.6%）。
- ・4機関合同（国文研、国語研、極地研、統数研）科研費説明会（R4.6.15）に教職員16名を、人間文化研究機構科学研究費助成事業（科研費）説明会（R4.7.22）に9名が参加した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、科学研究費助成事業の採択率向上のために、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う「科研費申請準備会議」（R4.8.3, 9.7-8）を実施し、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した（令和5年度分申請20件）。（令和4年12月末現在）
- ・研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷、9刷、計8,000部。累計発行部数71,000部）され、令和4年度は電子書籍含めて約131万円の収入があった。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したもので、電子書籍、オーディオブックでも継続して配信されている。
- ・「日本語話し言葉コーパス」、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「日本語日常会話コーパス」及び「日本語諸方言コーパス」の有償頒布を行い、総額2,713万円の収入を得た。

### 2. 経費の抑制に関する取組

経費の抑制については、契約方法の見直しや、外部委託等の促進を以下のとおり実施した。

- ・所内各室廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期には軽装励行のポスターを掲示し、教職員に対してコスト削減・省エネ推進の啓発を図った。また、例年どおり4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し省エネを図った。
- ・警備業務、空調設備保守点検業務、消防用設備等点検業務、施設常駐管理業務の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、経費の抑制及び業務の効率化を図った。
- ・会議のペーパーレス化については、コロナ禍を機とした所内会議のオンライン化と、ハイブリッド開催時のタブレット端末の活用により、印刷等消耗品の削減と労務の軽減を図った。

## 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する取組

### 1. 評価の充実に関する取組

- ・所内に自己点検・評価の実施，評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員9人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議を連携して開催し，PDCA サイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家9名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。
- ・IR推進室では，研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに，自己点検・評価委員会等に情報を提供した。【再掲】

### 2. 情報公開や情報発信等の推進に関する取組

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて，外部評価委員会による研究系・センターの令和3年度及び第3期中期目標期間における実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を，ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究所の広報戦略に基づき，国語研ポータルサイト「ことば研究館」，ソーシャルメディアによる情報発信，一般に向けて発信するフォーラム・イベント（表1）など，多様な機会・メディアを通じて研究所における研究成果や活動を発信した。昨年度に引き続き一般向けのイベントであるオープンハウスやニホンゴ探検をオンライン開催し，13件の動画コンテンツを公開したところ，9,648件の参加（アクセス）があった。

表1 一般向けフォーラム・イベント等一覧

公開日	イベント名	開催場所
R4/8/1	ニホンゴ探検 2022	オンライン
R4/9/1	国立国語研究所 オープンハウス 2022	オンライン
R5/2/18	第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」	オンライン

- ・研究所ウェブサイト（メインサイト）を4月にリニューアル公開した。閲覧者の利便性の向上のため，デザインやメニューの見直し，研究所コンテンツ（データベース・コーパス類や催し物情報）の検索機能の強化等を実施した。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において，ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」26本および各種催し物，メディア掲載情報など，ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』をリニューアルし，Vol.12を3月に刊行した。
- ・研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷，9刷，計8,000部。累計発行部数71,000部）された。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し，ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したものであり，電子書籍，オーディオブックでも継続して配信されている。【再掲】

## その他業務運営に関する取組

### 1. 施設設備の整備・活用等に関する取組

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定や伐採，通路の補修等）により，計画的な維持管理を行い，職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

- ・研究所内の事務室内，廊下やエレベータ前，トイレに電力節減，夏期の軽装励行のポスターを掲示し，職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他，4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し，昨年度に引き続き省エネを図った。【再掲】

## 2. 安全管理に関する取組

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等の実施

- ・危機管理委員会（研究所の業務継続に影響しうる危機を全所的に検討する委員会として令和4年度に新設）を開催した。委員会では，「事業継続計画（BCP）（案）」に事業継続マネジメント(BCM)の概念を盛り込むのに加え，対象を地震以外の災害やネットワーク障害・ハラスメントといったインシデント等，研究所の業務継続に支障を及ぼしうる諸事態に拡充し，それらの事態に対するリスク評価を追加する改正を行った。
- ・東京消防庁立川都民防災教育センターにおいて，令和5年1月16日，18日の両日に，VR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練を実施し18名が参加した。

## 3. 法令遵守等に関する取組

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等の実施，受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督，情報セキュリティに関する研修の実施。

- ・令和3年度の監事監査において，危機管理体制の強化を求める指摘があったため，令和4年度に「国立国語研究所危機管理規程」「国立国語研究所危機管理委員会規程」を制定した。「危機管理規程」では，危機管理委員会・危機対策本部の設置，非常時参集要員の設定といった危機管理体制について明示し，また，自然災害，事件・事故，情報漏洩，ハラスメント，研究不正といった，事業の中断を引き起こしかねない事象を分類・定義するとともに，危機レベルに応じた対応フロー図を定めた。「危機管理委員会規程」では，危機管理委員会において，全所的・統括的に，想定される危機に関する情報収集・分析，BCM・BCPの検討及び定期的見直し等を行うことを明記し，平時から危機に備える体制を定めた。
- ・ハラスメント防止策として，啓発用のリーフレットを作成し教職員へ配布し周知するとともにハラスメント防止研修をオンラインで実施し，ハラスメント防止のための制度及びハラスメント被害を受けた場合の対応，ハラスメントを起こさないための注意点等について啓発を行い，112名が本研修に参加した。なお，当日受講できない職員については，録画視聴を可能とし，年度末までに国語研全教職員の受講が確認できた。
- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者に受講させていたが，令和4年度より研修受講済みの研究者についても3年毎に再受講することとした。また，eラーニングシステムを利用したコンプライアンス研修及び研究倫理研修（機構主催）を合同で実施し，134名が参加した。
- ・研究不正行為の告発に関する事案の調査結果による再発防止策の一つとして，研究公正研修「ケーススタディ」を研究所において企画し，令和5年3月9日にオンラインで実施した。なお，受講対象は全職員とし，当日受講できない職員については，後日録画視聴で受講することとした。
- ・人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修・訓練を対象者に受講させた。
- ・令和5年度以降も公開継続予定のほぼ全てのウェブサーバ（19件）及び動的コンテンツ（26件）を対象として，専門業者による脆弱性診断を実施した。
- ・業務のデジタル化を推進するため，必要な業務運営体制を整備した。
  - ・adobe株式会社のAcrobatの機能を利用した電子決裁の活用を順次広げている。

- ・オンライン会議ツールZoomの有料アカウントを追加一括契約し、アカウント割当範囲を4月から専任・特任教員全員に拡大した。
- ・新型コロナウイルス感染防止のため、特例により実施日数の制限なく在宅勤務を実施していたが、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきたことを踏まえ、週あたりの在宅勤務日数制限がある在宅勤務規程による運用に移行する準備を開始した。また、職員の在宅勤務に係る運用について現状を踏まえ再検討を行い、在宅勤務規程の改正及び在宅勤務の運用に関する詳細事項に係る申し合わせの制定について検討を行った。【再掲】

## 《管理業務に関する取組の評価結果》

管理業務はきわめて良好に行われており、すべての項目で高い評価に値し、以降も良好な状態が維持されることが期待できる。

組織運営の改善及び効率化に関しては、運営会議の議事要旨をウェブサイトに掲載し、感染症継続に備えて在宅勤務運用に関する申し合わせの検討を行った。教育研究組織の見直し・強化に関しては、「日本語言語科学コース」博士後期課程に4名の入学者を迎え入れ、また機関拠点型基幹研究プロジェクトは、自己点検・評価の体制を強化し、プロジェクト6年間の計画と初年度実績をオンライン・シンポジウムで紹介した。事務などの効率化・合理化に関しても、研究推進課研究支援グループの業務を同課研究推進グループと研究支援室に再編し研究支援業務の改善・充実を図ったり、オンライン会議の推進など様々な工夫が行われた。

財務内容の改善に関しては、科研費を中心に外部研究資金の獲得に努め、また『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』の重版が約131万円、4つのコーパスの有償頒布が総額2,713万円の収入を上げるなど、顕著な結果を残した。経費の抑制に関しても、電力節減、警備業務などの数年契約による入札、会議のペーパーレス化など高い評価に値する努力がなされた。

教育・研究などの点検・評価および情報提供に関しては、自己評価の充実を努め、所外の外部評価委員会により自己評価の検証を行った。IR推進室は自己点検・評価委員会等に情報を提供した。情報公開や情報発信等に関しては、国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書、外部評価委員会による外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。さらに国語研ポータルサイト「ことば研究館」、多数の一般向けフォーラム・イベント、広報誌『ことばの波止場』などにより積極的に広報活動を行った。

その他の業務運営に関しては、適切な施設・設備の維持管理による職員及び利用者の予防安全に努め、また様々な工夫により省エネを図り、安全管理、法令遵守等に関しても、適切な努力がなされた。

## 資 料

## 国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 片桐 恭弘 産業技術総合研究所人工知能研究センター長  
専門： 情報科学, 社会言語学
- 坂原 茂 東京大学名誉教授  
専門： フランス語学, 認知言語史
- 上山 あゆみ 九州大学人文科学研究院長/教授  
専門： 生成文法・日本語統語論
- 清水 康行 日本女子大学名誉教授  
専門： 日本語史, 国語学
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授  
専門： 哲学, 比較文化基礎論, 言語文化教育論, 日本語日本事情教育論
- 陳 力衛 成城大学経済学部教授  
専門： 日本語史, 日中言語交渉史
- 橋田 浩一 東京大学大学院情報理工学系研究科教授  
専門： 自然言語処理
- 日比谷 潤子 聖心女子学院常務理事  
専門： 社会言語学
- 米田 信子 大阪大学大学院人文学研究科教授  
専門： 言語学, フィールド言語学, 対照言語学, バントゥ諸語

任期：令和5年4月1日～令和7年3月31日（2年）

◎委員長 ○副委員長

## 国立国語研究所令和4年度業務の実績に関する評価の実施について

### 1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、基幹型共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトリーダー・センター長が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

### 2. 評価の実施方法

評価は、各プロジェクトリーダー・センター長が作成した自己点検評価報告書・実績報告書を踏まえて、書面審査を行った。「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目は次のとおりである。

点検項目	下位項目
共同利用・共同研究	フィールド調査・実験等（アクティビティ）
	データベース等の構築（アクティビティ）
	国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）
	他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）
	異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）
	調査データ・データベース等公開（アウトプット）
	公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）
	書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）
	データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）
	データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）
大学院教育・若手研究者育成	特別共同利用研究員の受け入れ
	総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等
	プロジェクト非常勤研究員の雇用
	大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加
	若手研究者への発表の機会の提供
	若手研究者への研究費・発表旅費の支援
	若手研究者向けのチュートリアル等

地域・社会との連携	産業界との連携
	地域・社会との連携
	一般向け講義・講演会・フォーラム等
	社会人を対象とするスキルアップの計画等
	研究成果の社会への還元
グローバル化	海外の研究者の受入
	海外の大学との連携等
	国際シンポジウムの開催
	英語による研究成果の発信等
その他特記事項	

## 国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日

国語研規程第 7 号

改正 平成 28 年 4 月 1 日

改正 平成 31 年 4 月 1 日

### (趣旨)

第 1 条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第 1 号）第 16 条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

### (任務)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

### (組織)

第 3 条 委員会は、10 名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

### (任期)

第 4 条 委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

### (議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (意見の聴取)

第 7 条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は，研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は，評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は，管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか，外部評価の実施に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附 則

この規程は，平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は，平成31年4月1日から施行する。

## 国立国語研究所外部評価委員会【令和4年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和5年10月26日（木） 14:30～17:00

場 所： オンライン会議（ZOOM）

### 議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和4年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和4年度「言語資源開発センター」及び「共同利用推進センター」の評価について
5. 令和4年度「管理業務」の評価について
6. その他
  - ・人間文化研究機構 第4期中期目標期間にかかる評価について

### 資 料：

- |                     |   |
|---------------------|---|
| 資料1                 | 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和5年4月1日現在）                 |
| 資料2                 | 国立国語研究所外部評価委員会規程                            |
| 資料3                 | 前回議事概要（案）（令和4年7月15日）                        |
| 資料4                 | 国立国語研究所令和4年度実績に係る外部評価 担当一覧                  |
| 資料5-1               | 機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告書                        |
| 資料5-2               | 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書                        |
| 資料6-1               | 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」<br>評価シート   |
| 資料6-2-1～<br>6-2-6   | 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」<br>自己点検報告書 |
| 資料7-1               | 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価シート               |
| 資料7-2               | 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検報告書             |
| 資料8-1               | 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価シート                |
| 資料8-2-1～<br>8-2-7   | 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検報告書              |
| 資料9-1               | 「消滅危機言語の保存研究」評価シート                          |
| 資料9-2               | 「消滅危機言語の保存研究」自己点検報告書                        |
| 資料10-1              | 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価シート              |
| 資料10-2              | 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検報告書            |
| 資料11-1              | 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価シート              |
| 資料11-2              | 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検報告書            |
| 資料12-1              | 「実証的な理論・対照言語学の推進」評価シート                      |
| 資料12-2-1～<br>12-2-6 | 「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検報告書                    |
| 資料13-1              | 言語資源開発センター 評価シート                            |

- 資料 13-2 言語資源開発センター 自己点検報告書
- 資料 14-1 共同利用推進センター 評価シート
- 資料 14-2 共同利用推進センター 自己点検報告書
- 資料 15 「管理業務」に関する自己点検シート
- 資料 16-1 令和4年度の実績に関する外部評価報告書の構成について
- 資料 16-2 国立国語研究所 令和4年度実績に係る外部評価スケジュール
- 資料 17-1 人間文化研究機構の第4期中期目標期間の評価に係る実施要領
- 資料 17-2 中期計画の管理主体まとめ（別紙1）
- 資料 17-3 各年度の報告書様式（別紙2）
- 資料 17-4 人間文化研究機構 第4期自己点検・評価スケジュール（別紙3）
- 資料 17-5 第4期中期計画 自己点検報告書【計画（3）】